

全430枚書下ろし

奇妙なフープー鳥

前編

たなか 踏基
(原典翻訳 高原伸輔)

400字詰原稿用紙 全430枚、書き下ろし

平成十八年二月二十八日前編脱稿

はだれの
みたま
班野に御霊下ろせし啓示かな・・・踏基

プロローグ

平成十二年(二〇〇〇年)三月二十八日、NHKは、ドキュメンタリータッチの番組「プロジェクトX・挑戦者たち」の放映を開始し、平成十七年(二〇〇五年)十二月二十八日に最終回を迎えていた。この番組の果たした役割は大きく、戦後の画期的な事業を実現させてきた「無名の日本人」を主人公とする「組織と群像の知られざる物語」と銘打ち、幾多の日本人に「挑戦への勇氣」と「個人の輪」の尊さを与え続けた。

番組開始の頃、米国の仕掛けたヘッジファンドに日本側がやっとなり付くと、時代は欧米との金融戦争に突入していた。欧米の巨大マネーに對抗して、銀行の合併劇が次々と始まり、銀行・証券・保険等業界の垣根が取り払われ、新興のオンラインネット証券が誕生したのは、翌年の平成十三年(二〇〇一年)以降のことである。

日本経済は、未経験の金融ビックバン時代到来で、長期低迷期を迎え戸惑っていた。

八十年代のバブル崩壊の後遺症が、七、八年の遅れをもつて不良債権を抱える金融界を襲ったからである。大蔵省の庇護の下、微温湯に浸かり、絶対に潰れない護送船団といわれていた銀行の金融バニックが始まったのである。

エコノミストは、皆自分に都合の良い理屈で、「日はまた昇る」論を早々と撤回し、自説の間違いを巧みに弁明してみせた。更に自虐的な空論で「失われた十年」の早期対策論をぶち上げようとして構造改革の必要性を盛んに説いた。

二十世紀、熱い情熱を抱き使命感に燃え、戦後の復興へと、正に家庭も返りみず、時間を忘れる心血を注いだ人々を、NHKの番組は描き続けた。描いたテーマはあらゆるジャンルと多岐に渡り、食品・家電や住宅の顧客販売開拓、車や飛行機の製品開発、巨大土木・建設工事、スポーツや災害救助、果ては最先端の医療現場に至るまで、何れも我が国初のプロジェクトに取組む強いリーダー、数多の「個」の存在だった。

そうした日本経済を支えた「個」の子鬼や大鬼のリーダー達が、また強い「個」を慕う団塊の世代と呼ばれた中高年の働き蜂にとつても、IT(Internet Technology)時代到来の第三の波、正に「質の転換」に追従できず自信を

失い掛けていた矢先である。そんな時だけに、胸詰る思いで涙し、この報道番組に食い入るように、自らの姿を画面に重ね合せていた。

企業第一線で、いや第二、第三の開発戦線に従事してきた男たちですら、「挑戦と変革の舞台裏」を描く、この報道番組は、中島みゆきの作詞・作曲の主題歌「地上の星」、エンディング曲「ヘッドライト・テールライト」の一層余韻を響かす歌と共に、当時額に汗した者の心に深く沁みだ。今や中高年開発担当者の懐古の気持ちに満足させて、NHKの人気番組に踊りだてから久しい。平成十七年の五年目を迎えても番組は継続され、暮に放映された最終回の第百八十七回は、特別に第一部、二部構成の六時間スペシャル番組をNHKは編成していた。

時折、視聴者の要望に心えて編成される、アンコール番組や特選プロジェクトXと称する再放送番組も加えれば、その放映回数も、雄に二百四十回に達する長寿番組であった。

定年延長中中には、稀に六十五歳という企業も無いではないが、殆どの企業の定年は今の所六十歳である。定年になった人々は様々な生き方を模索する。近頃では、シニア登山ブームに沸く観光地もあつたりして、生き方の本や雑誌、ネットでシニアクラブを主催する者までいる。

夫婦同伴で、長い海外旅行に出かける者、NPO法人でボランティア活動、昔の楽器を取り出し仲間とバンドを結成する者、新しくピアノを習い始める者、自分史や郷土史を描く者、スポーツを始める者、俳句や短歌の手遊びの趣味

に生きる者、その生き方は多種多様である。

男達は皆、僅かばかりの年金を頼りに、長年連れ添った女房から「濡れ落葉」や「粗大塵」と愛想づかしされないよう懸命に生き方を探る。自治体OBや官僚上がりの様に、関係省庁所属の財団や社団の法人に天下りして、庶民と異なる年金を得ながら優雅な人生を送るかと思えば、一方で家で女房から毎日愚痴られるよりは益しと、企業戦士の成れの果てと成つてでも、ピルの守衛や清掃下請け会社の臨時雇いで良いからと、労基署に泣付き無給に近い交通費のみ受給の状態でも何時もの満員電車通いを続ける。

最近、自治体でも公民館活動の一環として、シニアの生甲斐と余暇活用を目的にして、「学びすと」と称す生涯学習の講座を設け、子供の少なくなった小中学校を土日開放して教室を開いたり、まだ意欲ある人々を対象にしたシニアベンチャ企業創設を指導したり、人材バンク登録制度を設けたりしている所さえある。定年後、不幸な人生で燃え尽きる者もいる。五十〜六十歳での熟年離婚、自殺をする者、誰にも看取られることなく孤独死する者、家出して路上生活者ホームレスに成る者等である。こうした行き場を失った人々を支援し、地域の活性化に繋げようとするNPO法人、自立支援センターの動きも最近では珍しくない。

中高年の鬱病が社会現象となってきた。一方で同じ鬱状態でも、比較的はつきりとした自殺理由のある中高年と異なり、最近極めて特徴的な現象は、原因不明の若者のネッ

ト集団自殺が伝染するように拡がっている。

中高年の自殺は、確実に死ねる方法を選ぶ覚悟の自殺であるのに反して、若者の自殺は「助けて！」と無言反抗の心の叫びである。辛くあたる親や教師、いじめや失恋の友への無言の抗議、そうした人々への心理的復讐というケースも稀にあるという。

自殺という新聞等マスコミに、労働原因の過労死や過労自殺のニュースが躍ることがある。曰く「リストラ自殺」「中間管理職自殺」「蜥蜴の尻尾切自殺」は、前者中高年に多く見られる一般的な社会現象ともいえよう。

人間関係を作る弱い後者の青少年達は、傷付けるのが怖く、傷つけられるのが怖いとしながら、一方で親友や恋人を求め、深い心の繋がりをネットに求めて彷徨っている。ネット集団自殺は、二十一世紀を象徴している社会現象と言った人がいる。ネットのバーチャルの世界にはびこる、文字だけの匿名性と親密さのめり込む。自殺準備状態のまま、あたかも仮想心中相手をひたすらネットで探す自己矛盾は、一体何処から生ずるのか？

いずれにしても中高年や青少年共通して「自己否定的思考形態」の症状に鬱病との関係が、臨床心理学者によって分析されている。また昨今鬱病を克服した芸能人の闘病記や、その身近な家族や妻の介護記録が出版され、本屋店頭で見聞きするのも決して珍しいことではない。

厚生労働省の自殺死亡統計では、平成十五年(二〇〇三年)の総数は三万二千人となり、過去

最悪を記録している。年齢別では六十歳以上が、約三十%以上と多いのも特徴である。増加率では五十歳代の自殺が、四十五%以上と急増する傾向にある。三万人の自殺者の内、少なくとも毎年一万人以上は、仕事からみで自殺したとも言われている。何れの世代においても、女性よりも男性の自殺者が多いのが特徴である。

仕事上の過労・ストレスが原因で、精神傷害に陥った勤労者や自由業で売れない作家や芸能人、はたまたフリーターの青少年が、何等医療的援助を受けられないで放置されている。所謂若者のリストカット等の「自殺未遂」や「自殺予備軍」を加えれば、更に数値は増加の一途を辿るものと容易に推察できる。

中高年自殺の場合、特有の切ない時代背景が随所に垣間見える。日本経済の進展と共に、団塊の世代の以前以後では、状況が異なっている。団塊の世代以前六十歳以上の場合には、若い時は権力者の威圧に心情的に逆らいながらも、自らの生活のためまた家族のためと受け入れて指示に従ってきた。決して、中途半端な気持ちでなく、むしろ秘密を守る会社への忠誠心を發揮してサービス労働も自ら進んで、自己犠牲を厭わず好景気と会社の繁栄に貢献してきた。

最近の厚生労働省に因れば、前述の自殺死亡統計と並んで、団塊の世代以後の五十歳代サラリーマンの平均有給取得率は、年八日程度(三十%)と過去最低となったと報いられている。

何れの世代であっても、そうした労働に「個」の「エゴ」を殺し、懸命に働いてきたという

満足感と自負心が中高年の共通の勲章だった。

所がある日突然、会社に今迄奉仕と忠誠を要求してきた人事評価制度は、従来の会社のため、家族のためという尺度を否定した。全部が課長、部長、まして役員になれる訳ではない、目の前のポストという人參をさつさと取上げて、出世競争に乗り遅れたら仕事と趣味を両立させるといふ。家族のためというより、己一人の自活指南の如く、リストラされた後の心の準備、お節介にもやれ資格をとれ、やれ地域活動せよと。

ふと我が身を振り返った時、無味乾燥で無趣味な自分が其処にいた。なんのために今迄生きてきたのだ？誰のために自分がいるのだ？と自問自答しても心えは出ない。熟年離婚の急増に連れ同種TVドラマが流行る時代、シニヤ受難の時代に中高年は嫌が応でも放り込まれている。

都会に通う通勤列車の車内アナウンスで、例えばJR中央線や高崎線で、人身事故による列車の遅れを時々耳にする。自殺者の全てが、過酷な労働による鬱病が絡んだ死であるとは断言は出来ないが、平成十五年の死亡に至った過労死の労災認定申請では、請求三百六件、認定件数その半数の百五十七件と何故か少ない。

学業優秀なのに成人になることを嫌う引籠もりの青少年。巷に真昼間から屯する、フリータやニートの若者。衝動的な性愛異常者の幼女殺人、親や子を自ら殺める尊属殺人。日常化した俺々詐欺や保険金詐欺。ネットのスパムメールやスパイウェアにフィッシングと言ふ新たな手口。暗証番号のATM盗撮・etc. 昔は無かった十代青少年の糖尿病患者や心臓疾患、高血圧そして鬱病患者の症例報告は一体何を意味しているのであらうか？

今から十年前の平成六年頃は、正に癌・心臓病・脳卒中は、日本の三大成人病と呼ばれていた。当時の厚生省は平成八年に成人病という名称を、生活習慣病と改めている。

十年前の癌・心臓病・脳卒中の成人病の発症・進行には、単なる加齢だけでなく、業務・食習慣、運動習慣、休養、喫煙、飲酒等の日頃の生活習慣が大いに関係すると定義された。つまり、仕事上の過激環境変化によっても、発症原因が見出せるとされたのである。

脳血管疾患 脳内出血、くも膜下出血、脳梗塞、高血圧性脳症)や虚血性心疾患、心筋梗塞、狭心症、心停止、解離性大動脈瘤等の脳・心臓疾患の労災請求・認定件数共に大幅に増加傾向にある。業務に起因することが明らかなものとしての認定件数は、平成十四年度、十五年度とも三百件を超えるという。

事後の検証で、過労自殺者の殆どが鬱病を罹患していたと断定する精神科医師は多い。家族側も精神傷害という世間の遺傳的偏見を嫌い、普通の脳・心臓疾患と届け出される場合も多く、また企業側は鬱病と認めても内因性鬱(鬱になり易い人、脳内神経伝達物質が原因、患者の素因)として取扱う傾向がある。酷い場合は、「会社に迷惑を掛けた」と高圧的態度に出て、遺族に「申し訳ない」と詫言状を入れさせるケースすらあると聞く。

総理府統計局によると、平成十六年十月現在日本の総人口は、一億三千人弱で平成十七年(二〇〇五年)より減少に転ずるとされ、九十歳以上の人口は平成十六年に始めて百万人を超えている。男性の人口減少傾向は女性より早く、男性は約六千二百万人、女性約六千五百万人で

ある。先進諸国の少子化・高齢化傾向は共通しており、同様の社会問題を内在しているといふ。米国の商務省センサス局の、五十分おきに発表する「世界人口時計」が、六十五億人突破を報じている。二〇〇六年二月二十五日午後七時十九分(日本時間二十六日午前九時十九分)のことである。先進諸国の人口減少をよそに、発展途上国の増加速度ははるかに速く、同省の予測では、二〇二三年には七十億人を、二〇五〇年には九十二億人を突破するとされている。

世界人口の伸び率は低下傾向だが、増加は今後なお五十年間は続くといふ。二〇五〇年の国別順位は、現在一位の中国をインドが抜いて約十六億人、二位中国の約十四億人と続く。一昨年一億三千人弱の日本は、一億人を下回り、現在の順位十位から十七位に転落するという。

古代からの贈物

平成七年四月、妻永井真琴の自分探しの、この奇妙な心の旅は、東都ガス化学興産の東京研究所の元技術顧問だった、故永井剛一郎の埼玉県秩父市の自宅に、国際物流DHL經由で猫マークの宅急便の車が横付けされ、配達兼運転手が何時もの様に、分厚いA4版の歴史書を配達する処から始まるのである。

緑色の表紙の八百余頁もの自費出版の翻訳書の装丁自体は、決して奇妙でも何でも無い。誰かが膨大な時間を費やして、この翻訳を手掛けたことだけは確かであった。唯不明なのは、何処の誰が、歴史書を態々海外から届けたのか不明だった点である。平成十年十一月十日、神奈川版三紙夕刊に、

東都ガス化学興産の孫会社、川崎オリジンの工場爆発事故に関する見出し記事が掲載されたが、この記事に注目する人は余り居なかった。

神奈川経済新報

社長ら五人書類送検・工場爆発事故で

神奈川県川崎市の工場で昨年三月、作業員三人が死傷した爆発事故で、神奈川県警捜査一課は十日、爆発危険性のある物質を含むステンレス製容器の取扱について、安全対策を講じなかつたとして、東京の東都ガス化学興産の孫会社でガス精製装置メーカー、川崎オリジン(東京・芝浦)の北山社長(六十二歳)ら五人を業務上過失致死傷の疑いで書類送検した。

調べによると、川崎オリジンの社長らは、昨年三月十五日に、半導体の製造過程でつくられた有害物質と、除害剤を混ぜた容器に空気が入ると化学反応で爆発する危険性があるにもかかわらず、従業員らへの安全教育などの対策を怠つたため、同工場内で爆発を引き起こし、一人を死亡、二人に重傷を負わせた疑い。

五人はいずれも容疑を認めている。一年の四月にも取引先の工場でも同様の破裂事故があつた模様。

川崎オリジン社の話：事態を重く受け止めている。今後は安全対策に最善を尽くし、二度とかかる事故が発生しないようにしたい。ご迷惑をお掛けしました。

毎朝日日新聞

工場爆発、社員に危険業務、幹部書類送検

神奈川県川崎市の排ガス精製工場が昨年

三月、有害物質を詰めた筒が爆発し三人が死傷した事故で、県警捜査一課などは十日「川崎オリジン」(東京都・港区芝浦)の北山富士夫(六十二歳)ら当時の幹部五人を業務上過失致死傷容疑で横濱地検小田原支部に書類送検した。

調べでは北山社長らは昨年三月十五日、川崎市の同工場内で社員等に有害物質を運搬させ、安全教育や作業監督など十分な安全対策を怠つたため爆発を引き起こし三人を死傷させた疑い。幹部五人は、何れも容疑を認めたと県警捜査一課は発表している。身柄を拘束するかは未定であると。

産経共同新聞

元社長ら五人を書類送検、死傷爆発事故

東京港区の化学メーカー「川崎オリジン」の神奈川県川崎市の分工場が昨年三月、三人が死傷した爆発事故で、神奈川県警捜査一課は十日、十分な安全対策をとらなかつたため事故が起きたとして、業務上過失致死傷容疑で当時の同社北山社長(六十八歳)ら幹部五人を書類送検した。

事故は昨年三月十五日に発生。作業員が有毒ガスを付着させた粒状の薬剤が入ったステンレス製の容器を運搬中、キャスターが工場の入口の溝に引っ掛かり、転倒を防ごうとした際に容器のバルブが緩み、空気が入って爆発した。近くにいた大友治さん(当時三十四歳)が死亡、搬送作業をしていた男性二人も重傷を負った。なお「川崎オリジン」は東都ガス化学興産の孫会社。▽

業務上過失致死傷罪とは、業務上発生した致死罪と傷害罪の総称である。致死罪は、業務上必要な注意を怠り人を死亡させる犯罪であり、傷害罪は人を傷害する犯罪である。どちらも刑法二百一条に規定されている。日本の刑法では、単純な過失致死罪は「五十万円以下の罰金」、過失傷害罪は「三十万円以下の罰金または科料」であるのに反し、業務上過失致死傷罪は「五年以下の懲役もしくは禁錮または五十万円以下の罰金」と格段に重い刑が科せられている。公訴時効は、本年一月の刑事訴訟法二百五十条の改正により、殺人罪の十五年が二十五年に、業務上過失致死傷罪の場合も七年から十年に延びていた。

本罪の要件たる「業務」とは、巷で言われる「職業として継続して行なわれる仕事」ではない。「社会生活上の地位に基き継続反復して行なう行為であつて、生命身体に危険を生じ得るもの」とであるとされている。

自動車事故で人を死傷させると、業務上過失致死罪や傷害罪に問われるのはその「業務」の定義が日常の仕事と異なっているからである。

例外的に一致する業務がある。医師の仕事で、近年各病院現場で問題視されてきた、医療ミスによる業務上過失致死罪は、通常の「業務」と医師の継続反復して行なわれる医療行為からなる仕事とが一致するからである。

業務上過失による犯罪に対して、刑事責任を追及する場合、以下の五項目の諸問題が法律学者の間で論議されているという。

1. 人的ミスの追求が中心となりシステムの欠陥が見落とされ易い。
2. 現場の担当者が処罰され易い(「蜥蜴の

尻尾切り」が行なわれ易い)。

3. 事故捜査には専門知識が要求されるにも拘らず、捜査機関に専門家が始ど居ない。

4. 厳罰を恐れる余り、事故の関係者は真実を証言したがるらない。

5. 厳罰を恐れる余り、リスクが伴う業務が敬遠されるようになり、社会の運営に支障をきたす恐れがある。

親会社との出資上の確執が原因で、永井剛一朗が、東都ガス化学興産の孫会社である川崎オリジンの初代社長職を引責辞任したのは、今からもう二十数年前のことである。昭和四十八年創業後十年経過しても、スタッフに恵まれなかったためか、同社業績は低迷気味であった。

川崎オリジン社の元の会社商号は、長岡オリジナル工業(株)であった。創業社長は永井剛一朗で、地元長岡瓦斯化学工業(株)の期待の社内ベンチャー企業として、新潟の北越信用金庫から融資を仰ぎ、永井剛一朗も自ら出資をして、資本金二千万で発足したのである。

技術シーズは、永井剛一朗が、新潟研究所時代に開発した電子材料の特許技術が基本にあった。その一連の基本技術は後に、科学技術庁長官賞、大河内記念技術賞、特許庁長官賞等の賞を受賞するという数々の栄誉に輝くのである。

長岡瓦斯化学工業が、社名を東都ガス化学興産と改称したのは、三菱荒川興産と昭和四十六年に対等合併したからである。それは表向きのことで、背後の資本金のある三菱商事の実質的な乗っ取りだと兜町では囁かれた。

長岡オリジナル工業の初代社長の故永井剛一朗の引責辞任劇は、合併から二年後に起つてい

た。その人事は、合併に伴つ社内派閥力学と資本圧力の犠牲とも観られていた。それを機に、長岡郊外の工業団地(現在の上越市)に存在していた長岡オリジナル工業は、川崎オリジン社と商号変更されるや、直ぐに本社を現在の東京港区に、工場も川崎に移設されたのである。

業務引継ぎと称し、永井剛一朗が社長職に留まったのは、それから僅か一年間である。相談役として新会社に残るよう慰留されたが、永井剛一朗には最早その気は失せていた。長年の功績により、辛うじて東京研究所の技術顧問という肩書きのみ残ったのである。

川崎オリジン社の二代目社長は、親会社の長崎会長の大学後輩で覚えも目出度く、当時は上司・同僚から煙たがられていた、あのあくの強い北山富士夫が、本社から出向してきて就任したと、妻の永井真琴は噂で聞いた。

北山富士夫は、親会社長崎会長の後立てで、三菱甲陽商事から出資を仰ぐと、会社商号を川崎オリジン(株)に変更、資本金を一挙に五千万円とした。従つて親会社は、出資比率から三菱甲陽商事となったのである。社内派閥力学を巧みに利用した北山富士夫は、更に官僚天下りで親会社会長の長崎幸三を取締役相談役に据え、その顧客筋の信用を頼みに、意気揚々と後任社長として辣腕を奮う基盤を築いたのである。一時期、夫永井剛一朗と同じ新潟研究所に在籍しており、自宅で一緒だったことで名前を真琴も覚えていたようだ。

妻の永井真琴が、ドアチャイムの音でインターホンに出ると、玄関の向うに薄緑色の作業服姿の宅配便の配達人がいた。時あたかも、問題の二冊の古文書が届いた

のは、平成七年(二〇〇二年)四月、ある春愁の花曇の日のことである。嫁いだ大分の長女慶恵に、二人目の子供が生まれたという知らせを受け、直ぐ赤子の産着をデパートに頼んでいた品物が届いたものと真琴は勘違いした。「宅配便で〜す!」

「お待ちください。何処からですか?」

「社 社団法人ユダヤ研究会・・・です」

妻の永井真琴は、インターホン越しに短い遣り取りを交わし相手を確認した後に、おもむろに玄関のドアチェーンを外した。最近、秩父市周辺でも宅配便等の配達人を装った居直り強盗団の噂も報道されていたからだ。

子供達も独立して、目下年寄り一人身の永井真琴にしてみれば当然過ぎる配慮であった。永井剛一朗夫婦が、三年前にそれまで馴染んでいた東京阿佐ヶ谷の家から、埼玉県の武甲山の麓秩父市野上に引込んだ理由は定かではない。

東京暮らしに飽きたので、今後は雲取山の山麓の秩父で暮らし、文学遺跡を訪ねたり、三十四ヶ所の観音霊場札所巡りでもしながら、ノンビリと余生を送りたいと永井剛一朗は、元会社同僚や知人に漏らしていたことがあるが、本当の理由は誰も知らなかった。

真琴は、その荷姿の大きさに最初吃驚させられるのである。自宅に届いた宅急便の梱包の紐を恐る恐る解くと、分厚い奇妙な二冊の緑色した表紙の本が出てきた。

「THE SOURCE」

a novel by JAMES A MCHENR

Random House New York

社団法人ユダヤ研究会と印刷された封筒

の内部に達筆な筆文字の日本語で、謹呈の挨拶状が同封されていた。

永井剛一朗様

本遺跡を訪れた貴方に謹呈します

拝啓

これは小説であります。

登場人物と舞台は次のものを除いて創作です。英雄ラビ・アキバは叙述したように、137 BCEに死した実在の人物であります。彼に関して引用した全ての事柄は事実です。

ダビデ王とアビシヤ、ヘロデ大王とその家族、將軍ペトロニウス、ヴェスパニアヌス皇帝、將軍ヨセフスとマイモニデス博士も実在の人物で、特にマイモニデス博士についての記述は事実であります。

アッコ、ゼファトとテイベリウスはガラヤの実在の場所で、これらの町に関する叙述は史実に基づきますが、マコールは、その場所、歴史、発掘は創作です。

敬具

この古代の歴史書の内容が、後に不思議な謎を解き明かす鍵となることは、受取人の当の妻の真琴自身も全く予測だにできなかった。だが、この古代の歴史書に同封された、手紙の宛名人小柄な永井剛一朗が、この書の内容を自ら読むことはいそ無かったのである。

何故なら、夫永井剛一朗は、この歴史書が届けられる二ヶ月前の未明に、二度目の発作を起して、急死したからである。救急病院の医師の診断ではいわゆる心筋梗塞、正しく言うなら無症候性心筋虚血により、未だ日本人の平均寿命

にも達せずの六十九歳、突然の死であった。

妻の永井真琴が、来年は、古希の祝いをしようと子供達とまさに相談していた矢先の出来事であった。

一冊の古文書を、夫の仏壇に供えた。

川崎オリジンの社長職を引責辞任し、更に東京研究所の技術顧問職も辞してからは、過酷な勤務からも開放され、健康を気遣って毎年定期的に人間ドッグで検診を受けてきた永井剛一朗であった。でも若い時、あんなに好きだった山登りを止めてから運動不足気味となっていた。小肥気味に下腹が突き出し、糖尿病の気と高脂血症を医師から診断を受けて以来、血中の総コレステロールや中性脂肪の値を確かに本人は気にし始めていたことは事実であった。

ある早朝、突然書斎で自分史執筆中に倒れているのを、妻真琴によって発見された夫は、救急病院に運ばれた。永井剛一朗は、人生の区切りとして研究開発一筋で生きてきた、言わば研究に関する自分史のようなものを、妻より早く起床しては執筆するものが最近の日課となっていたからである。

未明の秩父路を疾駆した、救急車の咆哮するサイレンの音が、今でも妻の真琴は忘れられない。心停止を起した夫の身体に馬乗りになるようにして、一人の救急救命士が、除細動(電気的ショック療法)を車中で施すのを、呆然自失状態で眺めていた自分の姿を、真琴は覚えていた。既に手遅れ状態であった。

夫の突然死!

それは、長年連れ添った妻の真琴を晴天の霹靂の様に襲った。書斎で夫の急変を知らず、朝のお茶を運んで夫を発見した時に、素人なりの

心肺蘇生を施せなかった己の不甲斐なさに今でも悔いが残った。果たして、発見時に心肺蘇生を試みたとしても、蘇生したかどうかは不明であるが、心筋梗塞は、発作を起して倒れてから、最初の四分が勝負と、後で循環器の医師から聞かされたからである。更にその医師の言つには、本人は、何度となく一時的な軽い発作や胸痛を感じていたに違いない。自覚症状の胸痛は、心臓病の大切な危険サインであったのだが、一度目の発作で倒れた時、直ぐ専門医の門を叩き、詳しい検査を受けるべきだった・と。

一度目は、真琴の知らない場所起きた。

何故もつと早期に、妻として夫の病気の兆候に気付いてやれなかったのであろうか。生前もつと食事と運動に気を配った、生活スタイルがあったのではないだろうか。別な病院で事前検査を受けさせてやれば良かった。何故それができなかったのであろうか・と何度も悔やんだ。

秩父の長瀬の宝登山に、早春の蠟梅の花が今は盛りと咲く二月頃であった。故永井剛一朗の葬儀は、秩父の小さな教会で執り行われた。永井剛一朗は、必ずしも経験なクリスチャンではなかったが、妻の真琴と二人で時々、その教会を散歩がてら訪れたことがあったからである。キリスト教、特にカソリックでは、「死」を人間の原罪がもたらす刑罰とみなしている。死後は五つの場所に行くのだという。未だ若い十代の頃、東京の友人と行った教会の牧師から真琴は聞いたことがある。

邪悪の人間のいく地獄

キリストを信じ徳に生きた人間がいく天国

ここには肉の復活の希望がある

人はリン(辺獄)に行く

洗礼を受けないで死んだ幼児はリンボに行く。リンボは天国と地獄の中間にあり、ここでは地獄の苦しみはないが、神をみることはできない

キリストを信じたが罪を犯しその償いが果たされていない人間は浄化のために煉獄に行く。煉獄はリンボと地獄の中間にある

秩父の教会の牧師は、一切そんな複雑なことは言わなかった。プロテスタントの教会だったようだ。死者の魂は、死の瞬間からこの世を去って神に御手の中にある。死者の霊が彷徨ったり、生きている者に干渉することもない。葬儀は遺族の慰めと死者の記念のために執り行われた。通夜もなく死者の威徳を偲ぶ前夜祭も簡潔だった。

葬儀は、永井剛一朗らしく簡素なものであった。参列者は、元部下の田口泰雄と信州安曇野出身の登山家の梅沢紀夫以外、他人にも知らされず身内だけで密葬に近かった。

賛美歌、聖書朗読、祈祷、故人略歴、牧師の説教で葬儀は全て終わった。

娘の慶恵が、真琴の肩に手を置いて言った。「マコウ! パパ長く病まなくて幸せだったね」

長男剛志は、不思議なことを口走った。「フープは、ひょっとすると死の淵から舞戻ってくるかもしれないぜ、マコウ!」

「そうね・・・そう思うことにしましょう」

あの時は、夫の葬儀を通じてキリスト教という幾分荘厳なオルガンと賛美歌で、霊界の息吹に触れた。ところが、奇妙な歴史書は、正に古代(BCE before Common Era)時代のイスラエルを物語る、小説とも古代史

ともつかぬ代物であったから、当然一人で過ごす真琴の穏やかな心を掻き乱していた。

夫永井一朗のキリスト教の葬儀が終わった途端に、前世も前世、それこそキリスト生誕の頃、ユダヤのヘロデ王を描いた歴史書が、自宅に突然届いたからである。夫の霊魂が、この古代の書を届けたのであろうか? 真琴は奇異なる因縁めいた偶然に混乱していた。妻の真琴は、送られて来た一冊の歴史書をペラペラと繰ってみたら、先ずその膨大さに圧倒される思いがして、直ぐには読む気にとまなれなかった。

表紙裏に題名・作者名、ランダムハウス、ニューヨークと記述があるが、原典を記述した米国の作家の名も知らなければ、何処の誰が何の目的で、この膨大な小説の翻訳を手掛けたのか、全く不明で謎であった。訳者はブ口の翻訳家でない。その証拠に、訳の日本語がところどころ意味不明瞭なのである。

この古文書の送付の事実が、善意にも取れるが、また悪意にも思えてきて真琴は不安であった。悪意に取れば謎はあたかも得体の知れない相手が、生前の夫永井剛一朗に仕掛けた何かの罠のようにも思えた。

夫永井剛一朗宛ということ、恐らく生前に面識のあった者が、送付してくれたものである。その人物の名前の記述が無かったのである。自分の知らないニューヨークの作家がこの膨大な小説を描いて、それに興味を抱いた日本人の誰かが翻訳に心血を注いだに違いない。

技術者としての生前の夫の人脈の広さ、妻の全く知らない世界が存在していたことを、真琴は、この時始めて垣間見た思いがした。

同封の手紙の筆字が、自分の全く知らない世

界を生きて亡くなった夫を悼み、妻の無知の責めを問うているかのような気がしたのである。

一冊の歴史書を前にして、不帰の客となった夫の遺影に向い一人仏間で問いかけていた。一体この奇妙な歴史書は誰から送付されたの? 海外出張か何かでこの遺跡に行ったの? 何故そんなに死に急いだのよ! インコの面倒は、全部わたし一人でみなくちゃならないじゃないの! 何故会社に、そうまで滅私奉仕しなければならなかったのよ!

妻の真琴が研究者としての夫の死を受け入れるのには、時間が未だ足りなかった。結局最終的には、妻の永井真琴の手によって開封された宅急便の梱包の歴史書は、一冊は読まれぬまま自宅に保管され、もう一冊は、夫が所属した東京都ガス化学興産の秘書室に届けられた。一時期、同社の東京研究所の図書室に保管されていたが、その永井剛一朗宛の膨大な、歴史書の内容を読んだ者もいなかったとみえて、何者かの手によって、何時の間にか廃棄処分される運命を辿るのである。

自宅に一冊の歴史書が残った。

ある日、真琴は暇にまかせて、先ず冒頭の謝辞と記された頁のみ繰ってみた。

ユダヤの遺跡を発掘した考古学の本のようにだが、世界史に疎い真琴にとって、まるでチンプンカンで判じ物か呪文のような文章であった。古代の歴史書の謎は、深まるばかりであった。

謝辞

この小説を書き上げるために多くの友人や知人の協力を仰いだし、多くの文献から引用もした。冒頭そうした人々に、また文

献著作者に先ず感謝申上げねばならない。

最初の構想では、二部に分けて描く積りであったが、体力面や気力面から二部にして描く余力が残っていない気がしたので、長編となつてもよいから一部完結の形をとった。

二百四十七〜四十八頁の詩篇6と、三百九十二頁の箴言の訳文はサミュエル、サンドメル、ヘブライ文書、その文学と宗教思想の手引き(New York: Alfred A. Nbb 一九六二)から借用した。二百四十六頁の詩篇はサンドメル博士に特別に訳して戴いたものである。

二百六十三〜六十四頁の坂を登る詩篇は、特にこの本のためにイスラエルの学者達によって翻訳された。

その他の聖書の引用はジェームス王謹呈版からであるが、三百十九頁の聖パウロの言葉は、改定標準版のテモテへの第二の手紙から引用し、百四十五〜四十六頁の申命記からの文章は、「トラ・モーゼの五書、メイソレ本に基づく聖跡の新訳」(Priadelphia American Judas's Public Assoc. 一九六二)による。二百四十七〜四十八頁の応答文は、「ラビ・エフライム・オシユリの深淵からの応答」で(Jerusalem 一九六三)から転用した。若干のユダヤ文書は、C. K. パレットの「新約聖書の背景、精選文」(New York: Harper Brothers Co. 一九六一)から引用した。

ラビ・アキバの言葉からの直接の引用は、ミシュナのピエルケ・アポット小冊子、またはルイス・フィンケルシュタイの「アキバ、聖者、学者と愛国者」(New York: Meridian Books)からである。

ミシュナのピエルケ・アポット小冊子の引用または参照は主に、「ユダ・ゴールドフィン、

活きているタルムード」(New York: New American Book 一九五七)から行なった。

バビロニアのタルムードの引用と参照は主に、レオ・オイエルバッハの「バビロニアのタルムード」(New York: Philosophy Book 一九四四)からであった。

マイモニデスの引用は、大部分はレオン・ロス「迷える者の標」モーゼ・マイモニデス(New York: Philosophy Book 一九四七)である。

層3の第二部の冒頭にあるパンフレットについては、エルサレムのセシル・ロス教授に教えを戴いた。彼はこのようなリストが、文献、「カナリア諸島に於けるユダヤ人」に掲載されていると指摘してくれた。

このリストはセシル・ロス「マラノスの歴史」(New York: Meridian Book)にある。リ層3第三部のユダヤ街の生活の詳細については、主としてマルベイン・ローエンター「ドイツのユダヤ人」(New York: Longmans Green 一九三六)を参照している。(人名、書名、出版社は訳者の任意による)

括弧の部分は翻訳者の注釈であった。この古代からの贈答の書が、夫永井剛一朗の生前の活きた証を解く鍵になるような気がした。何故そう思ったのか自分でも判らなかつたが、心に語りかける古代の超自然的な御霊の大切な証言に思えてきたからである。その謎解きは、他の誰でもない妻の真琴に課せられ、時間を掛けてでも果たさねばならないものであると自覚するようになった。それは、残されて余生を生きる妻としての義務であり、務めであると観念していた。

未知なる心の旅に出ることが、亡夫の御魂の回向になるのかは疑問ではあったが・・・。

フープー(*鳥の賛美歌)

歴史書は、長い長い宗教弾圧と、古代の虐殺から現われる壮大なイスラエル建国物語のようであった。架空の遺跡発掘の町マコール(Makor=アブラハム語のThe Sourceの意)を舞台に発掘順と逆に、遺跡の下層から上層に向つて物語は展開する。本の目次に因れば、全体構成は層15〜1層に分かれていて、全文章の前後を「廃丘(Tel=アブラハム語のOfficial hill covering the ruins of an ancient cityの意)」という部分が挟んでいる。

「廃丘」とは古代の遺跡の現場であつて。大長編の内、題名から導かれて一番面白そうな「層12 フープー鳥の賛美歌」なる箇所を、真琴は順次紐解き奇妙な心の旅に出た。

(層12の始めに、挿入図の解説)

鉄の工具を利用して、玄武岩で作られた角のある供物壇。一一一六 BCE (=Before Common Era) マコール。雄牛の頭が浅いレリーフで彫刻されている。生贄の動物の血のための溝がある。四隅の「角」といわれるものの宗教的な意義の詳細は明白でない。

しかし、ヤハウェからモーゼに与えられた指しが伝えられる(旧約聖書出エジプト記29:12)「それから子牛の血を採って、指で祭壇の角に付けなければならぬ。残りの血は全部祭壇の基に注がなければならぬ」これは、新しい祭壇を神聖にするための儀式で、生贄の動物の血と角に塗りつけられる。

保護を求める逃亡者は、王の追及でさえ、聖壇の角を握っている限り安全である。

列王妃は(旧約聖書出エジプト記1:50)「そしてアドニエは、ソロモンを恐れ立ち上がり祭壇の傍まで行き、その角に掴まった」と説明されている。

*脚注

フーパー鳥 英名HOOBIE 日本名やつがしら 体長約二十八センチ 体は橙褐色で背翼尾に黒と白の帯があり、頭に扇状の冠羽根。嘴は細く長い。伝説によるとその昔ソロモン王の子分鳥で王とサバ王国のビルギースとの外交役を果たしたと伝えられる。ユーラシア・アフリカに分布する。触ると臭いといわれる。

マコールは朝だった。

鳥達は屋根で囀り、下の人込の通りでは子供たちが喧しく遊んでいた。小さな町は新しく建設された石の壁に囲まれて安全になっており、肥えた髭面に不機嫌な渋い顔、禿げ上がった頭に沢山の雀斑がある、丸々太った男が、総督の家の戸を開いて出てきた。明らかに、その男は総督から意に反した決定を下され、がっかりして曲がった町の大道りに入ると、自分の家に向った。しかし、僅か行った所で子供たちに囃し立てられた。

「フーパー、フーパー、フーパー！」

彼は立止った。困惑した顔からその影が消え、横顔が禿げた頭の後から顎までにっこりとして、顔を皺くちやにして笑った。小さな女の子を掴まえ、空に差上げ、腕に受け止めキスをした。

「可愛い、可愛い！」

女の子はキャッキョッキョと笑っていた。彼はその子を地面に下ろした。お菓子を何処かに隠している振りをして、彼はポケットを勿体ぶつ

て探し始めた。他の子もかけ寄ってきて、彼が上着を探している間中跳ね回った。上着からやつと甘いもので一杯になった袋を取り出した。子供たちにお菓子を配りながら家に向った。後ろから子供たちが楽しそうに叫んだ。

「フーパー、フーパー、フーパー！」

人間がイスラエルに存在する限り、奇妙な鳥と一緒にいる。フーパーである。それはどんな鳥よりも楽しい。ハゲくらのずんぐりした生き物で、白と黒の縞の体に橙色の頭をしていて、飛んでいるときより歩くときに特徴がある。何時もは忙しく、あつちからこつちへと地面を歩く、詳細は忘れたが重要な要件がある使者のようだ。この可笑しい鳥は、何をしようとしていたのか思い出すためにぐるぐる廻っているようにさえ見える。

その姿は奇怪である。

頭は薄い繊細なハンマーのようで、驚くような早さで上下に動く。ハンマーの頭の先にそれと判る略二センチの長さの黄色い嘴がある。見事に根元を束ねられた、略同長のふさふさした毛が生えている。その形と色が嘴に相応しい。他方は拡がって鶏冠になっている。だからこの鳥は、宝石を嵌め込んだ冠を被っているように見える。地面を忙しく歩きながら、虫のいる穴を調べ、幼虫が昆虫が隠れていれば、そのハンマーのよゆうな頭で突付いて、長い嘴で餌を掴まえるのである。それから、その鳥は岩の上に威張って行き、再び土に逃げられないその堅い地面に獲物を置き、ハンマーの頭を素早く上下させ、幼虫や昆虫を引き裂き食べるのである。その後で骨折ってもとの餌場に戻り、またあちこちと頭で突付き回るのである。

人の記憶に有る限り、この滑稽な鳥はフーパーと呼ばれてきた。その理由は、醜い短い、鋭い

鳴き声にある。雲雀のように歌えない。それどころか、鳩のよにも眩けない。イスラエルの民にとつては、彼等の住む大地の詩情をかきたててくれない。エジプト人にとつては、フーパーは神聖であった。カナン人にとつては賢さを示した。バールがその鳥に悪臭を与え、その巢に貴重な宝石を隠し、その臭いで泥棒を近付けなかったからである。ヘブライ人にフーパーは家族の忠誠の典型である。若鳥が両親の面倒をみて、冷たい夜は覆ってやり、毛の生え変わる季節には駄目な毛を取り除く。しかし、全体として、この飛べるのに飛ばない小さな可笑しい鳥は、人々の遊びの対象であった。総督の地位にある重要な男もしばしば仕事の手を休めて、この忙しい穴掘り鳥を眺めたのである。

トビサレムの、ダビエ王の辞世の終り頃、マトルの町に市民がフーパーと呼んだ技術者がいた。というのも、彼は一日中忙しく穴を覗いていたからである。渾名の由来の鳥のように、この背の低いずんぐり太った男は、皆に親しまれていた。市民達を笑わせたからでもあったし、悪気のない男として知られていたからでもあった。彼は愛嬌もあり、気前も良かったから、総督がめつたにないところであるが、彼を、フーパーはこの町で一番幸せな男だ。仕事と妻と神を順番どおりに愛している。」と言ったのである。

フーパーの仕事はマコールの町の周囲に新しい防壁を建設することであった。

この仕事を数年間やってきていた。彼の妻は好奇心に富んだ若い女、ケスリで父はかつて僧侶であり、彼女を一度エルサレムに連れて行ったことがある。そこで彼女は一度壮麗なダビエ王をみたのである。彼の神は、マコールの伝統の神々であった。古くから親しまれてきたカナン人の保護神バールである。バールは昔と同じ高所のモノ

リスに未だに住まわれていて、水の供給や城壁の建設のような日常的な活動を見守ってくれていた。モーゼの神であるヤハウエ神も居られたが、バルはエール・シャツダから段々に発展してきたヘブライの神であった。今では力を得て、高い天と人間の心を深く支配していた。マコールでは、バルのみを崇拜しているカナン人は少ない。ヤハウエのみを崇拜する、妻ケスリの父のようなヘブライ人も少ない。フープーの様に大部分の者は、ヤハウエを、外の天を支配する恐ろしい人格として受け入れ、他方でバルを日常問題を司る地域の神として崇拜し続けている。

*脚注

ダビデ王：紀元前千年頃のイスラエル二代目の王、ゴリアテを倒した青年時代の像がミケランジェロによって作られた。

フープーは三十五歳で、魅力的な妻と愛らしい二人の子供があり、他に奴隷の娘に産ませた子供達がいる。滑稽な外観に似合わず、彼は若い時、ダビデ王のために戦う勇敢な男であった。そして忠実な仕事により、マコールの城壁を再構築する仕事を与えられたのである。

彼は背が低いが肩幅もあり、筋肉は逞しく、歩くと大きな尻が揺れる。彼の禿げ頭は、大きくその上に何も被らない。彼は尖った鼻を持ち、隅々を調べては、堅い岩の代りにぼろぼろの土で代用した箇所を見付ける。また四角に切った髭をたくわえ、笑つとその髭も揺れる。彼は青い眼をしている。実際、彼は有名な先祖の行政官ウリエルをまるぼちやにしたような体躯である。行政官のウリエルは、四百五十年前にヘブライ人によりマコールが焼き尽くされまいと努

力して滅んだ。そのことは、エジプトのイクアトンに保管されている粘土板に記録されている。その大惨事の数十年後、ウーの偉大な家族は、多くのカナン人と同様に、簡単にヘブライ人の規則に適応し、名目上のヘブライ人となった。

フープーの両親は息子が支配階級として自信を深めることを望み、彼にヤバルという愛国的なヘブライ名を付けた。この名前には「ヤハウエはバルである」という意味がこめられていた。つまり、ヘブライ人以上にヘブライ的だと意味を含むと考え、このさり気無い偽装が役立つと信じていた。ヤバルは正直なヘブライ人として受け入れられるだけでなく、僧侶階級の人々からも受け入れられることを願っていた。

エジプトやメソポタミアの広大な支配が崩れて、ばらばらになった部分をダビデ王が統一して作った帝国を、ヘブライ人が支配した短い数十年間は激しい時代であった。ダビデの王国は南は紅海から北はマダカスカルにまで達し、ヘブライ人の予想もつかない富をもたらした。というのも、主要な隊商のルートはこの王国を斜めに横切ることとなり、彼等から膨大な通行料を取ることができたからである。ヘブライ人の横腹に刺さった棘といわれる国アツコは、長続きしなかったが、フェニキア人に占領されていた。

帝国の急激な成長は、拡大する前線基地としての鍵、マコールをより重要な場所として位置づけた。そして為政者である裁判官や王達は、もし中央政府に負担を掛けないでおけるなら、そこをヘブライの基地として維持したがった。

ダビデ王とその將軍達は、その小さな町に技術者がいて、彼が帝国の主要な都市と同様に働いてくれていると聞いて喜んでた。彼は毎日十、十二時間の重労働に耐え、奴隷を上手く使っ

た。彼の監督下では、モアブ、エプステ、アラム、ペリシテ、アマレクの奴隷達が殆ど死ぬこともなく、皆フープーと働くのに苦痛を感じなかったという。彼は仕事に際して十分食べさせ、病になれば休ませた。実際、奴隷達は皆、彼が城壁を叩きながら近づいてくるのを見ると楽しくなった。あちらこちらにその尖った鼻を突っ込み、冗談を言いながら建設を早めるよう奴隷達を元氣付けた。

夜になると、彼は城壁の奴隷達の惨めなキャンプに、食べ物切れ端や下等なワインを提げてやってきて、しばしばヘブライの神ヤハウエを受け入れることについて理を説いて話した。ヘブライ人になれ、そうすれば自由になれると説いたのである。彼は注意深く彼自身の名前を引用し、お前等が今迄の神を崇拜するのは自由であると説いた。彼は特別難しい言葉でなく、普通の奴隷がわかるような言葉で話したから、有る意味上手な宣教師であった。

「私の神ヤハウエは、お前の神ダゴンに似ている」
彼はペリシテ人の捕虜に向って付け加える。
「ただ、より偉大であるけれど。」

彼の奴隷達は、そうしてだんだんと名誉を傷付けずに改宗して、ヘブライ人になるのを容易にしていた。ここから良き改宗者が帝国の他の国でも役立つように育ち、かつての奴隷の一人が、ヤバル・フープーの名声をエルサレムにまで届けた。帝国の城塞の任を帯びていた將軍アムラムは、北に住む建設のマスターの話を耳にしたのである。

「近いうちに、その男がやった仕事を視察しなければならぬ。」
將軍アムラムは、マコールの町の名前を記憶して言ったのである。

フープーと彼の奴隷が完成して新しい城壁は、必然的にカナン人の壁よりやや引込んで作られた。燃滅と再築が繰り返され、土塁の上に八咫の肩が滞積していたので、頂上付近の肩は何とかしなくてはならなかった。土塁が高くなって、町として使用できる面積は小さくなった。新しい城壁は、古い城壁の内側にしか建設できなかった分、町の利用可能な面積は減少したことになる。行政官ウリエルの時代は千四百人のカナン人が、城壁の内部に住んでいた。今では八百人しか住めない。しかし、ダビデ王の良い統治のお蔭で平和であったから、城壁の外側には九百人の農民が住むことができた。これは最高の数字である。今はマコールの黄金の朝、町はまさに絶頂期にあった。ヘブライ人が王国を統治する能力を誇示した時代でもあった。

フープーは町の西方の快適な家に住んでいて、今湾曲した通りを町へ向って歩くマコールの豊かさを目にするのができた。総督は地区の役割をしつかり果して公平な判決を下し、畑や家財を所持している者を守った。ヘブライの古代の法に従えば、弱き者は権利を持ち、貧困者は隣人の恵を請求できる。税は公平に割り当てられ、罰は好い加減であった。はならない湾曲した大道の最初の部分に連なっている店は、世界各地からの輸入品で一杯である。

エジプトからの陶器、インドからの綿、ペルシャからの絹、キプロスからの青銅器、ギリシャ諸島からの美しい壺、それに近くのフェニキア人の町アッコからの素晴らしい鉄器、更にティルス、シドン及びダマスラスからの定期的に隊商が持ってきた一般の品々である。店の後ろには広々とした家が建っている。下から二丁三丁は石造りで、それから木材と漆喰で仕上げ、頑丈な天井を持ち、素敵な中庭を擁している。

フープーのいく手左にエフェルの古い寺院が建っている。今はヤハウエ神を崇拝する目立たない建物である。その真向かいにも小さな店があり、日用品を売っていた。ワインとオリブ、パンと羊毛、肉と内陸から運んできた魚。

この時代のマコールには二つの特徴がある。店の殆どは、ヘブライ人が運営しているわけではない。彼等は砂漠の民で商業に慣れていなかったからである。それに、本能的に商店の運営や資金に関する職業を避けていた。その理由は、彼等が放牧から農耕に移行したばかりであり、愛するのは土地と季節であったからである。「フェニキア人やカナン人に店を任せ、黄金を扱わせよう」と彼等は言った。

第二の著しい特徴は、文化的にもマコールはかなりの程度カナンの町のままであった事である。例えばカナンの曆を使っている。その曆は一年を夏と冬の二つの季節に分けており、マコールでは新年は古代の形である冬の終りに始まる。しかし、ヘブライ帝国の殆どが、夏の終りに新年を祝い始めていた。寺院の建設や儀式はカナンの起源である。その場所でエール神やアシメタル神が長い間崇拝されたのである。

従ってエフェル神の孫が、町にヤハウエ神を導入した時、新しい神の寺院は古い神に捧げられた建物の単なる改装に過ぎないと、言われてたのは論理的でもあった。実際、マコールの平均的市民がヤハウエ神の前に平伏す時、どの神を崇拝しているのかも説明できない。エールがバール神となり、バール神がエール・シャツダイン神となり、全てがヤハウエ神、我等の師、モーゼの神となったのである。

この時代は、ヘブライ儀式の偉大な形式の時代であった。エルサレムダビデ王を僧侶達が、

イスラエルに明確に定められた宗教を植付けようと努力した。しかし、この改革の波がマコールに届くのは遅かった。そのマコールの小さな寺院は、統一された宗教の代理者というよりは、古来からの共同体の儀式の中心として機能し続けたからである。

大通りの終り近くにフープーの家は建っていた。それは昔、彼の先祖により建てられ、穏やかな生活を営む何代もの健康な人々が住んできた。カナン人であるが、バール神への献身をしばしば隠して暮らした。二重の神への献身を続けていた。最近の世代では、公然とヤハウエ神に改宗した。息子に割礼を施し、娘を最良のヘブライ家族に嫁がせた。融合の過程は、フープーがヘブライの僧侶、サミエル・ベン・エフェルの一人娘と婚約した時に頂点に達した。そして、今は彼等が家系の主となっているのである。

この家は殆ど石造りで、内部は涼しげに漆喰を塗ってある。二つの部屋には赤と青の彩色した天井壁画がある。特別な場面を描いているわけではなく、ヘブライ人達がやってきた砂漠とカナン人達の住まいであった丘を示すものである。しかし、中心となる装飾はケリス、二十七歳のフープーの愛する妻そのものである。彼女はフープーよりやや背が高く、ずっとスリムである。顔も形良く、高い鼻、ヘブライの青い眼、象牙色の肌、それに黒い髪をしている。夫のフープーは呆れるほど彼女を愛している。彼女が宝石を欲張ってではなく、芸術品として愛でるのを知っているから、夫はしばしばエジプト製の袖を掛けた品やキプロスの瑠璃の小物を持ち帰った。こうしたささやかな宝物を、彼女は紫檀の小箱に保存しており、銀の大きなペルシャ製のペンダントを着けていた。ペンダントには、北

「私は、お前に水道壁の補修を頼んだ。先週視察して、お前のモアブ人の奴隷達は素晴らしい補修をしている」

「閣下！でも安心できません。フェニキュア人五十人で城壁は打ち壊せます」

「前回彼等は見落としてくれた」

「次はそうはいきません」

「どうしてだね？お前の奴隷達に新しい城壁を建てさせるともいっつかね？」

「全く異なつた計画が此処にあります」

フープは総督に向つて主張したのだが、総督は笑いながら、肥えた建設屋の肩に手を置いて、恩気せがましく言った。

「お前の気持ちは良く判る、フープ！城壁建設が終り直ぐに何かを始めないと、エルサレムがお前の奴隷達を取上げてしまつと恐れているのだらう。えーそつじやないかね？」

「私が言いたいのは奴隷達のことではなく、私の町の安全の事です」

「私の町？」

総督は居住まいを正すと、小柄な男が重々しく偉そうに言うものだから、聞き返した。

「そつか・そんなに言つたら聞こう？どういふことだ？」

フープは神経質そうに息を吐くと、彼の果敢な計画の最初の公式を説明した。自分の手を大きなシャベルのように使つた。

「此処、町の真中に、つまり城壁の中にこの部屋ほどの広さの堅穴をがらくたや堅い岩を

貫いて九十・キューピットほど掘り下げます・そこからトンネルを掘つて城壁の下を抜け、

井戸まで進めます」

総督は驚いて言った。

「長いトンネルだ！」

「そつです。ほぼ二百・キューピットです。そして女が歩いて通れる高さが必要です。そこで井戸は土壘に下に岩を築いて埋めます。そつすれば、どんな攻撃を受けても安全です」

彼は腕を前後に振ると、女達が地下道を安全に歩く様を示した。総督には、その構想は余りにも幻想的に過ぎて笑つしか無かつた。彼にはこの部屋と同じ位大きな穴、そんなにも深く地中を潜る穴を想像できなかった。然も堅い岩を貫いて進み、兎に角井戸まで到達するトンネル

の案は実に馬鹿げていると思つて申し渡した。

「フープ！これ以上掘返す事はできない！お前は城壁の外に畑を作り、虫を掘れ！」

総督は自分の冗談を気に入り、頭をフープ鳥のように動かして付け加えた。

「いいか！虫だ、判つたか？」

「閣下！そつです。有る点では貴方は正しい。我々は、この計画を奴隷を取上げられる前に始めるべきです」

「そつれみろ！それがお前の心配している事だ」

「それもありません。今熟練した奴隷を抱えています。あのモアブ人は今迄マコールで初めての優秀な主任です。他の者も、立派なチームになつています」

「エルサレムは奴隷をひきあげるだらう」

総督は頭を上下に幾度も振つて、この技術者に戸口を指差し、町の中沈を貫いて穴を掘るといふとんでもない考え方に戸を閉ざしたのである。

「行け！虫を掘れ」

フープは仕事場に行かず、家にぼんやりと帰つた。そこで妻のクリスの前で詳細な計画を話したのである。堅穴、トンネル、井戸の埋め立て・しかし、彼女はその計画は無理だらうと言つたので、彼は苛々した。

「堅穴の底からどうやって始めるの？傾斜したトンネルを掘つて、井戸のような小さな目標にどう到達するの？」

「それが私の仕事だ」

「どのようにして地の中をみるの？もつちのよう？」

彼女が笑つたので、想像できない人達に、自分のアイデアを説明するのに嫌気が差した。

*脚注

キューピット：古代の尺度 中指の先端から肘までの長さ 一キューピット=45〜56センチメートル

妻にキスをして別れると、家の後の城壁に登つた。今立つ高い位置から、フープは西方にアツコを見通せた。フェニキュアの船が見えた。船は港から人々や物を運んできており、何時の日かそれらの人と物資が、マコール攻略に投入されるかもしれない。その魅力ある都市は、少年の日に一度訪れて者にとつては何と遠く、フェニキュア人の力と貪欲さを理解している者にとつては何と近くにあるのである。そつか。

心が沈み、彼は城壁の上を町の北端まで歩いた。そこで後門から井戸まで通じている宿命の水道の壁を調べた。彼は自分の逆境を心配していたのではない。ワジを見下ろし、真向かいの山の傾斜を見上げたのである。その山の上に、パール神のモノリスが建てられていた。山に彼が探しているポイントがあることを確認して満足した。

「やれる！絶対に・・・」

呟きながら、再び水道の壁を見詰めた。そこに、堅穴とトンネルを組合わせる計画を重ね合わせていた。既に完成した時のことを想像して、西方のアツコを見据えて心の裡で自問自答した。

(フェニキュア人が、再度攻撃を仕掛けてきて

も、攻撃するポイントが無いではないか)

しかし、数週間の間、トンネル掘削の話は誰からも相手にされなかった。フープが、幾ら血気に燃えて総督を訪ねてもどうにもならなかった。

総督はエルサレムに援助を申し込むよりは、この首都に貢物を送って信頼を稼いでいたし、この逆になるようなことはしたくなかった。彼はマコールの富を、あちこちの地面を鳥の様に穿るフープの穴に投じたくなかった。

「もし、この案をエルサレムに持って行ったら、今度は私がここから追い払われるよ」

「貴方がエルサレムにこの案を持っていかれますか？中味を知らないじゃないですか。」

「計画をみないでも無駄とわかる」

総督は、フープが怒るのも無視して、召使にこの技術者を出口に案内するよう命じた。

フープは、良く訓練された奴隷達を失いたくなかったので、寺院地域の再舗装の仕事に付けた。それが終わると、大麦貯蔵用サイロの建設に掛かった。奴隷達がマコールの地下深く掘り、壁に漆喰で防水を施して昆虫が入らないようにして、漏水を防いだ。彼はしばしば中に入つて検査をした。戻って丸い顔と丸い髭が出口から覗くと、町の人々は騒ぐであろう。

「何を探している、フープ？虫かい？」

しかし、夜になって彼の奴隷達も引き揚げると、フープは城壁の北端に行き彼の計画が承認されれば、計画の基礎となる計算を続けた。

相互の地形から判断すると、主竪穴は後門の中側から略十の地点を、土壘に堆積した層の中を掘り下げ、更にそれから堅い岩を貫いて九十に掘り下げなければならぬ。その水準から傾斜したトンネルが始まり、井戸まで二百八十の距離である。かくして完成には四百十

大部分は堅い岩の掘削が必要になる。

(しかし、最後にはマコールは、どんな敵も奇付けない防御設備を持つことになるのだ)

彼には空の水瓶を頭上に乗せ、女達が竪穴の階段を降り、トンネルに入り、緩い斜面を下り地上に荒れ狂う敵に影響されないように隠された井戸に水を汲みに行く様子が目に浮かぶ。想像するだけでもフープの計画は安心感をもたらす。そこでアラブ月の終りに、彼は革にマスター・プランを書き終り、詳細に粘土版に記し始めた。

この革命的な案を討議できる相手が、手元にはないのは何ともやりきれない。総督は図面の抽象的な線が何を意味するのかも想像すらできないに違いない。妻のケリスは最初に、フープがもぐらのように地中を盲目状態で掘るのかと質問した位だからとても相手にできない。その夜遅く、この革の図面を巻くと町を出て城壁の外の奴隷の野営地に向った。そこは、ぞっとするような場所で、絶望の場所とても意図て良い。そこでは多くの国から囚人が、汚い小屋に押し込められ、不味い食べ物をあてがわれている。

真琴は、ここまで歴史書の一文を読み進むと、栞を挟んで本の頁をパタンと閉じた。層12「フープ鳥の賛美歌」の項だけでも七十数頁あったからであった。もちろん、目が疲れて、とても一度に読み切れるものではないという気持ち。それも確かにあった。最初、出立した奇妙な心の旅に、何とも表現できない不思議な恐怖心、いや目眩といつても良いような不安な感情に突然襲われ、その打ち寄せる心の波浪に耐えられなくなつたからである。

時代は、一九六四年考古学者の手によって

遺跡発掘現場から一挙にフラッシュバックして9831 BCE (Before Common Era) に遡り始まり、舞台は、ダビデ王の時代イスラエルのマコールという町、主人公はフープと子供達からさえ揶揄される男、そう呼ばれるが実は城塞建設の優れた穴掘りの専門技術者である。

首振つて穴を掘り虫を捕える習性を持つ、奇妙なフープ鳥が、この世に存在すること態からして真琴は無知だった。つまりフープは、地面に穴掘る男の渾名である。戦利品の奴隷を上手く使い、城塞や隧道工事をやる小太りの技術者なのである。なのにフープこそ、前世の夫永井剛一朗だったのであるまいか？輪廻転生という言葉があるが、BC (Before Christ) 年の異国にも、故永井剛一朗の魂が実在していたという超常的・超心理学的な幻である。

時に日本語訳の稚拙さの故にか、目に訴える太古の言葉や挿入図版が、真琴の心に始め切々と、しかも最後にどかっ！と語り掛けたのであった。それは、恐怖心にも似て、耳の奥で耳鳴りのように、ブーンという低い波長に変わって響いてきたからである。

今、この翻訳書を読んで二十世紀の自分が全てであろうか？あたかも、太古のイスラエルにもう一人の自分の分身、フープの妻ケリスが存在していて、それが無遠慮に逆撫でて心に語りかけてくるような幻夢である。心の奥に混沌とした潜在下の塊となって、自分の目に見えぬ分身が、何処かになお存在している。

然も執拗に今語り掛けてくるのである。異次元の世界を覗き込みながら、分身現象を起こした自分が、BC古代の異界に存在しているのである。それは、自分が無意識な内に多重

人格者の呪師になったような錯覚であった。
真琴は、夫永井剛一朗が亡くなってから、時々重い鬱症状に見舞われていた。

内部告発の男

平成十七年十二月、夫の永井剛一朗が死んで十年余りの歳月が流れていた。残された夫の自史を何度となく読んだが、フープー鳥の謎解きの結末が、心の奥で真琴を再度駆り立てても、一度読み終えたBC古文書を、再読する気になれず十年間放置された。紐解く度に、超常世界に遊ぶ亡夫を意識した。読むことを止めた時必ず、永井真琴は、東京阿佐ヶ谷時代から飼っていた二匹のインコと馴れ親しんで暮らした。

埼玉県秩父市野上に転居してから、永井真琴は独り言が増えていた。合鍵を打つてくれるのは、二匹のインコであった。でも、夫の死に半分安堵の思いもあり、その実態から完全に癒えたとは、少なくとも毎日自分にそう言い聞かせる妻の真琴である。一人でひっそり生きて、秩父の我家から余り外出する事は無かったが、それでも時折、気晴らしに電車に乗り芝居見物や買物で東京に出た。

夫の死後も、家を訪れる客が二人いた。年に二度、陣中見舞いと冗談を言いながら、元部下の田口泰雄が、律儀に手土産持参で夫の霊前に線香を上げに来た。もう一人信州安曇野出身の登山家の梅沢紀夫は、秩父山塊縦走の帰りだといってフラリと立寄ることがあったが、もうけた二人の子供、剛志と慶恵も独立して居を構え、殆ど秩父の山中までは尋ねて来ず、最早小うるさい老婆に寄り付かなくなっていた。

この年の冬の訪れは、例年より早く北極から南下の寒気団に日本列島はスッポリ覆われる形になり、暮から正月休み明けにかけて、略二十年振りの寒気と大雪に各地が見舞われていた。

南国の鹿児島市ですら、十一センチの雪が積もり実に八十八年振りという、観測史上最高の降雪を記録していた。同県含む九州南部一帯は、上空に寒気が流れ込み、宮崎市では六十年振り、種子島でも十二月として、昭和四十年(一九六五年)以来、四十年振りの雪を観測していた。もちろん裏日本の新潟や北陸の豪雪地帯ほどではなかったが、十二月上旬の秩父夜祭で賑う、東京から電車で一時間半の交通至便のここ、秩父市周辺にも少し雪が降った。

自宅の玄関前で簡単に雪掻きの真似事をした妻の真琴は、連日のTV報道を観て夫と共に過ぎた長岡市での、二度の豪雪体験が甦っていた。一番酷かった昭和三十八年の通称三八豪雪、一ヶ月間雪に閉じ込められた暮らし、昭和五十六年の通称五六豪雪、引き籠もりの長男剛志と共にした雪との戦いを想い出していた。雪国の郊外に、長岡瓦斯化学工業株の新潟研究所があったからである。

三八豪雪を異郷で初めて経験した永井真琴は、終日昔を思い出しては、二匹の愛鳥のインコに話掛けながら、TV画面に食い入るようにして、ドカ雪報道に注目した。

真琴は、浅草神社(三社様)のある下町育ちであったから、結婚三年目、長岡の豪雪初体験は無駄でなかったと想い込んでいたのに……。三八豪雪の時、真琴は、結婚し剛志が産まれて間もない頃だったから、何よりも若かったから、ひたすら雪の重みを耐え忍ぶことができた。

五六豪雪の時、雪よりも十八歳になった引き籠もりの長男剛志との戦いに疲れて暮らした。

何れの豪雪時も、例え夫の永井剛一朗が幾度となく研究所で徹夜して、帰宅しない時ですら、あの長岡の人々から習い覚えた「忍従」と「克雪」の二字を胸に秘めていた。もし老いた一人身の今、TVに映る豪雪の世界に放り出されたらと、想像するだけで空恐ろしかった。

今年の寒さは来年の一月前半まで続く見通しと、長期予報では暖冬を予想した気象庁だったが、「寒気の南下が想定以上に長期化し、強烈だった」として、早くも予報の修正を余儀なくされた。記録的な積雪となった理由は、蛇行する偏西風の影響を受けて北極圏の寒気団が日本列島に流れ込んだためと解説した。

雪の降り方、北極圏からの寒気の張出し、三八豪雪にそっくりだわ！年明けにはもつと雪が降るのかしら？また野菜が高くなるわネ・でもきつと、あの時の様に白魔の猛威はきつと終わるわよ！フープー鳥は白魔の前では死に絶えるわ

真琴はTV画面を観ながら自問自答した。気象学の専門家や気象予報士は「三波構造」を指摘した。日本上空五千メートル付近を流れる偏西風の蛇行、ヒマラヤ山脈にぶつかる等の地形的な影響を受けて、気圧の谷が北極圏から、日本列島、北米大陸、ヨーロッパ北部の三方面に及ぶ「三波構造」が出現したとした。

今年も師走に入り直ぐ、日本列島に雪の便りが聞かれたと思ったら、中旬には真冬並の一級寒気団に包まれ、北海道から東北、新潟、北陸、山陰の裏日本全域で豪雪、大雪、ドカ雪に見舞われた。追討ちを掛けるかのよつに、

青森の太平洋海域に台風並に発達した冬の低気圧、一部TVの解説では爆弾低気圧(マイクロバースト)と呼称、が出現し、日本海側の寒気を呼び込んで、二十〜三十数kmの暴風雪となった地域もあった。

気圧の谷に寒気が流れ込むため、今月中旬から、シベリア付近にあった零下四十以下の猛烈な寒気団が、典型的な冬型気圧配置を形成した。TV画面上で気象予報士の指し示す、等圧線は六〜九本と日毎に密に重なり、日本列島上空に居座る状態となっていると解説した。

地形と気流の関係で九州、四国地方ですら降雪があった。十一月積雪記録更新となった地域は、新潟北陸中国地方の山間部を中心は何と百地点を越えた。この内、群馬県水上町(二百四十四cm)や岐阜県本巣市(百七十一cm)等十地点で年間の最大積雪を越え、秋田県五城目町(百三十七cm)、新潟県津南町(三百九十三cm)、長野県信濃町(百五十九cm)等十五地点は、観測史上で過去最大積雪量を超えた。

新潟県津南町では、十五日未明には積雪が二mを越え、明けて五日四m程の未曾有の豪雪となった。過去最大の降雪で、住民は雪下ろしと雪掘りで、疲弊し切っていたのである。あの「北越雪譜」で著名な鈴木牧之の紀行文「秋山紀行」の舞台、秋山郷も陸の孤島と化した。平年十二月の積雪量の三〜五倍の大雪となり、新潟県内で冬の災害、雪下ろし中に死者が出たと報じられていた。

新潟県危機管理防災課の平成十八年一月九日現在の発表では、死者十三、重軽傷五十三、軽傷者八十九名、計百五十五人が早くも報告された。何れも豪雪地帯の長岡、南魚沼、湯沢、上

越、十日町、妙高地域であった。

因みに、中越大地震のあった昨年の豪雪時の県内死者は、二十六名、重軽傷者を加えて百七十三名の人的被害が既に報告された。

二十二日午前八時過ぎ、新潟市内含む近辺の下越地方でも、送電系統のトラブルで、暴風雪による六十万所帯の大規模停電が発生した。

東北電力の必死の復旧作業で、二十三日終日までには、停電地域は極限定所帯にまで減った。塩分を含んだ氷雪が送電線に付着、碍子の絶縁不能状態となり、加えて暴風雪で煽られた電線同士の間で空中接触で、ギャロツピング現象を起こしてショートしたのが主要原因と判明した。悪天候のためヘリコプターを飛ばすことができず、作業員が鉄塔にも登れず、目で塩分除去のため、地上から高圧の水で洗淨し、停電地域に電源車を導入し電力を供給し復旧に努めた。また電力会社の幹部が、新潟県副知事に陳謝したとも報じられた。

NTT東日本新潟支店管内でも、停電により電話が掛かり難い状況となった。近畿地方でも関西電力大飯原発の送電線の着雪が原因となつてか、七十万世帯が一時停電したため、JRや地下鉄が一時運転不能になった。

交通機関にも、大きな影響がでた。新潟県内の略全域で、在来線の運転が停止となった。JR東日本管轄では、首都圏と東北や北陸の各地を結ぶ夜行列車の一部が運休し、上越線や信越線の一部の区間でも視界不良等が原因となり、運転を見合わせるケースが相次いだ。東海道・山陽新幹線は一部区間が徐行運転となり、上下線計二百十五本で最大七十三分の遅れが生じ、約十九万人が影響

を受けた。雪害対策を施された、上越・信越

新幹線の事故はそれまで余り報じられなかったが、新潟の停電により長岡〜新潟間で上下五本が運転を一時見合わせたのである。

正月明けの五日、災害対策本部が設置された地域、東北の秋田新幹線は全休となった。

高速道路では、北陸道の新潟中央JCTと糸魚川IC間の約百六十五kmに渡り、上下線が一時不通となった他、関越道や日本海東北道、上信越道、磐越道、山形道でも視界不良等が原因で一部区間が十八日未明から通行止めになった。空の便も北海道や東北と各地を結ぶ便を中心に、日本航空で百十二便、全日空百六十八便、計二百便以上が欠航した。

悪い時に列車事故が重なった。

二十五日羽越本線砂越〜北余目間最上川第二橋梁付近で、特急「いなほ十四号」の脱線転覆事故が発生し、四人死亡、三十三人が重軽傷を負ったと始め報じられた。原因は調査中とされたが、橋梁の下方から車体を持上げる突風により、不安定になっていた車両斜め前方から吹いた更なる暴風雪に揚力が作用した脱線したと。四人の死者の後、五人目の遺体が雪の下から掘り出されたという報道があった。重軽傷者数が、直ぐ三十二人に改正されたが、真琴は胸ふたがれる思いで聞いた。

あの時の三八豪雪の惨禍の記憶が、真琴の心に甦っていた。雪下ろしの肝心の男子、夫永井剛一朗は、研究所から帰ってこないのである。いや雪に阻まれて帰宅できないのである。周辺の雪の処理は、社宅の人間の応援を得たが、女手の真琴とひ弱な赤子の剛志を抱え実施せざるを得なかった。

師走商戦を当て込んで飾り付けられた秩父

の街のイルミネーションに重なるようにして雪が降った。下旬に、幻想的なホワイトクリスマスが光景が街を彩ったが、その年の陰惨な豪雪報道や事故のTV報道に、夫不在の真琴にとつては殊更に悲しい年の暮れであった。

正月明けの十日、新潟県、秋田県、長野県、群馬県の各地域に、災害救助法が適用され、豪雪災害対策本部が何れも設置されていた。自衛隊の災害派遣要請が、三八豪雪の時と同様に発令されて、雪崩による道路封鎖で孤立した民家の救出や、雪庇落とし作業にあたっていているとの報道がされていた。寒気が緩むと、今度は雪崩の心配が現実となった。全国の豪雪による死者の数は、二月末現在で既に百二十人、負傷者の数は千九百人を超えた。犠牲者の六十%余りが、六十五歳以上という悲しい現実、今冬の「災害弱者」の姿が際立ったのである。

総務省消防庁のまとめによれば、三八豪雪の時、二百三十一人の死者がでた。五六豪雪で百五十二人、五九豪雪で百三十一人、三月一日現在、気象庁により新たに平成十八年豪雪と命名された、この冬の死者の数は、遂に五九豪雪を抜き百四十人にも達していた。

真琴の心の時計は、十年前奇妙なフープ鳥の話を送り焦心の旅に出た事実のみならず、四十数年前の豪雪の悪夢に迄逆周りしていた。

平成九年(一九九七年)五月、神奈川公安委員会庶務係に匿名の電話が掛かっていた。

遅れて、一通の内部告発と考える文書が送付されてきた。最初電話の声は、明らかに男性であったのだが、後日送付されてきた内部告発文書の封書の消印は長岡市で、女の筆跡

のように思われた。電話応対に出た庶務の女性に、公安委員の一人である高橋信夫に取り次いだことが事件発覚の発端となった。

「公安委員会の方ですか？」

「ハイ！公安委員の高橋と申します・・・名前とご用件をどうぞおっしゃって下さい」

「調べて欲しいのですが・・・」

「どんなことでしょうか？」

「・・・」

「どこから電話おかけですか？神奈川の方ですか？お名前をどうぞ・・・」

「・・・」

「応対に出た委員の一人、高橋信夫は名前を名乗らない無礼な相手を始め無視しようと思ったが、直ぐ内部告発だと直感した。」

「私の近くの公衆電話からです・・・住所氏名を言つて名乗らないと駄目でしょうか？」

「原則はそうです・・・でも話してみても下さい」

「私の勤めていた工場で、小さな爆発事故が起り、死傷者や自殺者がでています。社長は・・・事故を隠蔽しようとしています。労災認定申請すら拒んでいきます。最寄警察や労基署にもお願いしたのですが取り合ってくれません」

「もしもし、どこの工場ですか？」

「・・・」

「もしもし・・・何処の？」

「警察苦情処理申請でお願いしようと思いましたが・・・あとで手紙を書きます。」

匿名の電話は、言い残してそこで切れた。対応した公安委員の高橋信夫は、たまたま弁護士でもあったので、職業柄死傷者、自殺者や労災云々の言葉が耳に残った。それにしても、

その日の電話は少し唐突だったが、警察苦情の中に、必死で縋りたい語調の、その内部告発の電話の声を、無視できなかったよつである。

公安委員会の定例会議は、原則毎週水曜日に開催されていたが、この日は、臨時会議が召集され、然も休憩時間に電話が入ったことが、この内部告発をした男に幸いした。

公安委員会は、警察法二十八条に基づき、県知事の所轄の下に置かれ、県議会の同意を得た五人の有識者によつて組織されていた。公安委員会は、逮捕権も有しない行政組織に過ぎないが、警察行政の政治的中立性と警察運営の独善を防止する目的で各都道府県に設置されていた。また警察法第七十九条により、警察職員の職務執行について苦情ある者は、公安委員会に対し苦情申請を文書で届出をすることができると明文化されていた。但し次の条件が必須であると明文化されていた。

誰かに聞いたのかこの電話の主は、苦情申請制度を知っている口振りであった。

- ・ 申出者の氏名、住所、電話番号
- ・ 申出者が住所以外の連絡先への処理の結果の通知を求める場合には当該連絡先の名称住所及び電話番号
- ・ 苦情申出の原因たる職務執行の日時及び場所、当該職務執行に関する警察職員の執行の態様その他の事実の概要
- ・ 苦情申出の原因たる職務執行により申出者が受けた具体的な不利益の内容又は当該職務執行に係る警察職員の執務に態様に対する不満の内容

公安委員の高橋信夫弁護士は、あらためてこの苦情申出制度で明文化された文章を読んだ。これでは、苦情を公安委員会に申請したいと思う者は皆逡巡して、実際に申請しないのではと、高橋信夫は危ぶんだ。

この文章の書き方では逆に、苦情を申出たとしても、多少の苦情は泣き寝入りせよと、警察権力を恐れる一般市民に示唆しているような要式だと思ったからである。

弁護士という職業柄、この種の電話や手紙の話は扱い馴れている積りの高橋信夫であった。しかし、実際に横浜中区の公安委員会の自分のデスクの電話対応で、内部告発案件に遭遇したのは初めてであった。

暫くして、先日の電話の趣旨をつかがわせる匿名の内部告発の手紙が中区海岸道の、神奈川県公安委員会の高橋信夫の下に舞い込んでいた。

▲先日電話致した者です。川崎オリジン社の工場内で発生した事故のことで、ぜひ貴公安委員会の手でご調査戴きたくお願い申し上げます。先日工場内である爆発事故が起り、三人が死傷致しました。それに関して、会社同僚のAさんが突然失踪して自殺しました。Aさんは事故の責任を感じたのだと思います。事故が発生する前、Aさんは心身共に仕事に全力投球で打ち込んでいました。身体と精神の疲労が極限に達し、鬱状態だったことも事実です。これは一種の過労死であったのでは無いかと拝察しております。遺族は労災申請を会社にお願いしましたが、社長および役員は、一連の事故及び自殺者を出したことを隠蔽しようとしています。最寄警察や労働基準監督署にも相談したの

ですが、会社から報告が無い以上関知できないと言われました。止む無く、先日NHKの「過労死百十〇番」の番組VTRをみたり、支援の方々の助言を得て、思い切ってお手紙にてご相談致した次第であります。v

ここでこの物語の事件発覚の発端と、その経過を理解するために、先ず日本の内部告発者保護法について触れておかねばならない。

実際神奈川県公安委員会の高橋信夫の下に届いた、この内部告発の電話や文書の案件は、日本で内部告発保護法が国会で制定施行前の七年前に遡る出来事であった。

従来日本では「終身雇用による企業一家主義」を尊ぶ風土にあり、会社への忠誠心と守秘義務は美風とされてきた。だから、例えば法を犯す不正や、道徳に反する行為を内部で発見しても、露見しない機構にあった。外部に会社利益のため口を噤むのが得策と皆員になった。垂れ込む者は、解雇や減給、また報復的な配転人事等が待っていたからである。上司や経営者、同僚を刺すことは、我が身の首を絞める愚行に繋がり、通報者保護や企業倫理の認識の外にあった。

企業側・通報受理者側双方共にこうした案件処理に不慣れな不幸な時代だったとも言える。また醜悪な事件が、実際に発生し訴訟裁判にまで発展していたのである。

欧米諸国では内部告発者(Whistleblower)保護法を制定し、正義のため笛を吹いて警告する者、その保護に当たるとともに、内部告発の奨励を進めている。特に英国では内部告発者の保護を目的とした「公益開示法」が一九九八年に制定されている。他に米国の「公務サービス改革法(一九七八年)」、不正請求

禁止法(一九八六年)、「内部告発者保護法(一九八九年)等があり、オーストラリア、ニュージーランド、韓国等でもこうした法整備の動きが活発化している。

日本でもやっと平成十六年(二〇〇四年)、既に公益通報者(内部告発者)保護法が英国の法整備に準拠する形で成立し、平成十八年四月から同保護法が施行されると聞く。

この場合の公益通報者とは、企業の正社員のみならず、パートやアルバイト、派遣労働者、下請け労働者、はたまた国家公務員法で守秘義務を課せられている公務員をも含んでいる。通報内容は、犯罪行為の事実や正に生じようとしている状況を未然に防ぐ狙いを含んでいる。

同法は、自らが勤務する会社や役所などの反社会的・不正行為を内部告発した人を、解雇や不当な処遇から保護する目的で制定された。

内部告発という用語には、元来密告や裏切りという暗いイメージがあるとして、最近はこの用語を避け、公益通報者と言われるようになってきている。既に平成十四年頃から、公益通報(内部告発)支援センターが設立されているが、同保護法の問題点も指摘されている。

例えば、個人的な恨みや競争心や不満の捌け口、誹謗中傷や妬み等からの密告の道具にされるとの懸念は、企業経営者側から従来も指摘されてきた。反面、世間に暴露された内部告発実例の中で、例えば、平成十二年M自動車工業のリコール隠し、平成十三年KSD(中小企業経営者福祉事業団)の不正経理処理に伴う贈収賄、平成十四年U食品の輸入牛肉偽装、同年T電力の原子力発電所ひび割れトラブル隠蔽等、実際の

不正発覚に伴う経営の打撃の大きさに気付いた一部企業では、社内にコンプライアンス(法令遵守)部門を設け、この部門においてなされた告発社員を保護する動きに乗りだす企業すら出現しているのである。

公益通報(内部告発)支援センターとは、多数の弁護士や公認会計士から、企業、団体、行政機関における公益を害する違法・不正について、社員や職員等の関係者からの相談を受け付け、問題に応じて無料でアドバイスを受けられる機関である。

神奈川県公安委員会の執務室は、警察に関する基本法である警察法のなかで定められており、警察行政に関する調整管理する任務を帯びていた。神奈川県警本部の十二階の建物の中に五人のデスクがあった。県警本部は、横浜税関に隣接し、眼下に赤煉瓦倉庫、横浜港の大棧橋他や海を一望にできる見晴らしの良い、横浜中区海岸通二丁目にあった。神奈川県公安委員会の任期は三年、暫時交代するのだが五人の委員は、何れも六十歳以上の現職で、川崎商工会議所会頭職の委員長を筆頭に、会社役員、大学教授、学校経営者、高橋弁護士で構成されていた。

内部告発の会社、川崎オリジン社の社長を調査対象にして、その本社、工場、経営者の全てに渡って、神奈川県公安委員の立場で高橋信夫は懇意の横浜興信所に調べさせていた。

弁護士人脈ルートで、信用のおける興信所を選んだ。調査報告書は、社長の家族構成、趣味や友人関係、行き付けの飲み屋に至る個人情報の詳細に渡っていたのだが、一部割愛

してここに記述してみる。社長の北山富士夫は都心の一等地、高級住宅街に住んでいた。

調査報告書
神奈川県公安委員会 高橋信夫殿

調査対象
名称 北山富士夫
住所 東京都港区南麻布五・六・七
オリエンタルコート麻布 52号
略歴

昭和十二年五月十三日東京生まれ
最終学歴 大都大学第二工業化学科
昭和三十五年 長岡瓦斯化学工業本社入社
昭和三十七年 同 新潟研究所配転
昭和四十六年 社名東都ガス化学興産に変更
(長岡瓦斯化学工業 三菱荒川興産と対等合併)
昭和四十七年 同 本社技術開発部課長
昭和四十九年 本人希望により
川崎オリジン社出向
昭和五十年 同 工場長兼営業担当取締役
昭和五十二年 同 代表取締役就任

特徴 技術系経営者であるが、本人自負のとり

営業感覚に優れ、総じてリポート方法を採る、顧客開拓は強引で敵も作り易い性格、実績優先でダボの経営と称される。二代目社長として創業社長の永井剛一郎を引継いでから資本金を五千万として業績も伸ばさせている。資本金を一億にする野心を抱いている模様。業界では辣腕家として知られる。
尚、北山富士夫の会社概要は以下の如し

商号 川崎オリジン(株)
本社 東京都港区芝浦東中央二・三・五 西田ビル

代表者 北山富士夫
設立 昭和四十八年五月六日
資本金 七千万円

従業員数 九八名(平成八年八月現在)
工場 神奈川県川崎市川崎区扇島二・五
工場長 石塚幹夫
株主構成 東都ガス化学興産 二十%
三菱甲陽商事 五十%
北越信用金庫本店 十%
社員持ち株会 十%
北山富士夫 五%
永井剛一郎 五%

取引銀行 三菱銀行港区支店
城東信用金庫本店
北越信用金庫本店

役員 代表取締役社長 北山富士夫
常務取締役 石塚幹夫
取締役相談役 長崎幸三
取締役 田口泰雄
取締役 御子柴三郎
監査役 西山健吉

平成九年十月五日

横浜興信所 所長岩本正也

予想通り、二度目の電話が掛かってきた。高橋信夫は素早く電話の逆探知を指示して対応した。刑事ドラマでは、時間を稼げずによく失敗するのだが、それは昔のクロスバー方式の交換機時代の話で、NTTが昭和五十七年(一九八二年)に現在のデジタル電子交換機に置換えられ、平成九年(一九九七年)の全面設置完了以後は、間に旧式交換機が介在していない限り、瞬時に判明するシステムが完備していた。内線交換機

(DAX: Private automatic Branch exchange) にぶら下っている端末電話までは難しかったが、パケット通信利用のIP電話や携帯ですら、神奈川県警本部では逆探知が可能であった。

高橋信夫を、それでもゆつくりとした口調で、できるだけ話を引き伸ばし、更に警戒心を電話の男に起させぬように神経を配って応対した。

「モシモシ、前回お相手させて戴いた公安委員会・・・先日の高橋と申します」

「手紙を読んで戴けましたでしょうか？」

「拝見致しましたが・・・お宅様は川崎オリジン社にお勤めですか？このお手紙の状況は何時発生したのですか？」

「.....」

「当委員会として調査致すには、未だ情報不足です。できれば御眼にかかって・・・、状況を更に詳しくお聞かせ戴けますか？」

「モシモシ、合わない駄目でしょうか？」

「お逢いした方が、この場合・・・お宅様にとってもきつとその方が良い結果を生むと思います」

「モシモシ、秘密を守って戴けますか？」

「もちろんです。そのために警察機構とは独立した公安委員会があるのです」

「.....」

暫く電話の向こうで無言のまま、その男は考えている風であった。電話は返事を返さずに、警戒の気配を残して無言のままポツンと切れていた。

その電話は、川崎市の港寄りの扇島の公衆電話からだった。逆探知の担当者が、直ぐに指で丸を作って、成功のサインを高橋信夫に送ってきた。内部告発者は、別に犯人では無

かったから、現場に移動無線のパトロール車を通じて、警察官を急行させる必要はなかったのだが、高橋信夫は後日、本人と面談したかったので、職務質問形式を採って、男の住所・氏名を聞き出すよう指示していた。

逆探知が絶対に気取られないように、配慮されていたのだが、もちろん電話の男、梅沢紀夫は、警邏中の警官から突然職務質問をされて、最初とても吃驚した様子であった。でも、移動パトカーの濃厚な世間話を交えた警察官の丁寧で、冗談交じりの応対に、最後は安堵の顔をみせて別れたと報告が上がってきた。

高橋信夫は、報告の受話器を置きながら、きつと三度目が掛かっていると確信した。

電話の年齢不詳男、梅沢紀夫は、現場警察官からの報告に因れば、真面目で実直そうだが、痩身で目付き鋭く、身のこなし軽く、川崎オリジン社所属だが勤務歴不詳、今山帰り風体のザツクを担ぎ得体の知れない工員であった。

高橋信夫弁護士は、神奈川県公安委員会の委員長に、一部始終を定例水曜日の会議の後に報告した。川崎商工会議所会頭職の委員長は自分の経験に照らして助言をしてくれた。

「その梅沢紀夫の素性周辺を、もう少し洗ってから面談することをお勧めします。参考に公安警察の左翼担当の専門家の方に相談してみてください。『内部告発者保護の憲章や法案』が、英国の保護法に習って日本でも各党、自治体、一部企業で準備検討されていると聞いています。何故か日本共産党のみが、この起案に問題点がまだ多いとして反対していると聞いていますので・・・その辺の事情も含め

て慎重に検討してください。」

「それは、知りませんでした。公安警察の何方に相談したら良いでしょうか？」

「.....」

委員長は無言のまま、弁護士のくせにそんなことも知らないのか？と幾分非難めいた顔付きをした。おもむろに受話器を取上げ、神奈川県警本部内の警備課の公安課に電話をいれた。受話器を置くと笑顔を作った。

「五階に警備課があります。電話を入れておきましたから、公安課のK氏のところに行ってみて下さい」

「有難うございました」

一口に「公安」と略称される公安警察は、公安委員会と名前がよく似ているので混同されるが、戦前の特別高等検察が解体され新たに設置され、一部諜報スパイ活動も容認される警察権力機構であり、職務権限共に異なっていた。

国や地方自治体の公安委員会は、逮捕権も有しない一行政組織に過ぎないが、警察そのものを大所高所から監督・指導・管理する機能を有する機構となっていた。

一方公安警察は、左翼・右翼中心の活動を監視し、警視庁や地方警察本部内に設置されているのに対し、神奈川県公安委員会の場合は、政令指定都市の横浜・川崎の政令市議の同意を得て、市長推薦で知事が任命する任期三年の行政職員五名で構成されていた。

かように各道府県公安委員会も、所轄警察を管理していたのだが、参考までに、各自治体公安委員会の上部機関の、国家公安委員会が存在し、内閣府の外局に置かれ、機能統括していた。国務大臣と委員五名の

合議制の機関であり、警察行政の政治的中立性と警察運営の独善を、より大局的見地から防止目的で設置されていたのである。国家公安委員会と全国の都道府県公安委員会との連絡協議会が年二度開催されていた。

梅沢紀夫から案の定、待つていた三度目の電話が、神奈川県公安委員会のデスクの高橋信夫弁護士のもとに掛かってきたのは、第二回目の電話から三週間後、六月の梅雨晴れの日のことである。横浜港の大棧橋に横付けの豪華客船の大きく白い船体が、高橋弁護士のデスクの窓から眼下に見下ろせた。

電話の口調から、誰か後ろ盾の知恵新たに得たのか、自分自身の決意を固めたのかきつぱりと自信に溢れ、第一回目の内部告発の電話の様子とは変わって聞えた。

高橋信夫は、この内部告発者と、横浜開港記念館の斜向かい側、山下町一番地旧シルクホテル、現在のシルクセンター地下の喫茶店の一角で面談した。ここは、梅沢紀夫指定の場所であった。双方初対面なので、お互い認識できるかと気になったが、梅沢紀夫が登山帽を被り黄色の登山用サブザックを背負っていると、目印を電話で伝えていたので直ぐに相手と分かった。

「既に、神奈川県警が内偵を開始し、貴方のおっしやっていた概要は把握したようです。ご安心なさって下さい。貴方が会社に居られなくなるような事態にはならないと思います。」
 「配慮誠に有難う御座います。私の本音は、恩義ある元上司への忠義だて、現経営陣への復讐何かでは決してありません。営利追及のためなら、何でも許される風潮、またそれが

許されてきた企業風土を止したいと・・・。」
 「貴方の立派な心情は良く分かります。」
 高橋弁護士は、更なる情報を入手したかったので、男の心を騒がせない配慮をした。

「依頼退職届けを会社に提出していますから、知り得た情報は全てお伝えできます。不幸な事態が、今後も起らないことを願って・・・。下積み工賃や臨時上に犠牲者が生れないよう・・・。元仲間や同僚への恩返しへの積りもあって・・・。今後きちんとした安全管理体制を会社が取りさえすればそれで良いのです。」

「会社辞めて、お困りではありませんか？」
 「もちろん困ります。それとも公安委員会が何か就職の斡旋でもしてくださるとても・・・いや是は皮肉ですが・・・。」

高橋弁護士は、この男の権力に抗する骨っばさを感じてとても好感がもてた。

「それは本当に申し訳ありませんでした」

「謝って戴かなくとも結構です。これは自分の意思で決めたことですから・・・。お見かけどつりの山男ですから・・・。今後は山の仕事で生きていきます。今度のことが私にとっても丁度良い潮時でした。」

新たに貴重な情報を得た、高橋信夫弁護士は自信を深めてこの男と別れた。

その後、一時間の簡単な梅沢紀夫との面談が端緒になり、川崎オリジン社本社と工場、東京地検特捜部と神奈川県警の合同の内偵捜査に事件は発展したのであった。

頁を開いていた。でも、昔感じた目眩感や不安感も無く、冷静な気持ちで心の旅を再開できた。改めて真琴は思い出していた。そうだ、一年前の葬儀の際、剛志が何気なく口走った予言を思い出す。同じ剛の字で繋がる、父親と息子の中に、母や娘という女が割り込むことの出来ないDNAの絆があつて、それが言わしめた言葉であつたのだろうか？

「フープ鳥は、ひよっとすると死の淵から舞い戻ってくるかもしれないぜ、マコウ！」

(頁14中段後から13行より続く)
 ヘブライ人の守衛がこの収容所を取巻き、逃亡するものは即座に殺す。奴隷達は厳しい年月を経て、死ぬまで悲惨な強制労働に従事させられる。この醜悪な制度にたつた二つの正当性が見出せた。一つはヘブライ人がエジプトやアマレク人に囚われた時に同様に扱われる、二つ目は、特殊な奴隷の境遇から責任ある立場に付く時である。この後者の例で、自由になる人間が絶えず生れていた。フープ鳥は、元来この奴隷制度に反対であつたから、自由民にするためのあらゆる努力を惜しまなかった。現在のマコウ市民の中には、最初この臭い野営地で過ごし、この技術者フープ鳥の説得に依りて、ヤハウエ神に改宗し、新しい生活を得ているものが多くいたのである。

今夜は、鼠達で腐っている普通の小屋を無視して、奴隷地区の壁の壁の奥、最も危険な囚人が収容されている最悪の場所を探した。そこで井草の上に寝ている背の高い、手入れ良く髭を剃った逞しい彼より少し年長の男を見つけた。彼は町ではモアブ人メシャブとして有名であつた。ダビデ王のモアブとの戦いで捕らえられた堅忍不拔の男である。彼は奴隷の中で最も工夫の才があり賢く、

フープ鳥の賛美歌・二

真琴は、一年間挿んで放つたらかしの琴の

城壁の建設ではフープの主任として働いた。

彼は腐った床から肩肘を突き、半ば傲慢に上司フープに向って挨拶をした。フープの持っていたランプの灯が、不潔な男の顔を照らした。

「メシャブ！水道トンネルを作る時がきた」

「それは可能だ！但し、たった一つの問題点が解決すればだ」

「問題は沢山ある、どの問題だ？」

「竪穴は掘れる。トンネルも掘れる」

「それでは岩は恐れるに足りないのか？」

「フェニキアの鉄の道具を調達して欲しい岩は掘れる。でも縦穴の底では井戸に到達する方向に掘り進む位置をどうして決める？」

「フープはメシャブの問いに神経質そうに笑った。妻も同じ質問をした」

「どう説明をした？」

「私は言った『それが私の仕事だ』と」

「貴方は案を持ってきているのか？」

「この奴隷は臭い井草に座りなおして尋ねた。」

「私が少年の時、古いカナンの諺を引用したものだ。私には素晴らしい三つの物がある。空に舞う鷹の道、岩の上の蛇の道、海の真中の船の道、エーと四つ目は、女中と一緒に男の道だ」と

子供の頃、自然界の仕組みに驚嘆して育った男に相応しく、散乱するランプの光が禿げた頭の向こうに深い影を投げ掛けていた。

「海の・真中の船の道」

彼がゆっくり繰り返したのでメシャブは聞いた。

「船がどんな関係がある？」

彼は海をみたことがなく、その上を行く船も見ることがなかった。

「貴、親父と一緒にアッコに行った時、海岸を歩き、小さな船をみた。メシャブそれは小さくて波に翻弄されていた。至るところに石が待ち構えている。浅瀬もある。しかし、キプロスからきたこの小さな船はなんとか、海の上を正確に進み港に着いた。どうしてだか判るか？」

「魔術？」

「私も最初はそう思った。しかし船長に尋ねたら笑って内陸の建物の上に翻る三本の旗を示した。『旗の列だ』と船長は言った。海で迷った船乗りはこの旗を見て、それが一列になるようにしていれば、船は正しい道の上であり、船着場に行ける」と

二人の男は黙って座っていた。ランプの光に誘われて虫がその回りを飛び回った。疲れ果てて寝ているマットから鼾が聞えた。

「先日・・・後門の側の北の城壁に立ってみた・・・何処に井戸があるか判った・・・山肌を見上げて旗を立てられる場所を見つけた。」

彼は、言葉を選んで言い淀みながら話をはじめて、直ぐに中断した。

「今こそ、我々に二つの旗が必要だ！」

彼は今迄奴隷の前で、相棒を求めて二つと言ったことは無かった。メシャブは彼の手首を握った。我々は列を持つと！城壁の中から旗を見る

ことができれば方向を調整できる」

興奮しながら、フープは粘土のランプを地面に置くと、彼の革の図面を広げるための場所を片付けた。地面が濡れていた。メシャブは右腕で大胆に拭いてその場所を綺麗にした。ちらつく光の下でフープは、この奴隷に井戸と後の山を示した。斜面の真中上の場所を指示していった。

「第一の旗をここに立てるとすると・・・第二の旗は二・・・」

「そうだ！これで列ができた。最後に総督の家の屋根に置く・・・」

フープは敵かにならずいた。

「君は私の考えが判っている」

二人はこの仕事に待ち切れなくなり朝まで待たずに、その夜山に登り。この理論を確認したいと思った。しかし、野営地の門で守衛が彼等を止めて、メシャブは構内を出てはいけない危険な囚人であると警告した。

「彼は私の主任である、私には彼が必要だ」

「彼は多くの人間を殺している」

と守衛は言ったのだが、フープは自分の判断で門を通過させ、闇夜の中にまぎれ込んだ。

マコールの城壁への道を横切ったが、ジグザグの門に入れなかった。代りに北に回り、井戸が真下にあることを示す、水道の壁が円形になっている場所に来た。屋根に上り、彼等は遠くから見えるように布をそこに貼り付けた。井戸を離れて、パール神の山に登りはじめた。時々立止って背後を眺めた。町の高さより充分高い場所にきて立止り、場所を確認した。

モアブ人のメシャブが言った。

「この場所に最初の旗を立てる。少し待とう、月が昇る」

彼等は暗闇に座り、どこかで燃えているような星明りになかで町の大部分を調べた。この奴隷は、フープよりよはるかに大きく力があつたので、いまここでやるうと思えばこの技術者を殺して西のフェニキアに逃げられるはずだが。

しかし、彼は友人の傍らに座り言った。

「ここから町を見渡せる。私はやれると確信した」

四分の三位の月(寝待月)がガラリヤの丘に昇ってきた。水道の壁ははつきりと見え、校門から

鋭い直線となって井戸に達していた。

「見るよ……この線を町の中まで伸ばすと総督の家の屋根を横切る」

「そこそこ、第六の旗を立てる場所だ」

マシャブは言った。彼は最初の深い豎穴を掘る際、位置を決定するに使用する確固たる旗の列を目に描くことができた。彼自身がその豎穴の底にいて、見えない井戸に向ってトンネルを掘り始める様も想像できたが、はたと唸った。

「難しい問題だ。豎穴の底から一体どうやって旗の列の示す方向が見れるのか？」

「それこそ、私の仕事だ」

彼が奴隷の野営地に戻る道に入ろうとした時、人々が山から松明を持って列を成して下りてくるのが見えた。人々は一夜を高地で過ごし、パール神を古式に則り崇拜してきたのである。二人は互いに誘いあって、山の斜面を横切り巡礼者が下りていった小道に着いた。そこから千年以上もの間人々の崇拜の地、聖地に着いた。

山の頂上にモノリスがあった。

その傍らには長くパール神に捧げられた自然崇拜の印、供物があった。若干の花、生贄の鳩。子供を犠牲にしたり、聖媚を生贄とする習慣はマコールには無かった。ヘブライ人が抑制したからだ。

マコールの支配者は、カナン神を排除しようとして議論したが、人々からの圧力でこの神は存続している。今やダビデ王の時世となり、エルサレムからパール神崇拜せよと指令がきたが、総督達は後日悔やむことになる軽率な行為を思い留まった。こうしてマコールは昔からの神を保持したのである。市民達は定期的に山に登り、彼等自身を知っている唯一の神・何時も豊穡を約束してくれる神・からの援助を求めた。

モアブ人であるメシャブは、モノリスの前に跪

き、南の砂漠で知っていた祈りを繰り返すと、立ち上がって悪臭の漂つ野営地に帰ろうとした。

「どうして判ってくれないのだ？ どうしてヤハウエ神を受け入れて自由民にならないだ？」

彼が足を踏み出す前に、フープーが問うた。

「私はパールと共に生き、パールと共に死ぬ」

静かに言い放つと、フープーと自分との間に差異があることを述べた。それこそモアブで捕虜となった時、彼等がダビデ王に投付けた妥協しない返事で以後も、ヘブライ人の將軍にはならないと宣言したのである。

「待て！」

命令口調になったフープーは、この大男を岩の上に連れて行った。そこから月明かりにアッコとマコールの両方の町が見えた。

「私の祖先もヘブライの神を侮辱して、お前とおなじようであった。記憶前のはるかな昔から、我々はパール神を崇拜してきた。次第に判ってきた事は……ヘブライ人達は……」

「貴方はヘブライ人ではないのか？」

「今はそうだ。しかし、はるか昔の私の祖先はカナン人だ」

「どうしてそんなことになるのだ？」

メシャブの家族なら、神を捨てるくらいなら、むしろ死を選ぶからである。

「我々は、マコールでヘブライ人と緩い友好関係の下で隣どうしでくらしていた。私の祖先のジベオンが自分はヘブライ人と信じて、一、二度困難に陥った。最終的にはヘブライ人にはパール神が必要で、我々にはヤハウエの神が必要と判った。それ以来我々は繁栄している」

「どうして神を偽っているのか？」

メシャブの疑い深そうなこの質問に、フープーは二つの神格の戦いを説明するのは難しかったが、

祖先の城壁で囲まれた町を見下ろしながら応えた。

「私が言えるのは、メシャブ……子供の時に聞いた話した。我等の民はパール神と町に住んでいた。ヘブライ人が砂漠から驢馬に乗ってやってきて、彼等の神、エール・シャツダイを持込んだ。彼等は城壁の外に幕営した。山の頂上の所有を巡って、大きな戦争が二つの神の間に行なわれた。もちろん、パール神が勝利した。そこで復讐として、エール・シャツダイが町を焼き、その廃墟はヘブライ人のものとなった。

長い間、エール・シャツダイは下の谷を支配し、パールは上のここから支配した。しかし、幾世紀かの後に和解が成立し、カナン人は新しい神、ヤハウエを受け入れ、ヘブライ人はパールを受け入れた。以後我々は満足して生活している。」

「ヤハウエは新しい神といったが？」

「そうだ。ヘブライの別のグループはエジプトに下ったが、待遇は悪かった。そこで彼等と共に移住した神が、敵を恐怖に陥れる神に発展した。この新しい神ヤハウエが男、モーゼを遣わし、彼がヘブライ人をエジプトから導き、砂漠の中を四十年間も彷徨った。そこでヤハウエは段々と強力になり……今迄知られているどんな神々とも異なる神となったヤハウエとモーゼの下で、ヘブライ人も強くなった」

「我々もモーゼを知っているが、我々の土地に侵入しようとしたので追い払った」

「我々カナン人には、できなかった。だからヤハウエの神が我々を支配している」

フープーの話は、略正確に歴史を反映していた。幾世紀の昔、老ソダクは彼の氏族をマコールに連れてきた。他の家長はエジプトにエール・シャツダイとはやや違う砂漠の神をいただき彷徨いこんだ。エジプトとシナイ半島での有為天変の間、こ

の神は崇高の概念に成熟した。それは、明らかに進歩しなかったヘブライの劣る一族達が発展させたどんな神よりも優れていた。だから、カナンに帰ったモーゼの周りに集合した一族には、彼等の神ヤハウエの優越が示されたのである。このヤハウエの成熟の一例は、安易な受容を認めないという点で光っていた。愛想の良い神を持つ世話好きのマコールの町は、ヤハウエを作り出せるはずがなかった。その変容には、エジプトの捕囚、ファラオ(エジプトの王)との闘争、大脱出、砂漠における飢えと乾き、定住地への憧れ、精神的に理解し得る神への熱望が必要であった。・・・こうした事例がヤハウエの神を形成したのであった。

しかし、ヘブライの少数民族に勝利した時代でも、未だヤハウエはそうしたヘブライの神に止まっていた。サウルやソロモンの時代には、イスラエルの民が公然と自分等の神が世界を支配すべきと主張する時代には至らなかった。そうした拡張運動は数世紀の間は起らなかった。しかし、今やダビデ王の時代である。ヤハウエの神は北から南のヘブライ人全ての神として認められ、アブラハムの時代から選ばれた民と、ヤハウエの神が締結した様々な取り決めが、マコールのような遠隔の地でもヘブライ人を拘束するものとなった。いろんなエール達・エロヒルム、エリオンそしてエール・シャッドイ・・は今やこの偉大な後継者に融合したのである。

しかし、ヤハウエが強くなれば成る程、人から遠ざかり共にオリーブの林を歩くことは不可能になった。マコールのヘブライ人が彼の神と直接言葉を交わして以来、四百五十年が経過している。最後の会話はカナン人のマコールを破壊した後の將軍エフェルと交わしたものであった。パール神崇拜が余りにも魅力的になって、

赤毛の將軍はヘブライ人を何処か清浄な地に移動させようとした。

しかし、出発の前夜、エール・シャッドイが最後に現われて告げた。

「私は、様々な困難の末に、この町にお前達を連れてきて、お前達に渡したではないか？

あるがままに受取り、それを良きものにするのがお前達の責任ではないか？」

そこで將軍エフェルは古い廃墟の上に、新しい町を造った。その町は繁栄し、周囲の集落に影響を及ぼした。かくして、後の時代にモーゼの統一したヘブライ人達が、ヨルダン川を渡り東からやってきた時、マコールのようなカナン人の片隅の小さな定住地の多くは、ヤハウエを受け入れる用意ができたのである。

しかし、ヤハウエが手近なものではない事、決して見る事ができないものである事、は必然的に多くのヘブライ人に、もはやヤハウエが成しえない人間的な温かさを備えた、より下位の神々執着させたのである。パール神はダビデ王の帝国の殆どで未だに栄えていた。アシュタルテも多くの場所でも崇拝され、子供を生贄にした火の神が復活されつつあった。国中の至るところ、緑の濃い木の下にその地域の神の祭壇があるようであった。

フープーとモアブ人の奴隷メシャブの二人が、地域の神を巡る歴史について話していると、月明かりの中、二人のヘブライ人の女が丘を登ってくるのが見えた。彼女達はパールの神を拜みにやってきて、片側に離れて男達が座っているのに気付かなかった。彼女達はパール神だけが解決できる家庭の心配事で頭が一杯だったからである。高所まで登ってきて、息づかいも荒く、その女達はモノリスの前に平伏した。暫くして、フープーに短い祈りが聞えた。

「パールの神よ、夫エルパールが海から無事に帰ってきてますように。・・フェニキヤ人に苛められないように。・・アッコの彼を守り給え。・偉大なるパールよ。・夫を無事に家に帰らせて下さい」

この二人の女は暫く拝んでいた。

古い神との友好的な関係を再度作ったモノリスの前で、慎ましい願いを済ませて立上った時、一人がたまたま月明かりの中に、メシャブを認めて金切り声を上げた。フープーが駆け寄ると、彼が誰だか判って、彼女は照れたように笑った。

「あいつを見て。・あの奴隷が私を殺しに来たのかかと思つた。」

「彼は誰も殺しはしない」

フープーは、彼女に保障した。女達はリーとミリアムであった。本質的な事柄ではヤハウエに依存し、家庭のことはパール神を必要とする主婦であった。

「どうして祈つていのだね、ミリアム？」

「私の息子が、エルサレムに行くことになったのです、そこで私はダビデ王が息子に優しくしてくれるよう、軍隊で無事にやって行けるように願つたのです」

「ダビデ王なら大丈夫」

フープーが、太鼓判を押してくれたので彼女はほっとしたようだった。女達が丘を下りて帰っていくと、メシャブに少し待つように言った。

「私が祈る間待っていてくれ」

フープーは、古いモノリスに一人で行き、パールの神に平伏した。

「親愛なるパールよ、妻のケリスはエルサレムに住み、父の神と一緒に居たいと切望しています。私の家はマコールです。ここでは貴方と一緒にです。どうかお願いです。トンネルを上手く

完成させ、ダビデ王がそれをご覧になり、私をエルサレムに呼寄せ、ヤハウエの栄光のために王が欲するものを作らせて下さる事になるようお願いします。」

フープーは、顔を手に押付け、指先に力を込め、神の前にへりくだった証として、頭を締め付けた額に痛みを強く感じ、指の力を弱めて止めた。

「バールよ、この事をお願いするのは自分のためではありません。私は貴方と一緒に住むことに満足しています。しかし妻のケリスはエルサレムに行かねばなりません。妻の神はそこにあります。心もそこにあります。偉大なるバールよ、我等をエルサレムに行かせて下さい」

今迄敢えてこうした告白をしたことは無かった。バール神にたいしても妻にたいしても、自分の行為に矛盾は無かった。自分がエルサレムに召喚され、そこでヤハウエの栄誉の寺院を建設するよう祈る事に。厳格なモアブ人メシヤブが、もしこの矛盾した祈りを聞いたなら、男は自分自身の神のみに帰依すべきであると言って、軽蔑するであろう。

次の二週間は、フープーは水道トンネルの計画について何もできなかった。奴隷達の次の仕事を探す必要があったからである。城壁は完成した。寺院の広場は舗装された。まもなくサイロは掘り終える。何かを直ぐに考え付かなければ、有能な奴隷達のチームは王国中に四散させられよう。そこでこの堅穴とトンネルに総督の興味を引き付けようと試みたが、総督は可能性を理解できなかった。フープーは、憂鬱になったが、妻ケリスが、たまたま将来について彼に質問したので元気を取り戻していた。ガラリヤを巨大な花園のするような、暖かい春の日だった。彼女はオリーブの林に行き、家

に飾る花束を摘んだ。それから家事に疲れたので入浴し、気紛れで衣装を着替えた。その衣装は夫が一番好きな衣装であった。緑と袖口を黄色に縁取りした灰色の毛の上着に、午後の大陽のように輝く琥珀のペンダントである。戸口で妻はフープーにキスして叫んだ。

「花を見て！」

彼が花に注目すると、妻はなんとなく呟いた

「私達がここを去った後、ガラリヤを思い出すわ」

「何処に行くんだって？」

「貴方のここでの仕事は済んだ。私達は建設を必要とする所、エルサレムに行くことになるわ」

フープーは妻が応える前に答は解った。妻の手をとり引寄せ、もう一度キスをした。

「なんとかして、お前をそこに連れていきたい、ケリス！しかし私がおもつにわ・・・」

「貴方が必要とするのか、ということなの？」

妻はフープーの恐れを陽気に笑い飛ばした。

「ヤバール！貴方は帝国一の建設技術者よ。皆知っている」

そして、妻は一瞬沈黙するとお互いが了解しなければならぬ事柄を話そうとした。鈍感な夫は、エルサレム行きに関する自分の恐れを話したくなかった。ケリスを悩ませている、この深遠な道徳的、哲学的問題をまだ明らかにできていなかった。そこで、考えがまとまる絶好の機会を過ぎていき、唯一言付け加えた。

「何とかなるわよ」

この言葉が、エルサレムについて交わしたその日の会話の全てであった。

ジブの月の中旬、妻が脱穀され袋詰される頃、ケリスは総督の妻を訪問して、耳寄りな話を聞き込んだ。総督は言ったのである。

「アムラム将軍が北方にやってきてメギドを

視察する、それにマコーも訪問すると約束した。我々の新しい城塞を見たいとのことだ」

「アムラム将軍とはどんな方ですか？」

「彼はダビデ王の城塞の責任者だ」

ケリスは、興奮の余り泣き出さないよう自分の手を握りしめた。身体中に「エルサレム、エルサレム！」が、力強いドラムのように鳴り響いた。

「私も宜しいかしら？」

「私モ宜しいかしら？」

「貴方はフープーに言いたい？もっと沢山穴を掘ったらと？」

総督は、冗談を言いながら頭を前後に振った。

ケリスは愛想笑いをした。門で守衛に尋ねた。

「宜しいかしら、ヤバールを見なかつた？」

「誰？」

「フープーよ。」

ケリスは、この言葉を嫌っている素振りも見せずに言った。

「彼は奴隷の収容所にいる」

ケリスはオリーブの林を過ぎて、奴隷の収容されている囲いに着いた。騒がしいその場所に入る前から、嫌な臭いがむつときた。守衛に尋ねた。

「ヤバールは何処？」

彼等が知らないというので、当惑しながら説明しなければならなかった。

「フープーと言われている人よ」

「付いて来い！」

守衛は、どんなところに連れていくとも言わずに汚い小屋がかたまっている処を通り過ぎた。

道には鼠が走り、日の光が蚤や虱のいる藁にあたってはいる。粘土の瓶に入っている水は芥をうかべ、奴隷達が死の準備で清めているほんの僅かな場所さえも、不相応に見えた。

「全能のヤハウエ！・・・こんな酷いところに

人を暮らさせて「ケリスは思わず呟いた。

守衛は内門を開き、危険な捕虜を收容している
 囲いで仕切られた場所に案内した。ここは太陽の光
 が遮られている。お粗末な小屋に、春の雨でぬかるん
 でいる床に、腐った糞と布の切れ端があった。割れた
 鉢と黒く汚れた食事の皿が隅にあり、便所は口では
 言えないほど酷かった。

かつて、ティレの北の果樹園で背を伸ばして実を
 摘んだ若者が、どこかの砂漠の襲撃で捕虜になり、
 今や働けない程年をとり、立てずに這い、どんよ
 りとした目で死に近づいている。

「ヤムエ、ヤムエ」

ケリスは神に祈った。このよつな地獄がエサレム
 と同じ土地に存在していることすら、耐えられる
 ものではなかった。気が遠くなる思いのまま、粗末
 な小屋に入ると、夫が今迄知らなかった人、奴隷
 のメシャブと話していた。

図を一面に書き込んだ革の上に、屈み込んでいるメ
 シャブの自制された活力のある態度から、この場所
 には信じられないよつな威厳を覚えた。

ケリスはその奴隷に挨拶して言った。
 「貴方、アムフム将軍が貴方の城壁を視察に来
 るのよ」

この情報が一人に与えた影響は、衝撃的だった。

フープは喜びを隠さず飛び上がった。

「やっと解ってくれる人に会える」

メシャブは隣に退いた。恐怖からではないとケリスは
 考えた。本能的な謙遜からだ。メシャブがアムフム将
 軍を、多分戦場で知っているとは明白だった。と言
 つのも、エサレム人にとって、フライの将軍は破滅をも
 たらした者である。ケリスは、エサレム人はこの将軍に
 再び会いたくないのだと判った。感激したフープは
 「この奴隷に向かい自分の気持ちを伝えた。」

「アムフムなら理解するだろう」

メシャブは心えた。

ケリスは、家に帰ってこの嬉しい「トスをもつと
 話したいと言ったので、気残りはあったが、この建
 設技術者は嫌な臭いの場所を通りぬけて、マナル
 の坂道を辿った。ケリスは、門の処で奴隷の收容所
 を振返って尋ねた。

「どうして、貴方のよつな人が彼等をあんな
 処で暮らさせているの？」

「私にはどうすることもできない。彼等は生
 きている限り、あの場所で暮らすことになっている
 のだ」

「……」

自宅の門に入ると、ケリスは言った。

「ね、ヤバル！アムフム将軍は私達に自由を
 持つてくるのよ」

将軍に城壁を気にいって貰いたい

「もし来たら、貴方が有能な人だということ
 を
 将軍に判って貰うよつにして……」

双方が喜んでる根本原因が、明らかになるの
 で、一人は家に帰り着きたくなかった。寺院の真
 向かいの酒店の前をぶらついた。

「ここにかくヤバル、エサレムのことを言っ
 て頂
 戴。そしてエサレムに連れて行くよつ、頼んで頂
 戴。」

小柄な技術者は無言だった。春の日の下で、フイ
 プーはくくりと唾を飲み込んだ。

「駄目だ！ケリス、私がやらねばならないこと
 は水道のトンネルを説明することだ」

ケリスは低く呟いた。その声は、あたかも怪我を
 したかのよつであった。酒店にいる他人が、話を聞
 いていなかったのを確かめた。

「ね、ヤバル、一体どうしたのよ。もしト
 ンネ
 ル工事が承認されたら、それはどの位、掛かる
 の？」

ケリスは公平であるよつと努めて聞いた。

「約三年かな……」

彼女は指元を噛んだ。「三年！エサレムらの追
 放があつた三年！夫に愛情と心を込めて笑いかけ
 ながら言った。

「いわそれが貴方の夢なら私は二年待つわ」

自分で言いながら怖かった。夫の手をとった。

「トンネル工事が失敗したら……」

「失敗しないよつにするのが私の仕事だ」

その時、彼女の口から思ってもみないよつな言葉
 が衝いてきた。自分の意思でなく、彼女の渴望が
 言わしめたのである。

「貴方は馬鹿よ……」

今迄、こんな言葉を使ったことは一度もなかった。ケ
 リスは夫を愛していた。夫の優しさが嬉しかったし
 知つてもいた。しかし、次第に総督や町の有力者が、
 夫を面白い奴、通りを走り回り、尖った鼻を貯水池
 やサイロに突っ込む、フープ鳥そのものよつな奴
 と見做している理由を、ケリスも認めざるを得なかつ
 たからだ。

実際、彼は愚かな男だった。

「こんな失望感、誰でも経験することだから、ケ
 リスは我慢できた。人生の半ばを過ぎて、三十歳
 に近づくと普通の亭主持ちの女なら誰でも、一度や
 二度は経験することだったからだ。

でも彼女の場合は特別の事情があった。

聖都エサレムである。喪に服した少女時代、彼
 女の母が死んだのは、冬のことだった。

一年振りに真琴は本を紐解いたが、長男剛志
 が母親に向けて発した、幼児語「マコウ」、父
 親に対する「フープ」を心の旅で思い出した。
 歯が生え始めの頃、歯茎が痒いのか、しきりに
 唾を吐き出した。その音が、「アバ」から「フー

「プ」に「マア」から「マコウ」に変わったのは、どの子も通る成長の過程と思つていたからだ。

長じて剛志が中学、高校時代に、示した引き籠もり症状、家庭内暴力を引き起こす日々の苦しさが甦った。更に、ヤバルとケリスの夫婦の会話を読み進む内、何故か長岡で過ごした豪雪の日々のことが浮んでは消えた。あの時、夫永井剛一郎が突然研究所を辞めて、自分で会社創業すると言出したからだ。夫婦激論の夜のこと、真琴の脳裏に鮮明に甦つていた。

真琴は、今日読み終えた個所に、再び紫の紐の付いた栞を挿み込んで心の旅に耽つた

研究開発の鬼

ここで話は、研産協の第一回調査報告書に記載され、無名ながら独創的先達の一人に選出の榮譽に輝く、故永井剛一郎の生立ちと腹心だった部下との関係に戻ることになる。

昭和八年一月三十日、山形市に生を受けた、永井剛一郎が、東都ガス化学興産の前身の会社、当時の長岡瓦斯化学工業に入社したのは、昭和三十年(一九五五年)のこと、未だ会社が誕生して間も無くのことであった。

昭和二十六年創業の長岡瓦斯化学工業が、現在の社名、東都ガス化学興産と改称したのは、巨大資本系列を築いた三菱物産傘下で、大正七年創業の三菱荒川興産と、昭和四十六年に対等合併したからである。長岡瓦斯化学工業の新潟研究所は、長岡の郊外刈羽郡西山油田から産出する天然ガスから誘導される芳香族系化学品の研究開発を意図して、創業後直ぐの昭和二十七年に開設された。研究所開

設には、地元篤志家の強力な援助があった。

明治時代の越後の地、特に長岡の周辺には、頸城油田、西山油田、東山油田、新津油田が存在した。西山油田と並ぶ大きな鉱区は、東部郊外の三條にかけて東山油田であった。

明治二十年、長岡市はまさに石油の町、相場の町、日本の経済基盤を握る町として活況を呈していたのである。大正に入り東山油田、西山油田が枯渇の傾向をみせると、一時新津油田が産油量日本一と全盛期を見せたこともあったが、輸入原油とのコスト競争に敗れて平成八年に採掘は終了したのである。長岡瓦斯化学工業の創業者は、石油採掘よりも、これからは井戸から汲み出せて有望な天然ガスに着目し、新潟研究所を開設したのである。

電気科卒で背の低い、永井剛一郎の所属部署に大学同窓でもある田口泰雄が、長岡瓦斯化学工業に入社してきたのはそれから十年後の昭和四十年(一九六五年)のことである。

天然ガスを原料とする化学会社の研究所に、電気専攻の先輩永井剛一郎が存在していたこと事態が大変珍しく異色であったといえる。田口泰雄は、福島県の出身で、大学の専攻学科は応用化学科であった。

当時の新潟研究所長が、田口泰雄の所属した北川研究室の半導体排ガス処理用の有機化合物の論文に関心を示していたからである。いわば、田口泰雄は、請われて同社に入社したとも言える。だから田口泰雄は、大学時代の所属研究室でやっていた排ガス除去用の有機化合物の研究を、そのまま新潟研究所で継続し、できればこれも将来石油化学の化学品誘導体の一環として、事業

化する意図で採用されたのである。

新潟研究所第三研究室の直接の上司は、大学の先輩当時の永井剛一郎主任研究員であった。当時の電子材料がらみの永井剛一郎の基礎研究が、今日の東都ガス化学興産の電子材料事業部の基礎となったといわれている。でも当時は誰も、今の様に隆盛を極める事業部に成長すると予測する者は一人として居なかったのである。正に永井剛一郎こそ、電子材料事業部の産みの親であり恩人であったはずなのである。

東都ガス化学興産の会社沿革によれば、大正七年(一九一八年)一月創業、昭和二十六年四月設立、現在の資本金四百二十億、従業員数二千三百名(連結・四千五百名)の東証一部上場で、資本系列も三菱系で、四つのカンパニー制度を敷き、傘下に八十数社の関係会社を擁す、今や化学会社としても、日本の中堅どころの会社である。

石油化学は無論、誘導される芳香族系の基礎化学品からフラインケミカル、特に今や脚光を浴びるエレクトロケミカルズ、即ち電子材料がらみの、半導体ケミカルズの機能材料の領域にまで普く触手を伸ばし、幅広い境界領域で事業を展開する押しも押されぬ日本の優良化学会社に申し上つたのである。

永井剛一郎の生まれた山形市は、さくらんぼの産地として、また秋の芋煮会の風物詩で知られる地域である。直径六センチ大鍋で煮られる日本の芋煮会の模様は、圧巻である。秋に収穫の里芋、白菜、牛蒡、大根他を放り込んで、建設用の重機を用いて調理する。重機油圧系に、態々食用油を用いるという配慮がなされる。県民気質は、概して温順、穏やかな性格で、

人当たりが良く、万事取り纏めが上手く、計算高く理知的な側面や、質実剛健の気風も有する。昭和八年(一九三三年)七月二十五日の十五時頃、日本の最高気温40.8 という公式記録が、山形測候所に残っている。日本海に台風があり、山形市の南側に飯豊連峰が聳え、連峰の斜面を吹き降ろす時の乾燥した高温の風、いわゆるフエーン現象のためと言われている。

平田篤胤を信奉した父永井剛も背が低く、先祖の一人に上州辛科神社宮司職を有し、栃木県の宇都宮藩の没落士族の出であった。父の永井剛の学生時代は、学習院大学の仏文学者の家に寄宿する貧乏書生であった。後に山形県立山形工業高校の教員となったが、父永井剛は、蔵前高等工業高専(東京工業大学の前身)を卒業した後、群馬県の藤岡市の高等女学校の理科の教師を振り出しにして、山形を経ての教員生活で長野県内各地を転々としている。永井剛一郎は、父の教職の転勤暮らしのため、六歳の時長野に暮らし、以後諏訪、岡谷、と移り住み青春時代は厳しい気候環境の松本で暮らした。

永井家は、代々神道系の家系で群馬・栃木に禰宜が何人もいる。永井剛一郎の実質的郷里は不詳であるが、父親に反発しながらも、成長の糧は、その影を引き摺って松本で過ごした青春時代の影響が色濃かったようだ。

父永井剛が、群馬県吉井町近くの女学校教師から、山形の工業高校の教師に転じ、何故長野県内を転々としたのかは不明で、昔の蔵前工業出身にしては恵まれない境遇だったであろう。何故か江戸時代の国学者平田篤胤を信奉した父永井剛は、息子永井剛一郎に山登りの厳しさだけを教えたと言っている。この気質は、息子

の永井剛一郎にも受継がれたが、長じて自分の息子剛志を山に連れて行くことも無かった。また決して、自分の息子とキャッチボールを楽しむマイホームパパとも成らなかつたのである。

東京隅田川のJR総武線を挟むようにして、両国橋と蔵前橋がある。今の蔵前橋は東京大震災の復興計画による建設で、大正十三年に起工し、昭和二年の十一月の四年掛かりで完成した。両国に移る前の国技館はこの蔵前橋の近く、蔵前二丁目にあった。蔵前の名は幕府が年貢米を貯蔵する場所として建設した浅草御米蔵に由来する。明治に入り米蔵跡地に、蔵前高等工業高専が創立している。

田口泰雄の故郷の福島県は、明治四年(一八七一年)七月十四日の廃藩置県により、統合改称が繰り返されたが、当時の若松県、磐前県、旧福島県が明治九年(一八七六年)八月二十一日に新たに統合され、略現在の姿の福島県が誕生したと聞く。県民気質は一般的に「頑固一徹」とされ、気質を語るるとき、薩摩・長州藩と激突した、慶応年間の戊辰戦争なくして語れないと言われる。会津藩は、明治維新新政府に最後まで抵抗した。白河城落城や会津藩白虎隊や炎に包まれた鶴ヶ城と二本松少年隊の飯森山での自刃逸話は余りにも有名である。

現在歴史・地勢で三つの地区に区分けされる。若松県のあった「会津地区」、郡山等新幹線沿い県央の「中通り地区」、岩城市のある常磐線沿いの「浜通り地区」である。

福島盆地は、夏暑く冬寒い典型的な内陸型の気候で、その点で永井剛一郎の生まれた山形盆地や育った信州の松本平と似ていた。田

口泰雄の生まれた福島市は県庁所在地であるが、昔ながらの農業依存であり、経済的開発面では郡山に先を越された感が否めない。

田口泰雄の出た高校は、県内でも歴史の古い名門校であった。学区外から越境して汽車通学する生徒や親戚宅に寄留する生徒が居た位である。旧制中学時代の会津魂健在でその流れを汲み、破帽高下駄で手拭腰にぶら下げて通学し、バンカラを気取るお洒落学生が未だ幅を利かせる時代でもあった。

学生帽子に巻かれた二本の金モールが、その高校の象徴であった。新入生はぴかぴかのモールを付けたまま登校すると、上級生から一目で新入生と判ってしまうので、塩水に漬けて錆びさせたり、近くの硫黄温泉に出掛けて浸し、自然色に近い緑青をふかせるのが粹とされていた。帽子を雑巾代わりにして破いて貫禄を付けるのは当然であった。

高校の校長は、毎朝通用門の前で、生徒を待ち朝の挨拶を欠かさなかつた。

「おはよう！友情のために授業料はちゃんと払ってくださいよ。バス通学の生徒は必ず靴を履くように！」

の挨拶が口癖で有名だった。親から貰った授業料を遊興に使い、あるいは高下駄で乗客の足を踏む苦情が絶えなかつたからである。でも「高下駄禁止令」は、高校でついぞ聞かれなかつたのである。学生の良識を信用する風潮は、現在の教育環境とは隔世の感がある。

生徒会活動には、学校側は一切口を出さず自治の気風も尊重されていた。近くには標高三百mを余りの小山があり、生授業をサボッテ時間を潰したり、全校運動会には登

山マラソンが挙行された。走るルートも生徒任せで、山頂で審判から 掌に墨で印を付けて貰って帰れば良かったのである。

入社して東京での、一週間の社員研修を終えて間もなく田口泰雄は、主任研究員永井剛一郎を室長とする、新潟研究所の第三研究室にもう一人の仲間と共に配属された。

第三研究室は、機材も研究員も少ない、極く小さな研究室だった。石油化学全盛時代にあつて、将来の成長分野を石油化学から、永井剛一郎信念の事業、電子電気材料事業にありとした。正確に述べるならば、エレクトロケミカルズと称する電子材料や半導体関連ケミカルズに早くから狙いを定めていたのである。室長方針は、新潟研究所長の先見性というよりは、化学系の研究技術者の中で、些か孤立気味の奇人電気の専門家、外国文献に馴染む永井剛一郎の頑なな意地に支えられていたからに他ならない。

田口泰雄には大学の先輩頼みの誇らしい気持ちがあつたが、初手からそんな気安い安易な気持ちで直ぐに打ち砕かれたのである。

主任研究員永井剛一郎は、長岡の新潟研究所では、「開発の奇人」とか「研究の鬼才」と呼ばれ、当時の部下の若手研究員から畏敬の念で恐れられる存在だったからである。存在そのものが、化学技術者一辺倒の中で唯一人、情報通信の判る電気の専門家であった。

人間の想像力が生み出した妖怪は数多いが、何時の時代も、鬼は常に人間の傍らに隠れるように存在していた。昔の於邇は確かに隠の首の訛りだったらしく、古書に曰く「於邇物隠にして形顕すを欲せず」とある。節分の豆蒔きで追い払われる生活の場に隠れている「鬼」は、金

棒を持つ幾分滑稽味のある、控えめで人々に親しまれる存在であるが、研究所で没頭している時の永井剛一郎の場合は、まるで違っていた。

日頃はまるで飄々としてあるいは、隠然としてその存在すら容易に表さないのであるが、一度己の閃く研究の世界に入り込むと、全く妥協を許さない存在、部下や仲間と、時に役員ですら寄せ付けない怖い存在と化したからである。

例えば、こんな二つの逸話が残っている。当時の民青や共産系の労組を堂々向こうにまわし、新分野に挑戦する研究員の処遇に関する改革、もう一つは、エレクトロケミカルズの自社評価体制に関する逸話であつた。

未だ、研究能力と年功序列の排他的関係があつた頃である。年功賃金制度は七十年代頃から衰えてきていたが、当時は研究所要員と言えども全員が労働組合所属であつた。

我国の技術者労働人口の約7割が組合に加入していた時代。この数値はイギリスの三倍、ドイツの四倍、アメリカの何と六十倍にも達する数値であつた。長年年功序列による待遇に馴れた研究所管理者にとつても、個人的な研究能力把握に不得手であつた。

永井剛一郎は、五人の部下全員に当時ストで鳴らした合化労連配下の組合脱退届けを正式に提出させて、労組から脱退させたばかりでなく、社外へ技術論文を発表していた部下を、スベシヤリストとして厚遇した。学会や社外の研究会を通じて、豊富な新分野の人脈を形成する、こうした若手研究者の庇護者となつた。

従来の化学領域の研究所内同僚も、外部論文発表する若手を、スタンドプレイと批判した。当然ながら、労組の「優遇差別」攻撃や人事部

からの永井剛一郎に対する忠告が激しかった。「これは優遇ではない！将来の新事業創生への布石をむざむざ摘んでしもうのか！」

と巖として怯むことなく永井剛一郎は、聞き入れなかつたという。ある時、第三研究室の若手研究者が他社スカウトにより引き抜かれて転出する現象が起こつた。この人材流動化が、研究所内に後日頻発したからである。この傾向に気が付いた人事部長は、研究所の独自人事評価システムを策定せざるをえなくなつていった。

もうひとつ、永井剛一郎を語る時忘れてならないのは、素材の外部依存評価体制を、高額な評価機器を設備投資させて、自社研究所内でサンプルを評価できる体制をいち早く作り上げたことである。電気専攻の研究者が社内には少ない時代、化学会社で電気や機械の学生が採用し難い時代である。高額評価機器への設備投資を得られない最初の頃は、説得のため自ら部品を買い集めて、評価機器を自作したのである。

自らの人脈で母校の教授・学生を説得し、評価能力のある人間を採用できるよう周囲に働き掛けたのである。化学の用語の通用しない世界に向けて兎角、電気・電子業界が満足する素材を提供する使命を帯びていたわけである。

彼等の評価結果を待っていたのでは、競合他社の遅れをとる。窓口要求に心えるには自社内評価が無くては、手足のない半人前のお玉杓子のようなものだ、当時の研究担当重役に直訴して説得したからである。

他にも永井剛一郎のマッドサイエンティストとしての、奇行や言動は伝説となつて、あるいは酒の肴となつて、若い研究者の間で擲擧され誇張された。研究熱心の余り一般社会

の習慣や礼儀に疎く無関心であった。いや殊更にそれを誇張し、自己欺瞞のポーズとして気負っている面があると批判する者もいた。

社内改革の先鞭となった奇人、異分野進出を任された永井剛一郎ならではの二つの逸話が、今でも研究所の酒飲み話となつて残っていた。

家に居る時の夫永井剛一郎は、妻の真琴の前で、研究所と異なり風采の揚がらぬ別の側面を見せた。だから部下の田口泰雄が、家に遊びに来るようになるまで、妻の真琴は研究所に居る時の夫の素顔を全く知らなかつたようである。

田口泰雄とは、専攻学科が異なるが、たまたま大学が先輩・後輩というだけの間柄である。

夫永井剛一郎は、格別部下想いだつたわけでもなく、気紛れで配下の者二、三人を、新年会の後に自宅に連れてくることは稀にあつた。

その内、他の部下は絶えず自宅来訪者は田口泰雄一人となつていた。永井剛一郎の研究所の性格からいって、当然といえば当然でもあつた。

田口泰雄も新潟研究所の内こそ、直属の部下であつたが、夫永井剛一郎が東京研究所に転勤後は、全く異なる部門の所属となつた。

東京研究所に永井剛一郎の転勤の表向き理由は、本社に研究経営委員会と研究開発本部が設置され、関係会社の総合力を活かして新製品・新事業の創出を図るべく組織改革が成されるからとされた。永井剛一郎が、個人出資してまで立ち上げた会社、現川崎オリジン(旧長岡オリジン)ナル工業を引替辞任する時に、田口泰雄を副工場長に推薦したことがある。しかし、この人事配転が、後日田口泰雄に新たな試練を強いる結果となることは、この段階では二人とも知る由とてなかつたのである。更に田口泰雄は、永井

剛一郎夫妻に仲人を依頼し、特別な関係となるのである。結婚後も、良く夫婦連れで表敬訪問と称して来てくれた。むしろ、夫が会社を辞してからが、自宅来訪回数が多い男であつた。

だから田口泰雄の口から、新潟研究所時代の夫の「鬼」や「奇」の逸話、またその専門用語が混じる卓越したその後の研究実績の話は何度聞かされても、妻の真琴は半信半疑で信じられない思ひでいた。その言葉はまるで女房を騙し、互いにかばい立てする男同志の口裏合わせのある種師弟愛としか聞こえなかつたからである。

結婚当初の妻の真琴の夫永井剛一郎に対する印象は、およそ名前の「剛」の字のイメージと異なり、寧ろ正反対で幾分頼り無い存在と映つていた。この性格は多分に、女慣れしないそれまでの永井剛一郎の境遇にあつた。

あるいは、女に無神経で無頓着な性格、父永井剛から受継いだ山形の永井家の大らかな血筋だったのかもしれないのだ。その癖真琴の母性本能をくすぐるような幼稚な側面をみせた。

朝起きぬけに顔も洗わず、歯も磨かないで目やにのまま平気で朝食を食べた。身体が臭うようになるまで、妻の真琴に言われなければ下着も替替えない。何度注意しても、箸を舐め舐め惣菜を突付いた。スリッパを引き摺つて歩く。新聞を読みながら、食事中に平気で放屁をする。母親は一体どんな躰を子供時代のこの男にしたのだろうか?と真琴は何時も思った。

かように三社祭りで揉まれ「江戸っ子」を自称する勝気な真琴の気風と、秋田生まれの永井剛一郎の性格は、正に水と油であつた。家にあつては、しつかり者の妻真琴と、

幾分ぼーと気を抜く夫永井剛一郎の組み合わせ、その傾向は歳を経る毎に強くなった。でも、性格がこうして異なつていたが故に、相補い自分ら夫婦は、夫六十九歳の突然の死の直前まで上手く行つたのではあるまいか・・・と真琴は自然に思つようになった。

夫永井剛一郎は、家で幾分ぼーとしていたのに、山登りとなると嬉々として何時も出掛けていくのが妻の真琴には不思議だつた。それ以外は無趣味で何が面白いのか、技術論文が推理小説ばかり読んでいた。真琴を驚かしたのは、意外に健啖家で、グルメ嗜好だつた点である。

本の虫だつたからこそ、研究所生活が勤まるのだと江戸っ子の真琴は幾分得心したが、果してこれで同僚や上司と上手く遣れる男になれるのかと危ぶんでいた。きつとこれでは人の上に立てずに、昇進もおぼつかない「研究馬鹿」のまままで一生終わるとの思いが真琴には強かつたのである。

今日もインコが、部屋で台詞を繰り返した。
「お父さん! おおちゃん!」

永井真琴は、結婚してから長年無聊を慰めるためにインコを飼つてきた。最近、家禽のインコに、奇妙なフープー鳥のイメージが重なることがあるから不思議である。

ここ長岡の地で、夫婦は一男一女をもうけ、夫々剛志、慶恵と命名した。永井剛一郎の父、永井剛の命名法は単純明快だつた。男なら夫の剛の字を、女なら慶の字を継ぐと、山形の永井家の昔の慣わし通り決められていたからだ。

長女の慶恵は、結婚まで順調に育つたが、長男剛志の方は紆余曲折があつた。それは

即ち登校拒否児童の兆候、今でいう引き籠もりの生活を余儀なくされたからである。今は一見結婚して落着いているかに見える長男剛志であるが、当時は正に永井家の爆弾を抱えているような状態であった。

長男剛志は、高校在学中も家でぶらぶらする有様で、原因はあの二度の豪雪の長岡で過ごした幼少期と青年期にあり、一に夫永井剛一郎に責任があると真琴は思っていた。

もし、登山家梅沢紀夫と長男剛志とが、北アルプス槍ヶ岳登山の出会いが無かったら、自分の息子は一生引き籠もりを続けたかもしれないのだ。真琴は、一人の登山家梅沢紀夫に手を合わせたい位に感謝していた。

永井剛一郎は、父親の責任を全く果たさず、休日には家を空けて一人山登りにかまけていた。殆ど家庭放棄のような状態で、普段は家と研究所を往復する「研究馬鹿」で、生まれた長男剛志と幼時の時から遊ばなかった。それが問題と、当時真琴は思っていたのである。

インコを飼う真琴の習慣は、夫の永井剛一郎が、研究所に詰めたまま殆ど帰宅せず、孤独な長岡の社宅で(こんなはずではなかった!)と人生に悔いの残る、苛立つ新婚生活の気分転換から始まり、引き籠もりの長男剛志の小学校高学年、中学校時代の愛玩動物の役目を経て、東京阿佐ヶ谷から、現在の転居先秩父市野上の自宅までずっと続いていた。

真琴が長岡の社宅でインコを飼い初めてから、もうかれこれ数十年経過している。勿論一匹のインコが、数十数年生きていた訳ではない。何代もの代替わりの末の年数である。転居先でもその都度、インコを飼ってきた。

洗濯物を畳み始めると、決まって三代目オカメインコの△おお介△は、この台詞を吐いた。最初、阿佐ヶ谷の自宅で真琴が徒然に教えた△おおちゃん△であったのだが、何時の間にか△おおちゃん△と△お父さん△を混ぜて繰り返すようになった。もちろん、△お父さん△とは、夫の永井剛一郎のことで、時には△お父さん△×お父さん△と数度繰り返すこともあった。阿佐ヶ谷の自宅の時は、他愛無い会話で、夫や子供にその事を笑いながら話題とした時もあったが、こうして一人身になつて幾分弱気な真琴は、時折死亡した夫フープを思い出し涙ぐむことさえあった。

今秩父市野上の真琴の家では、個性の異なる小型のルリコシボタンインコと、中型のオカメインコを夫々一匹ずつ飼っていた。飼ったインコの種類は、セキセイ、コザクラ、ボタン、オカメの四種類である。ブルーボタンや白ボタンインコを、長岡の社宅で飼っていた時等は、籠に取り付けた巣箱の中で良く繁殖して、雛を何匹もペットショップに売った経験もある。

特にブルーボタンインコは、素人には飼育が難しく、繁殖となると手に負えないと鳥屋の主人のコメントであったが、真琴は苦もなく、いわば鳥のブリーダーの役をこなしたのである。ために鳥屋の主人と懇意になり重宝された。でも最初は、やはり簡単な小型インコのセキセイであった。手乗り物真似インコを飼おうとして、孵化したての赤剥けのセキセイインコを、大手通り丸専のペットショップから買ってきたのが発端である。

藁製の孵籠(ふご)に、未だ目も見えない雛

鳥を入れ、ヘラの先で親鳥よろしく栗玉の餌を搾り潰して与えた。これを差し餌という。

この段階の雛は、人間の赤ん坊と同じで、二、四時間おきに餌を与えないと、飢えて体温が下がり死んでしまう。日齢間もない内は、一日五、八回、風切羽と尾羽が生え揃うまで与える必要がある。兎に角、注意して差し餌をし、夫婦二人で根気良く面倒をみた。

藁製の孵籠を抱えて車で移動し、雛鳥を連れて妻の郷里の浅草への帰途、昼夜餌を遣り続けられてきたことがある。夫永井剛一郎不在の時は、インコは真琴の子供であり親友であった。

長岡時代に飼っていた、インコ達は妻の真琴と夫永井剛一郎を区別して認識するし、お互い気持ちがちやんと通じるのである。面と向かって、互いに苦言を呈することが出来ない時など、良くお互いがインコに愚痴をこぼす。インコも良くしたもので聞き役に回り、状況を察して鼻の穴を穿るかのようになり、顔に近づいて唇や耳を愛噛みするのである。どちらが可愛がつてくれるのか人間同士を試すかの如く、時に人間の方がペットの鳥を巡って、互いにやきもちを焼いたりすねたりしたから、傍からみたら奇妙で不思議な夫婦に観えたかもしれない。

初手から餌付けが上手く行くとはい限らない。でも何回か試みる内に一度、ヘラと餌との関係を目の見えない雛が学習すると、その後はヘラその物が親となるのである。口元に寄せられたヘラの感触を頼りに、口を開けて満腹するまで餌をねだる。餌とは栗玉である。

栗玉とは、本当は栗と玉子の略称で、剥き栗に玉子(卵)をまぶした幼鳥用の餌である。

ところが、実際ペットショップで売っている粟玉と称する餌は、剥き粟のみで玉子をまぶしていないものもあるという。この餌で幼鳥を飼って二度失敗した経験がある。

この粟玉を遣り続けて、栄養失調性の脚氣に幼鳥が罹ったからである。羽根が生え揃って、も、未だ良く飛べないのだが、孵籠から出すと毎日人間を追い回すようになる。ピョンコ、ピョンコと歩いて付いて来る姿は、実に可愛いらしいと、何時か永井剛一朗が言ったことがある。会社人間の研究馬鹿とばかり思っていた夫に、少年の心を感じる時であった。

帰宅してからの夫の永井剛一朗も、技術論文を読む以外は芸の無い男であったが、日頃家庭サービスを全くしない罪ほろぼしとでも考えてか、不思議とインコの面倒はよくみてくれた。インコとの相性がよかったとみえて、特に初代オカメインコのおお介は、雛の時から永井剛一朗を追い掛け回し良くなついたのである。

程なくして巣立ちの時期、自分で孵籠から出たがるようになった。外に出ると畳の上を、例によって歩き回る。その内にピッコを引くようになった。栄養価の高い餌に切変える時期を間違えたのである。ピッコのインコを事の外、永井剛一朗は不憫がった。直ぐに粟玉から、皮付きの餌に変えた。孵籠から出し止まり木のある籠を買ってきてその中に入れた。撒き餌をして、自分で餌を拾って食べさせるようにした。

本当は、巣立つまでは孵籠から出さず薄暗い中で、様子を伺っているのが良いのだが、つい夫永井剛一朗は過保護になって、雛を外に出して遊ばせてしまう。孵籠を攀じ登って、

蓋を取ると自ら飛出す意欲を見せるまでは、中に入れて飼つのが良いらしいと、真琴はペットショップの店員から聞いてきて、その請売りで夫永井剛一朗を教育する。粟玉の脚氣羅病と巣立ちの段階の育て方の話は、後で動物病院の医師から聞いて知った知識である。

「突き放して巣立ちの段階を経ることが、雛鳥にとっても必要なのよ。面白がつて無闇に外で遊ばせるのは駄目なのよ」
「まーいいじゃないか。鳥も一緒に遊びたがっているのだし」

と、永井剛一朗は、インコと自分が遊びたいばかりに甘やかすのである。

自分の子供とは遊ばないのにインコとは遊ぶ、そんな永井剛一朗の性格が、長男剛志の引き籠もりの誘引となつたのであるまいか・・と今になつて真琴は懐古することがある。

確かに動物と触れ合うことで、人は楽しみや安らぎを得る。そうした動物を積極的に利用して、人の心の病気を治療したり、予防したり、体のリハビリに役立てる方法をアニマルセラピーと言つ。我家で飼つてきたインコも、少なからず永井家の一員として、長女慶恵が生まれてからも家族に安らぎを与えてくれた。

長岡の社宅時代、家内を追い掛けて鉄のサツシに挟まれたセキセイの白ピイは、可哀想に骨折して本当のピッコになつたが、その後切ない程人間を追いかけるようになった。

小学生時代の長女の愛玩動物となり、亡くなつた時娘の慶恵は、それこそ泣き明かしたのに対し、中学生の長男剛志は、自分の愛鳥と思わなかつたためか、無表情で涙さえ見せなかつた。手乗りで良く喋るオカメを、永井剛一朗が肩

に乗せてベランダに連れ出し、突風にあおられて逃がした時等、真琴は「迷子のインコ」を捜す張り紙を作り電信柱中に貼って探し歩いた。

感情表現がある犬猫ならまだしも、たかが小鳥と他人は笑つたが、永井夫婦二人にとっては、インコは我が子同然の存在であつたから、インコの死や逃走は我家の重大事件であつた。

近隣で失踪インコの情報で少し反響があつたのだが、結局逃げ出したオカメインコのおお介は我家に戻らなかつた。夫婦二人は、直ぐにペットショップで代りのオカメインコの雛を買い求めてきた。

当然に孵籠から育てられ、やがてこのインコも手乗りになつた。名前も同じ二代目 おお介 と命名されていた。

この二代目インコのおお介が、父親の永井剛一朗の愛鳥というよりも、中学校で登校拒否を始めた長男剛志の愛玩動物となつたのは程なくであつた。

登校拒否の発端は、その冬の豪雪で中学校が一時臨時休校となつたからであつた。

永井剛一の研究所での仕事で、その頃従来にも増して多忙を極めたのも、もう一つの理由であつたであろうか。

入社十八年後、自ら研究開発した技術を核にした、社内ベンチャー会社創設の話、然も真琴になんの相談も無く自分が会社社長を引受けるといふ夫からの話、それは余りに唐突に持ち上がったからでもあつた。

妻の真琴はふと、秩父で執り行った教会葬の光景を思い出すのである。プロテスタント教会であつたが、教会葬でも遺体は型通り火葬に付されたからである。永井剛一朗の出棺の時の一

件を思い出すのである。それは物置に仕舞ってあった二つの孵籠を取り出して、その内一つを夫の棺に入れて、火葬にしてやったのを記憶していた。当時一つとも入れずに一つを手元に取って置いた理由は、何故だったのだろうか？

孵籠を、夫永井剛一郎の遺品と考えていたというよりは、結婚して一見平和な家庭に収まっているかに見える長男剛志の引き籠もり防止のお守りと思っていたのかも知れない。

秩父の自宅で、夫の永井剛一郎が亡くなって程なくのことである。産業技術総合研究所(産総研)が、アザラシ型ロボットのパロを開発したというTV放映を真琴は観た。

ある日、何を思っただか、秩父の家をそそくさと出て、西武線に乗ると、真琴は東京に出掛けた。行き先は秋葉原であった。久し振りに秋葉原ロボット文化祭で来た妻の真琴は、本気で、インコを飼うことだけでは物足りず、やがてやって来る自分の認知症予防にこの癒しロボットを欲しがり、娘の慶恵に態々電話で相談して意見を求めているのである。

自宅のペットのインコもやがて死ぬ。何度か小動物の死をみとってきた真琴が、直ぐ東京に飛んでいったところを見ると、余程一人身が堪えていたに違いない。メンタルコミットロボという範疇らしいが、撫でたり抱っこされたり、パロは人の声を聞分けたりするので、あたかも心があるかの如くであったという。

フープー鳥の賛美歌三

真琴が、本著を紐解く心の旅を再開して、二週間になる。最初、亡夫永井剛一郎の前世

の超常的な謎解きと思っただけで初めた読書であった。気持ちの上で、何処かに見構えた気負いがあつた。然もイスラエルの地理歴史も全く素人の真琴であつたのが、習慣化した読書の楽しみにも変わり、何時の間にか、地名も人物も自分の隣地隣人のような感覚で馴染んだ。

それにしても、贈り主が同封した封筒、社団法人ユダヤ研究会という団体は、一体どんな仕事をするとどこであるのか？それが生前の夫永井剛一郎とどんな関係があつたというのか？本の登場人物の一人一人が、現代の日常社会に有り勝ちな、極くありふれた生活の中の人物像にも思えていた。心に投影された古代の町マコールが、現在住んでいる秩父の町のようにも思えてきて、心の旅の不思議さに惹かれていった。

(頁26下段後から07行目より続く)

父は母の弔いのためにエルサレムに、幼いケリスを連れていった。平地を登るに従い、丘の上に雪に覆われた都市が見えた。春のこのよりのように純白であつた。幼いケリスは自然に言葉がついてきた。ヘブライ人が呼ぶ町の名であつた。

「おー、ダビデの町！」

マコールの古いカナン人には、エルサレムの名そのままであつた。この方が適切だ、と言うのも、この都市がヘブライのものであつた期間には、ほんの数百年にすぎなかつたからである。

ケリスと父が冷たい空気の中、立止り見上げたとき、ケリスは本能的にエルサレムは有名になると判った。城壁が拡大されるといふことは無く、ここにヤハウエの神の精神の住まいが定められようとしていたからである。エルサレムを始めて見た瞬間から、彼女はその一部と化

し、その新しい役割の中で共に成長し、今後発展する光輝に与りたいと切望した。この町からヘブライ人の特質が決定されることになる。

二人が雪を被った城壁を見詰めていたとき、父は何かを感じて言った。

「私が死ぬまでに、マコールの寺院はなくなるであろう。エルサレムにヤハウエの永久の寺院が建立されるのだから。」

ケリスは、父に小さな寺院で暮らしたことを悔やまないかと問うたが、父は躊躇いも無く応えた。「この身体が登ってエルサレムに着くように、魂も心の丘を登ってヤハウエの神に辿り着かねばならない。さあ出発しよう！」

聖職者の父は、エルサレムに象徴される宗教の新しい理解に民を導く前に死んだ。父を継いだマコールの僧侶達には、父の理想もなく、唯目を光らせて特権にしがみ付いていた。それ故、ケリスの恒常的なエルサレム登城の渴望は、父の理想を受継ぐものだったのである。その渴望の単純な理由を問えば、正直にこう答えたであろう。

「そこでは、ヤハウエの神が自ら知らしむるでしょうから」

*脚注

ダビデの町：シオンの丘王国統一を維持するためダビデ王は首都をヘbronから、対立する北の部族と南の部族の境界にあるエルサレムに移すことを決めた。そしてエズパ人が守るシオンの丘を奪いエルサレムを征服する。シオンの丘はその後、ダビデの丘と呼ばれるようになった。

彼女の渴望は、自身と夫の想いとを真反対の立場に置いた。夫はエルサレムに行くだろうが、理由は建築が行なわれる処だからである。夫はケリスを愛していたから、妻の欲するものを手に入

れようと喜んで援助してくれるに違いない。

しかし、妻のヤハウエへの執着は殆ど理解できないのだ。ウーの子孫としてパール神のマコールの地を支配していると夫は理解し、この馴染んだ土地に建設することで満足している。何処で働くか、どの地に建設するかは重要性がない。普通の技術者として、手にする注文は何でも受け入れ、その起源を喧しく問題にもしない。

彼は奴隷の収容所の建設も、マコールの小さな寺院の建設も同様に喜ぶのである。前者の仕事には、奴隷を長く生き延びさせる機会となるので、これで立派な大望と思っている。

パールの神に頼る技術者の夫ヤパール、ヤハウエに帰依する神秘家のケリス、二人は通りはずれの家に着いた。マコールの城壁の中で、長い歴史の間繰り返されてきた神々を巡る、人間の選択の対決である。どういう神を崇拜し、どのように崇拜するのかという究極の選択に当面向した多くの人達の如く、彼等はあからさまな対決を避け、時が解決してくれると望み、自分等の意思を固めるのである。

ケリスは、アムラム将軍がやってきたら・・と考えていたが、妻の意見をフープー自身は判らなかつた。フープーの頭の中は、計画で一杯だったから、図面を記した革のシートを巻き、筆記用具を取上げ、奴隷収容所に戻ってしまった。そこで、仲間のメシャブに、モアブ人の奴隷達が期日通りに仕事ができる素案作りを命じた。

子牛の皮から毛の生えている側を、滑らかになめして作った巻き革の粘土版の上に、葦のペンと煤と酒とオリブ油から作ったインクを使い、フープーは水道工事の原案を完成した。

メシャブは、彼が竪穴の対角線を六本の旗で作る線に、合わせるよう大変気を使ったのに気

付きその理由を尋ねたので、対角線を指差して、フープーは応えた。

「これでトンネルが掘れる」

これ以上心えず、粘土版に工事に必要な様々な種類の作業図面を刻み始めた。図面は全部で四十五枚となった。それが終わると、メシャブが、変形しないために窯に入れて焼いた。

アムラム将軍の到着の前日の夕刻までには、データは全て完成した。大きな革の巻物、将軍が工務シムで説明用を使用するためのもの、それに、マコールの工事を示す一連の堅いタブリット状の板。

次の朝、ジブの月の終りの輝く日、花を付けた木々がガラリヤを鳥の歌声で飾り、ピスタチオの藪が赤い蕾を咲かせて、ザク口の葉が柔らかな緑となる頃、アムラム将軍とその部下がマコールでは滅多に見られない馬に乗って、メギドからやってきた。子供達が道沿いを走り、訪問者に挨拶し、町の門では総督がワインの素焼きの瓶と冷たい水の入った瓶を持って出迎えていた。兵隊達は、水を掛けられ、町の女達の差し出した布で頭を拭いた。その中で、ケリスは将軍に奉仕した。

アムラムはヘブライ帝国の典型的な将校だった。五十歳に近く、頑丈で痩せぎみ、短く刈り込んだ髭、短く硬い赤毛である。将軍は青い眼で、眉の下左の頬に深く輝く短い切り傷があった。彼は落ちて、思慮深く、周囲の民に思いやりがあり、公平な厳格さで判定できる男であった。ケリスを見た瞬間から、彼好みの年頃の美しい女で、マコールでは必ずしも幸せでなく、夫の業績を自分に印象付けようとしているのをみてとった。

鄙びた町で楽しい時を過ごすべく、ケリスの奉仕に心ずることにした。彼女が布を将軍に渡した時、ゆつくりとそれを受取って微笑んだ。髭だらけの口元に、隙間の開いた白い歯を覗かせた。

「お前の名は？」

「ケリスと申します。この城壁を造ったヤパールの妻です。」

「この通路から見ると、城壁は頑丈に見える」ケリスが応えようとすると前に、総督がやってきて大声で皆に伝えた。

「将軍を、広場にお連れして歓迎の旗を受けていただく」

それを終えたアムラム将軍は、歓迎宴を離れた。「私は新城壁の視察にきたので、そうしたい」彼は城壁に向かった。ケリスが傍らに付いているのを見て満足した。

「これが我々の作った強い城壁です」総督はお世辞たらたらだった。

フープーは、列の後から歩きながら思い出していた。丸一年間と言うもの、この建設許可を得るために総督と喧嘩してやってきた。しかし、今やこの城壁は総督のものだ。

恩がせがましく総督が付け加える。

「このフープーと言われている男が造りました」そして、総督は自分の頭を上下にフープー鳥のように動かしてみせた。それを見て一行は笑った。将軍は懸命だった。彼がフープーと呼ばれば美しい妻は怒るはずだ。しかし、この男は全く愚かしく見えるが・・・様々な視察旅行で、将軍はこうした類似の事態に遭遇していた。

(上司の前でこの男の本名で褒めることだ)

「ヤパール！お前が城壁を造った者の一員なら、一緒に町の後ろの山に登って全体を見よう」

「私がワインをお持ちしましょう」

「いいや、入らない。我々だけで行く」

総督の申入れを将軍はきっぱり断ると、もう足早に歩きはじめた。それは、太ったフープーの足では付いていくのが精一杯の早さだった。

一時間以上も、二人は町を巡回して点検して廻った。それから、山の中腹まで登り城壁を体系的に調べ上げた。

「城壁までの土の斜面だが、何かの方法で防衛体制を考えたいかね？」

「我々は二つの可能性を検討しました。今の斜面を舗装しますと多量の岩が必要です。全面に渡りニキューピットほど土を除去すると、昔のヒクソクの斜面となり、そこは舗装されて良い状態はまずです。將軍さまならどちらを宜しいとなさいますか？」

「どちらも駄目だ！」

アムラム將軍は、言下に言い放った。

「その結果は今より少しも良くならないばかりか、両案とも沢山の奴隷を必要とする。私なら別案をやる！」

將軍は、個人の家が銃眼付き胸壁の上に迫り出している城壁の部分を指摘した。その家は、城壁を家の片側の壁にして、その全面に窓を大きく開けていた。

「私なら直ぐにあの窓をつぶして除去する。」

ラハブがジェリコでスパイに縄を投げられたのを忘れるな！」

「総督、どうしたら良いのでしょうか？」

「煉瓦で蓋をしる、今日中未だ奴隷の居る間に一度ほど、アムラム將軍はフープーの奴隷達に言及した。」

「貴方は私の奴隷達を召上げられるのですか？」

「この仕事が終わったら、我々はエルサレムで熟練した建設作業員として使うことになる。しかもお前達の仕事は略終りのようだ」

將軍は長く戦場において粗野な男であり、フープーを馬鹿にし始めてはいたが、この男の仕事を視察して優れた仕事と認めざるを得なかった。手をこ

の背の低い技術者に肩に置いて言った。

「王に良い仕事をやったと報告しよう」

フープーは、感謝の念をもくもくと伝え、バール

の神に黙って祈りを捧げてから、おもむろに大きな懸案事項を持ち出した。

「將軍！この新城壁は水の供給システムが軟弱な限り無力です。」

「ここから見ると、水道の壁は堅固に見える」

「前より堅固ですがそれは継ぎ足しです。御分かりのように貴方の軍隊の片手間で破壊できまます」

この將軍は、正直な建設技術者に好意を持ち始めていた。アムラム將軍自身も、山の中腹で直ぐにマコールの致命的な欠陥を見出していた。しかし黙っていた。この町は、犠牲にされる前線基地であると理解していたからである。もしフェニキヤ人が襲つたと決断していたら、水道の壁を破壊し、町を混乱に陥れるに違いない。しかし、帝国にとつてはその損害は重大ではない。フープーが、戦術的な立場を理解しているのに感心して聞いた。

「どうやって防衛する？」

フープーは簡単な言葉で、縦穴を町の真中に掘って、井戸とトンネルで結べると説明した、心配していたが、將軍が理解したと喜んだ。

「それから水道の壁を壊し、場所の軌跡を隠し、井戸の上を大きな岩で覆い、水汲み場は地価三十に埋める。誰もトンネルの内部以外から、再び井戸を見分けることはできない。」

フープーは自分の考えに酔い、言葉が溢れてきた。彼は詩人のようでさえあった。自分の論理に引き入れ、細々した事柄まで操った。マコールに必要な安全性について言及した。今後の来るべき幾世紀に渡る帝国の安全性をである。

「この町を再び！フェニキヤ人が十五ヶ月

攻撃しても、將軍の駐屯郡は、將軍！内部に居て安全なままでしよう。従って、エルサレムも安全でしょう」

アムラム將軍は、生来人の熱意に動じる方ではなかったが、自分の意思に反して、フープーの熱意にほだされてきた。將軍は、マコールを西に前線の恒久の砦と想像する誘惑に駆られていた。フープーが喋るに従い、この小さな町が異なる町に見えてきた。あの坂道が強力に見えて、致命的な水道の壁が消えて見えた。そしてフェニキヤの軍隊が町を攻撃して失敗する姿を理解した。フープーは話を止めて待った。

「何が必要だ？」

アウラムは無愛想に聞く。

「私の今居る奴隷に加えて五十人」

「具体案を持っているのか？」

將軍は、この熱意ある小柄な男は必ず持っていることを確信していた。

「私の自宅にぜひいらしてください」

フープーはせっかちに過ぎないかと心配しながら、將軍の顔色をみて静かに言った。彼等が自宅の主門に着くと守衛に言った。

「モアブ人のメシャブを連れてきてくれ。」

「誰だつて？」

「私の主任です。彼が詳細な図面の粘土版を持っています」

総督の家で待っていた妻のケリスは、アムラム將軍と夫が直接自宅に向ったのを聞き付けて、小道を駆けながら先に着いて出迎えたいと思った。駆け登って息が切れて着いて時には、二人は既に家に居て、床に座りヤバールの水道システムの巻き革を検討していた。

「何てことだ！馬鹿な夫は偉大な人をつまらない事で、煩わしているなんて・・・」

ケリスは冷たい飲み物を持ってきたが、没頭している二人は気付かない。そこでケリスは、將軍から見える位置に座った。フープーが指で仮想のトンネルを描き続けている間に、將軍はやつとケリスの存在を目に留めた。こして三人が暫く居ると、守衛に引き立てられるようにして、大きなモアブ人が現われた。この背の高い南国人が粘土版を持って部屋に入るやいなや、アムラム將軍は男を見て立上り叫んだ。

「この男は此処で何をしているのだ？」

「彼はメシヤブ、私の主任です。・アムラム將軍におみせしろ！」

このモアブ人が詳細図面を広げる前に、將軍は背を向けて怒鳴った。

「彼を連れて行け！」

「閣下！ 彼は今私の最良の作業員です」

「私は彼を知っている。・彼は私の兄弟を殺した男だ！」

「彼は数年前ここに送られてきました」

「何時送られたか知っている。私が送ったからだ！」

メシヤブは黙って立っていた。

將軍は、モアブ人とダビデ王の戦いを思い出していた。正確には、ヘブライ人はこの砂漠の王を完全に敗北させていない。メシヤブや彼のような僅かな兵士がゲリラ戦を遂行したからだ。しかし、モアブは屈服させられたたのである。

「互いに平和を討議している際、こいつは我々の營地を襲撃し、私の兄弟を殺した。彼を捕えた時、私は自分の手で殺したかった」
メシヤブはソッポを向いた。沈黙が気不味くなつた時、ケリスが言った。

「粘土版をここに置きなさい！そして奴隷は収容所にお帰りなさい！」

ケリスの指示で、皆に男は一人の奴隷であることを思い出させた。緊張の糸が解れると、將軍はこの女は賢いケリスの機転に感心した。

総督主催の宴席で、將軍はこの女が優れている点を見出した。彼女は將軍の考えていることを事前に察知して仕えた。夏目椰子の実が、蜂蜜が欲しいと思うと彼女が差し出してくれた。

二日目になると、この女は一人だけで自分と話したいことがあるのでは。・とはつきり判った。

フープーの方は、水道システムの承認を得る好機に頭が一杯で、妻の行動に気付かず、將軍にきりにトンネル工事に有利な話を仕向けていた。

三日目、アムラム將軍の好意に彼は答えた。
「ヤバルーモアブの奴隷を連れて山に登り、今言っている旗の列が可能かどうか確認したらどうだ？」

「もうやりました。この計画は上手く行くと確信しています」

アムラム將軍は詩々していった。

「私はお前が何をすべきかを話してやる。お前はこれから二人で山に登り、一人がそこに止まり、実際に旗をもう一度立てるのだ」

喜びの色が小太りの建設屋の髭面に浮んだ。

「それは。・閣下がこのトンネル工事を承認戴けるといふことですね」

「えっ。・まあ」

アムラム將軍は、本音はマコールに精力を割きたくなかつたのだが、この男の背後に立っている愛らしい妻ケリスが気になつていた。この気の利かない愚か者を、早く眼前から除きたかつた。

「やれ！ トンネルを掘れ！」

將軍は弾みで言ってしまった。
「総督を連れて来ます！」
フープーは叫ぶなり、総督を連れに走った。

將軍とケリスがフープーを押し止める前に、総督が早くも一緒に現われ、トンネル工事の承認は公式のものとなった。

「さあ、山に行き、旗を立てるぞ！」

彼は叫ぶと子供のようににはしゃぎ、通りを駆け抜け、守衛にメシヤブを奴隷の収容所から連れてくるよう命じた。

フープーが去つてから、勿体ぶつた総督は困惑しながら家に戻った。どうやって彼は將軍を説得して水道システムの承認を得たのか訝った。

將軍はケリスにさり気なくいった。
「多分、あの奴隷の少女は子供を散歩に連れ出したいのでは？」

召使の奴隷が去つて、ケリスと二人だけになると、將軍はフープーの木の椅子にゆつたりとして座り、何が次に起こるかと思像していた。

アムラム將軍は、色の道にも長けており、妻が三人いた。その内二人は他の男から取上げていた。この愛らしいマコールの女をその目で想像した。

確かに彼女が、將軍にこつして二人になる機会を仕向けてきた。將軍にはその理油が判った。多分地面に穴を掘る以外に取り得のない肥えた小男に飽きていて、エルサレムから別な男が恋の冒險を持ってきてくれると期待している。・將軍は他にも何か賢明な理由を考えていた。

ケリスが將軍に持ち掛けようとしてしている問題は、そのいずれでも無かつた。

「私はぜひ貴方様とお話がしたかつたのです」
ケリスは、二本足の椅子に取り澄まして離れて座つた

「どう言つことだね？」

「私はエルサレムに行かねばなりません」
彼女は堰を切つたように喋り始めた。
「私の夫は、貴方様もみてのとうり此処で城

壁の建設を上手くやりました。私は・・」

「彼の何んだって?」

「私はヤハウエへの崇拜が純粋な場所に住みたいのです」

「貴女が何だって?」

「私の父はこのマコールの僧侶でした、先祖代々そうでした」

「それがエルサレムに行く事とどう関係がある?」

そこで彼女は將軍に語った。

アムラム將軍が聞いた話は、生れて初めての話だった。それはやがて何世紀にも渡って、イスラエル中に木魂するように響いたのである。

「マコールでは我々はヤハウエの神からはるかに遠いところにいます。エルサレムでは神聖な聖域近くに住めます。マコールでは我々は、世界をバールの神と共有しています。エルサレムではヤハウエの神のみが君臨しています。この小さな町には偉大な王はいませんが、エルサレムにはダビデ王がおられます。王の近くに居ることは、太陽の近くにいることになるのです」

「貴女のエルサレム行きには色んな方法がある」

「疲れた様子の將軍に彼女は、冷たい水桶のある部屋に案内し、父にしたように頭に水を掛けて頭を洗ってやった。それから彼女は、將軍の髪と胸を荒い布で拭取り、肩から掛ける上着を差し出した。彼女は彼をベッドに案内して、寝過ぎさないように必ず起す約束をした。彼女がカーテンを引くとき、窓から山で働く夫の姿が見えた。

ケリスは寛いでいる將軍を見下ろして言った。

「どついたら、我々はエルサレムに行けますか?」

將軍は魅力的な女を見上げて言った。

「彼がトンネルを造るのを助けなさい。そうすれば王は必ず気付くだろう」

將軍は、山で手を振るフープーの姿を想像しながら眠りに落ちた。

フープーの計画は単純だった。

町の上のある場所、水道の壁に延長線上に最初の旗を立てた。この旗は町のどこからでも見えるから、今後三年間はこの仕事の基準となる。次に彼はもつと高く登り、二番目の旗を立てた。最初の旗と井戸の水道の壁の中心を通過する線の延長線上だ。この二つの旗の通る線の上に奴隷達がいれば、彼等は確実にトンネルを掘る方向を間違えていない。これが終わると、夫は可笑しい信号を発するような事を始めた。

マコールの四つの屋根に、フープーは赤い旗を付けた棒を持った奴隷を立てさせた。彼は奴隷達を打ち合わせ通り、前後に動かして、彼等を山肌固定した範囲の延長線に並べさせた。奴隷が所定位置に並ぶと、彼は今度は白い布を振った。奴隷達は、その位置でしっかりと旗を固定した。

モアブ人のメシャブは総督の家に屋根にいた。ここは他より高く、重要な印となる。メシャブが、この重要な位置に六番目の旗の位置を定めるために、前後に動いていると総督が不審がって叫んだ。

「誰だ! 私の家の屋根にいるのは?」

この官吏が屋根の奴隷を怒鳴りはじめて、次第に民衆が寄り集まってきた。モアブ人が大切な旗を降ろすのを嫌がったので、ひと悶着になるところだった。丁度総督が白む顔で額に青筋を立てている頃に、こざつぱりとして寛いだ雰囲気だアムラム將軍が現われた。その位置に旗を置く必然性を理解していたので、メシャブと一緒に旗の位置を検証した。そして、フープーを含む全員を広場に集めてこう言った。

「よく聞け! 総督の言うことは正しいぞ。最後の旗は総督の屋根の上にはすべきではない」

フープーは將軍に抗議しようとした。

「旗は必要なものだが、どうして城壁の上には立てないのだ?」

群集もこの賢い決定に賛意を示してどよめいたが、フープーは異議を唱えた。

「城壁では、棒が余りに短くて旗が見えない」「そうか 判った。お前が明日やることは、森に行つて若く十分高い杉の木を見つけることだ」

純情な小柄の男は森に消え、將軍はヤバールに家に戻り、午後の時間をケリスと過ごした。

モアブ人のメシャブは、城壁の上で働いていて、この賢い將軍の仕掛けた罠を見付けて激怒した。

次の午後、將軍アムラムがこの小太りの男を遠ざける新しい方法を考えた時、この大きな奴隷は怒りに燃えた。フープーの家で起っている事柄に幾ら疑い憤慨しても、仕方がなかった。

アムラム將軍が最初の日の午後、ケリスと一緒にいるよう仕組んだ時よりも、状態はもつと複雑な様相を呈していた。彼女はこの著名な客人を、自分の父のようにもてなし、將軍に冷たい水を運び、まるで一人の奴隷のようになって慰めた。

しかし、ケリスは賢明で、彼女を誘惑しようとする將軍の試みには、魅力的な無邪気さで相手にしなかった。もし彼がもつと若かつたら、彼女を組み敷いていただろう。五十歳に近いこの男は、忠実な妻に興味を覚え、自分をもてなせば、夫をエルサレムに連れて行くと本当に信じているのが解り、ケリスの思考を理解したいと思つた。

「どうしてお前はこんな美しい町に不満なのか?」

將軍は彼女が通り過ぎる時、灰色の上着を掴んで聞いた。彼女は砂漠の踊子のように身を翻し、スカートをリズムカルに回転させ、彼の手から離れて魅力的な香りを撒いた。

「マコールのような町に住むのは墮落し腐敗し

ていると感じるのです。ここではヤハウエ神とパール神の両方を崇拜しているからです」

「私はマコールを魅力的な町だと思う」

ケリスは將軍の感想を無視して尋ねた。

「貴方は、朝エルサレムで目覚めた時、地上に中心にいると心が躍りませんか？」

將軍は咳払いをした。ケリスは一体何処まで無邪気なのか、嘲笑っているかのどちらかだ。いずれにせよ隠しておく理由はないので素直に言った。

「本当のことを言うと、私は*デエイゴンを信仰している」

「デエイゴンですって？」

ケリスは叫び、その考えに青褪めた。

「そつだ、私がダビデ王に仕えたのは、王がベリシテ人に雇われた時だ。私は王が好きになった。ベリシテ人は有能な戦士だった。デエイゴンは強い神だ。私はヤハウエの神も良いと思うし、ダビデ王が崇拜しているのも知っている。」

しかし、私は戦いの人で単純な方が良い。」

ケリスは後ずさりした。この男、この有名な將軍は恐れも無く、デエイゴン神のような石で造られた神に忠実だと言っ。

「驚きました・・・ヤハウエが・・・」

「私を撃ち殺す？」

將軍は、ケリスを見ながら笑つと続けた。

「おおー私はヤハウエにも帰依します。兵として助けてくれる神ですから・・・しかし私個人が崇拜するのは・・・」

「デエイゴンですか？」

「そつだー」

將軍は短く刈り込んだ頭を擦り、フープの椅子から立上ると、ケリスが驚くのも構わず、その腰を捕えてからかうように抱き締めた。

「貴女は良い妻だ、ケリス・・・何時かはお前

はエルサレムに来るだろう。ヤハウエの神がお前を持つているだろう」

男はケリスに二度も強引にキスをする、ケリスの手を押えて抵抗できないようにした。別れのキスだった。將軍は笑いながら家を出た。

ケリスは一人汚されて立っていた。キスのためではない・・・男の不敬でだ・・・ゆうくりとケリスは夫の椅子に跪いて祈った。

「ヤハウエの神様！貴方の都市に登らせて下さい。貴方の門、エルサレムに歌いながら行かせて下さい」

*脚注
デエイゴン：ベリシテ人の自然神 半人半魚の形。起源は魚の神。後に穀物の神となる。

ベリシテ人：BC千二百年 パレステナの海岸に定住した非セム族、旧約聖書中ではイスラエル人の敵として記されている。

最後の晩餐が総督の家であった。その際、ラム將軍は、フープが宣言したのを驚いていた。

「將軍！私は西端の私の家を出ます」

ケリスは(エルサレム?)喜んだ。フープの言った意味は違っていた。

「明日、主竪穴の掘削を開始します。私はその傍らに新しい家を建てます」

お客達が騒がしくなったので補足した。

「この仕事は大変重要なので、現場近にいる必要があります」

「良い考えだー」

フープは大いにはしゃぎ、お客達を総督の家から案内し、湾曲した大道を通り、閉まった店を過ぎ、後門に近い場所に着いた。そこで竪穴の場所を指差した。赤ワインを地面に注ぐと將軍が短い皮肉な演説をした。

「こんな魅力的な町を訪ねたのは・・・久しぶりだ。魅力的な人々にも会った。私の視察の中で貴方が、このフープと呼ぶ男によって建設された城壁より優れたものをつかっただことがない。」

將軍は途中で総督とケリスに頭を軽く下げた。群衆はこの立派な褒め言葉に歓声を上げたが、將軍自身が自分の頭をフープ鳥のように動かしたので、その効果は薄れてくすくす笑いが起った。

「私は・・・この新しい水道システムがもし完成するならば、北方地域の誇るべき要所となると確信する」

將軍はそつ締め括った。ケリスには將軍が町と主人の双方をからかっているのが解つて、將軍に対して幻滅感を抱いた。彼女には、將軍が哀れにさえ思えた。というのも、エルサレムでダビデ王とヤハウエの近くに居ながら、都市、神、王いずれの内面的重要さに気付いていないからである。

この嘲笑つた儀式が終了すると、將軍は横柄にケリスに向つて笑いながら言った。

「直ぐに家に帰り、この小柄な男がトンネルを造るのを手伝いなさい。多分何時かは二人ともエルサレムに行けるだろう」

ケリスは惨めな気持ちだったが、メギドに帰る將軍を見送るために、城壁に並んだ群衆の中にいた。將軍が沼の彼方に消えて、実に不思議だと思つた。何故なら、エルサレムを有難いと思つていない人物が、その都市に住んでおり、それが許されていること事態である。他方でヤハウエをこのように恋慕している自分が、その恩恵に与れないことがである。ケリスは人生の基本の、不公平感に口惜し涙が溢れてきた。

しかし、城壁から降りると、奴隷のメシャブが屈辱の念で激しく將軍を見詰めているのに気付

き、どうしてだろうと訝しづかった。

ケリスは夫ヤバルと一緒に家に帰った。

夫は今、水道システムと家の新築に没頭していた。彼女は次第に古い家、そう将軍がエルサレムの臭いを持たんだその家に、ひとりぼっちで取り残された。そこに二人の子供がいて、自分が今何を成すべきかが冷静に正確に判った。

夫のヤバルが土に穴を掘るために計画した注意深さと同様に、彼女はどのようにして、唯一真実の神の誓、エルサレムに赴くかを計画した。これからの三年間は退屈であろう。それは分かるが、アムラム将軍の皮肉な忠告は正しいのであるか？同情と愛情を昔から感じている自分の夫、将軍は男としてのヤバルをフープーと嘲笑したが、技術者として彼が見せた尊敬の念をどうしても無視できないでいた。

それ故、ケリスは夫の望みを達成できるように献身した。そうすれば、エルサレムに近付けると信じた。彼女は本部を新しい家に移すのを手伝った。そして、彼が当面している種々の困難を議論するのを理解を持って聞いた。あらゆる外見から判断して、彼女は夫の問題に気付き、地域の神々を尊敬するマコールの生活に満足する女になった。しかし、一瞬たりとも、ヤハウエの存在とエルサレムの現実への憧れをすっかり覆う隠していたわけではない。

幾月かが経過した。

ダビデ王の当方軍の将軍アムラムがモアブ人との反乱の征伐戦で戦死したという報告が、マコールにもたらされた。ケリスは個人的に弔うため、昔の家に戻り、頑強な将軍が座って居た部屋に独り佇んだ。彼女は今は主に、将軍はヤハウエとダビデ王に関して傲慢な事を言った、陰険で傲慢な男として思い出す。そして、あんな無神経な男がエルサレムのような、精神的に高尚な都市で出世したことに驚いていた。食卓で夫を「フープー」と言いながらも賞賛したのを覚えていた。

「将軍は我々の恩人だ！」

この小柄な建設屋の夫は付け加えた。

「それに、もっと大事なことは、将軍は五十人の奴隷を約束し、その通り送ってくれた。」

フープーは将軍の死を深く悲しんだ。

水道システムが完成し、エルサレムに行った時、アムラム将軍は自分を擁護してくれると想像していたから。今やトンネル工事を支持し、擁護してくれた最初の男は死んだ。フープーは独りぼっちになったと感じていた。

真琴は心の旅の夢想の海を漂っていた。

まるでイスラエルの死海にさえ漂う、顕微鏡下でなくては見えない微小な藻類、光さえ届くところなら地球上の全ての過酷な海域でなら生きている植物プランクトンになったような頼り無い心境だった。

夫の永井剛一郎が研究所で孤独に研究開発に取り組んでいた時、ベンチャ会社を創業した時、果して自分はマコールの妻ケリスのように、夫に対し全霊献身的であったらどうかと……

いや、ケリスの場合と少し違う。あの時は、自分も長男剛志の引き籠もりと戦っており、そんな余裕が無かったからだ。ケリスも二人の子供を抱えていたようだが、時代も状況も子供も、全く異なっていたはずだ。

引き籠もりになる以前の幼時期の剛志は、何時も不思議な挙動をする子供だった。最初、「フープー」「マコウ」と両親を呼んだ事もさうだが、八歳前の頃に、異国の言語を口にする

時期があったからだ。まるで真琴には習わない前世の言葉を喋っているとしたか思えない。いや逆にこの子は、日本の言葉を覚えるのが遅いのはと、母親として不安に思いつ時期であった。

長岡の豪雪に閉じ込められて、風邪を引かせ小児科の医師の雪門を叩いた時も、医師が冗談とも冷かしくてもつかぬ如く、真琴に向って尋ねたことを思い出していた。

「両親が何方かが、外国でお暮らしの御経験が有りでしょうか？お子様はまるで異国の言葉を喋っているようで、意味不明で流石の私にも……分かりません」

事件の発端

妻の真琴は、長男剛志の引き籠もりの原因は、夫永井剛一郎の父権放棄と長岡の二つの豪雪が引き金となったと今でも思い込んでいた。

でもあの死の間際の夫の自分史を読むと、絶えず家族のこと、長男剛志の引き籠もりを気にかけるながら、妻の真琴に詫言ながら研究に没頭していた様子が手にとるよう判るのである。

あの日の夜、夫永井剛一郎の身に妻の真琴が考えられないような出来事が起った。

夕飯を食べて夫々子供達も別室に下がり、夫婦二人きりで一息いれていた時である。

夫の永井剛一郎が、十五年勤めた会社を辞める覚悟を突然仄めかしたからであった。

夫の口から出た台詞に真琴は、余りに唐突で信じられない思いであった。永井剛一郎は、まるで取り付く島さえなかったのである。

「真琴、お前にたつての頼みがある」

「改まって頼みって何？」
 「会社を辞めて社長をやる。自分で会社を起すので資本金の五百万円を調達してくれ！」
 「貴方が社長？」
 「会社の馬鹿共の目を覚まさせてやる！」
 「社長??・・・冗談でしょ！」
 「冗談で言えることじゃない！」
 「嘘でしょう・・・正気なの??・・・」
 「嘘じゃない。正気だ！」
 「貴方、熱でもあるのじゃないの？」
 「熱なんか無い！」
 「意地張って会社起して、一体どうなるっついでいいの？」
 「別に意地なんか張ってない！」
 「会社の馬鹿共っていったわよ！」
 「いったさー！」
 「意地張ってる証拠じゃないの・・・」
 「馬鹿め！お前は俺の言うことが信じられないのか？俺は冷静だ！」
 「一体貴方に社長なんか務まるの？」
 「兎に角やると決めたんだ！」
 「・・・」
 「地元新潟の北越信用金庫の長岡支店長の友人滝田政男君が賛同してくれている・・・一人当たり五十万円で、有志の出資を募る。二十人で千五百万の金を彼が集める計画だ。俺が社長をやるのが条件だ。」
 「そんなこと会社が了解するの？」
 「了解するもしないも、俺の研究は信用金庫の滝田君の資金援助で実施したものだ！」
 「一体・・・どんな会社やるっついでいいの？」
 「・・・」
 「男にとって、仕事が幾ら大事かしれない

けれど、何と言ったって、貴方はご自分の研究が子供より可愛いかわれないけれど・・・私は『研究の鬼』や『開発の鬼才』の夫よりも・・・子供や私のことに目を向けてくれる夫の方がどれ程うれしいか・・・家庭を省みず・・・今剛志がどういう状態かも忘れて・・・貴方は夫失格・・・父親失格よ！貴方は馬鹿よ！」
 「・・・」
 真琴は最後は、日頃の鬱憤を爆発させていた。二人の会話ははまるで喧嘩越しで、売り言葉に買い言葉の様相を呈した。最後はどうせ妻の真琴に、会社設立の詳細計画を話しても理解が得られないと思っただけ、吐き捨てるように、そこまで言つと永井剛一郎は黙ってしまった。夫の話を聞いて、真琴は最初はとも冷静ではいらなかった。憤然とした後、慄然とした妻の真琴は少し情けなかった。何時もの家に居る時のポーツとした「研究馬鹿」の夫永井剛一郎の何処に、こんな気迫や野心が秘められていたのかと見直す反面、何故もつと事前に、自分に相談してくれなかったのであるか？そんなに妻の自分が信用できないのであるか？何年夫婦やってきたのであるか？・・・と。
 その夜の夫は全く別人の顔をしていた。山登りに出掛けて行く時の孤独な影が漂っていた。夫の顔を観ると、蛍光灯の下で蒼白気味に見えた顔色から、夫の並々ならぬ決意を真琴は感じ取った。まるで物の怪が憑いたかのようで、夫の顔が研ぎ澄まされて、本当に鬼や奇人に変身していく夫が怖かったのである。

真琴は、夫の話がどうしても腑に落ちなかったので、北越信用金庫の長岡支店長で、友人と称する男に、是非遇わなくては思っていた。二日後に、真琴は長岡支店長を指名して電話をいれていた。
 「北越信金さんですか？支店長の滝田様をお願ひします。」
 「どういったご用件でしょうか？」
 「直接支店長さんとお話したいのですが・・・」
 窓口の女性は、真琴の声が尖って聞えたようでも明らかに取り繋ぐのを渋った様子だった。
 「長岡瓦斯化学工業の永井の家内で御座います。滝田様でいらしゃいますか？初めてお電話さしあげます。何時も大変主人がお世話になっております。」
 一端中断した受話器の男の主が、更に別の男の声にかわっていた。
 「ハイ、滝田です。こちらこそ御主人様には大変お世話になっております。」
 滝田政男は、永井夫人が自分に一体何を？と明らかに電話の向こうでいぶかる口振であったが、金融マンらしく慎重に対応した。
 「実は、主人の仕事の件で、お目に掛かって直接お聞きしたいのですが？」
 感の良い滝田政男は、真琴が何を聞きたがっているのか、素早く理解していた。
 「結構でしょう。大手通りの長岡支店まで奥様にはご足労いただけますか？」
 「何時お伺いしたら良いでしょうか？」
 「一般の窓口業務が、三時に終わりますので、明日の三時半では如何でしょうか？」
 「支店長さんにはお忙しいところ大変申訳ありません。明日伺いますので宜しくお願いします。」

真琴は、北越信金に警戒されて少し不快だったが、無理もないと思って受話器を置いた。

明朝、美容院に行つて髪を整え、赤地桜花の長襦袢に、四季の花をあしらつた江戸小紋の和服を着て、西陣の枝垂桜文様の袋帯を結び、上から雨コート兼用の訪問着を羽織つた真琴は、予定時間より少し早めに北越信金の店頭姿を現していた。真琴が、此れだけの正装をするのも、長岡に嫁いできてから久し振りであった。

その日、三時十五分に店頭へ赴いた真琴は、女性行員の案内で丁重に奥の応接室に招き入れられていた。信金の支店長応接室にしては、質感の良いクッション付きのソファといい、調度品といい豪華な造りであった。壁に掛かるユトリ口の絵画は、模造品であるが、品が良く部屋の雰囲気にもマッチしていた。

運ばれたお茶を、そのままにして待つこと十五分、支店長の滝田政男が、笑顔をつくつて現われた。ソファから腰を浮かして真琴も立ち上がり、差し出された名刺を受けた。

「お待ちしました。理事長の滝田と申します。ここ長岡支店長も兼務しております。始めまして。長岡瓦斯化学工業様は当金庫にとつて大切なお客様です。」

名刺は当然、支店長の肩書きと理解していたから真琴は吃驚した。支店長と異なる理事長の肩書きの名刺であったからである。此処で臆してはならじと意を強くして名乗る真琴であった。

「あらためまして、長岡瓦斯化学工業の永井の家内で御座います。こんな所まで掛けたまは誠に申し訳ありません。」

「いえ。どういたしまして。奥様にお逢いできて幸いです。私はご主人の永井剛一郎

氏とは十年來の山仲間です。昔偶然北アルプスの西穂高岳でお逢いして以来、何時も山行で親しくさせて戴いております。」

「そつでしたか、山の親しい方がおられるとは存知あげていましたが。私が山には無関心でありましたので。主人から山の話詳しく聴かされたことが無かつたもので。それは大変失礼を致しました。」

「山の話になると、私も長くなつてしまいますので。…」

「判つております。主人もそつでしたから。実は今日伺つたのは山登りの話ではなく、厚かましく参上したのは、実は主人の仕事のことでお聞きしたいと思ひまして。…」

「ご主人のお仕事については、従来から私滝田個人としても、当信金としても支援させて戴いております。親しい山の仲間ということではなく、私はご主人の研究能力を高くかかっている者の一人です。もちろんそのお人柄も信頼しているからです。ところで、ご主人から、お聞きになつたと拝察しますが、この企業家目録見書の資料はご覧になりませんか?」

「……いいえ、何にも……」

真琴は差し出された、厚めのA四横書きの不思議な資料に目を走らせていた。

それは、真琴が今迄全く見たこともない書類であった。表に「事業投資向け概要説明書」と記されてあつた。

「そつですか、永井剛一郎氏らしいですね。奥様にも伏せておられたのですな。口の堅い方ですから……」

「失礼ですが、奥様はその中味を知りたくて当信金に御出でになつたのではないですか?」

「……」

滝田政男は、暗に真琴の出過ぎた態度を非難するかのようになり、おもむろに口を開くと資料を真琴の方に向けたまま説明を始めた。

資料の第一頁目に以下の文章があつた。

△挨拶

昭和二十六年創業の地元由來の長岡瓦斯化学工業は、地域産出の天然ガスを原料にした化学品を製造することを目的に設立された会社であります。長岡郊外に新潟研究所があるのは皆様方もご存知のことと思ひます。

御蔭様で当北越信用金庫も、地元金融機関として長岡瓦斯化学工業様には、長年ご愛顧戴いております。此処長岡の地が、かつて油田の町だつたことは、皆様もご存知のことと思ひます。明治時代から、油田事業を地元根付かせるため、数多事業家が心血を注ぎ、篤志家の皆様が協力したことは、ここ長岡の地の誇りでもあり、そうした事業創生に弊金庫の前身「北越無尽」が、貢献できたことは歴史が証明しております。

「北越無尽」は、地域の人々が自分達の貴重なお金を出し合い、その資金を元手に地域のために役立つ目的で設立された金融機関であります。当北越金庫は創業以來、地域金融機関として、長岡の繁栄に奉仕することを基本にして参りました。

ここに、「北越無尽」の原点に立ち返り、地元企業の長岡瓦斯化学工業様の新潟研究所にある有望事業に着目し、資料をお送り致しますのでご覧戴き、ご支援賜りますようご案内申し上げます。

北越信用金庫 理事長滝田政男

そのA四横書きの資料は今日でいう、ベンチャーキャピタルが作成する、個人投資家向けのある種「投資事業有限責任組合」の設立趣旨書のような資料であった。

現在こうした資金調達方法は、左程珍しいことではないが、当時長岡の金融機関では、明治の御世から無尽の感覚でこの類の資料が作成されてきたのである。未知の事業を育成していく目的で、篤志家の間に認知されたこうした長岡住民ならではの知恵、その先見性は正に時代を先取りした、賞賛に値する稀有な発想といふべきだったのではあるまいか。

有望な新規公開株で儲ける手法は、元来株式投資の常識となっていたが、この手法が資金力調達能力のない、ベンチャー企業にまで拡大される気運が当時から満ちていた。現在の投資事業有限責任組合法(ファンド法)は、ベンチャー企業育成を目的にして、個人投資家からの資金調達を支援するために創設されたエンゼル税制を含み、平成十六年十一月一日に関する一連の法改正が実施され、新規産業関連施策として経済産業政策局より盛んに解説がなされている。

民法上の、任意組合による投資事業組合が抱えてきた法的な問題を解決する、様々な説明会が開催され解説書が出版されている。この法改正に伴い、目聡く経済産業省の認可団体を騙る組合等による、詐欺紛いの投資勧誘行為も出現しているのである。いつの時代にもあるが、一角千金の投資に目が眩み、騙される小金持ちの話が新聞や週刊誌をにぎあわせていた。

真琴は、夫永井剛一郎の親しい山仲間でもあると名乗った滝田政男という男が、単に理

事長であるだけでなく長岡支店長を兼務していたことを、この時初めて知ったのである。

通されたこの部屋は、支店長応接室ではなく、実は理事長応接室であったことを理解できた。電話での面談申込といい、こうして理事長に説明を求める真琴の所業といい、自分は何と言おう不躰で恥知らずの女であったと深く反省するのであった。

一九三八年八月、スイスのピエル・カスタン(Pierre Gaston)による特許が申請され、以後六十年に渡り応用開発の歴史が世界各国で繰広げられたケミカルズ(電子材料)にエポキシ樹脂がある。発明者の狙いは歯科材料であったが、チバ社が一九四八年この特許を買取り、アラルダイト(Araldite)の商品名で電気絶縁材料や接着剤として販売した。以後、この樹脂の工業的な有用性が六十年代から、電気業界で認識され始めていた頃である。

この展開は、正に長岡瓦斯化学工業の石油化学思考の化学技術者の知識では、当時考えも及ばない用途展開であった。

エポキシ樹脂とは、分子内に二ケ以上のオキシラン環(エポキシ基)を有する化合物の総称である。通常硬化剤を併用して、三次元網状高分子重合物(ポリマー)を形成させて利用される。今日パソコンの中に必ず入っているプリント基板、その基板上に乗っている各種の半導体(メモリやCPUチップ)の封止材にもエポキシ樹脂が使われている。封止材は、半導体チップを覆い、光、温度、湿気、塵埃、また物理的衝撃等から保護するための黒色のプラスチック材料である。エポキシ樹脂は、巨大市場を形成し、

今日のエレクトロニクス(Electronic Technology)時代に必須の基幹化学品に生長しているのである。

日本初のトランジスタラジオ(TR-55)がソニーの前進の東京通信工業で開発されたのが、永井剛一郎の入社の日である。

大学卒業して、最初は確かに電気会社に就職を願っていた永井剛一郎であった。意に反して化学会社に入ってしまった永井剛一郎の目に映ったものは、大学卒業して華々しく電気業界で活躍する仲間の姿であった。

この時代の電機業界、特に半導体の開発がらみの弱電業界に大きな革新の波が襲っていた。正に無機化学と電気融合、エレクトロケミカルズ時代の華々しい幕開けで、日本中がその革新の波に晒されたのである。

時代の波に上手く乗れた企業は、大きく飛躍し、そうでない企業は淘汰の憂き目にあっていた。そうした業界の変化の波を肌身感じながら、仲間の活躍を羨む気持ちも確かに永井剛一郎の心の裡にはあった。持ち前の山形生まれ、松本育ちの冷静で豪胆な性格から、入社当初からこの樹脂の存在を外国文献を読んで知っていた永井剛一郎であった。

時代はトランジスタからIC(集積回路)の時代にめまぐるしく突入した。IC回路の微細化は激しい勢いで進展し、ワンチップに十億個の素子が組込まれる超LSI時代に移行した。と同時にエポキシ樹脂の高性能、高純度の製品が要求され、半導体チップ用としては、汎用のクレゾール系ノブラック型エポキシ封止材やハンダ耐熱性に優れたピフェニル型エポキシ樹脂等、更に二酸化ケイ素のシリカ系封止材まで多岐に渡って現在開発されている。

新潟研究所の第三研究室にあっては、実は長年このエポキシ樹脂の研究を嘗々とやっていたのである。永井剛一郎の申請した電子材料特許は、関連特許だけでも当時十数件すでにあつたといわれている。

長岡瓦斯化学工業株の新潟研究所では、第一研究室が最も花形で、気相酸化反応の触媒研究が実施されていた。第二研究室はそこから誘導される化学品の応用研究、一番小さい第三研究室は、未来の電子材料や半導体ケミカルズを旗印に、エポキシ樹脂を中心とした樹脂(ポリマー)の開発に従事していた。

永井剛一郎のそうした一連の研究は、石油化学全盛時代にあつて、今ではとても考えられないことであるが、会社経営陣からの認知が得られなかったのである。新潟研究所の所長ですら、個人の趣味で研究をやつては駄目だと諭す有様であつた。そのために、地元の友人、北越信用金庫の理事長滝田政男から、不足がちな研究資金の援助を、永井剛一郎は受けざるを得なかったのである。

本来、こうした地元資金の紐付きの開発研究は、大学ではない民間企業に於いて即刻中止にいたすべきだったのである。長岡瓦斯化学工業が、元々地元財界人の資金力に頼って設立運営された経緯から、こうした遣り方がずるずると黙認された形となっていた。

いわば、それは北越信用金庫の理事長滝田政男と、長岡瓦斯化学工業新潟研究所の永井剛一郎との信頼関係、紳士協定にも似た簡単な念書で立ち上げた、第三研究室の開発プロジェクトであつた。名前も一人の頭文字を取つて、通称「滝永フープ」と呼ばれていた。

もし不幸にして、永井剛一郎の第三研究室の開発研究が頓挫したら、滝田政男は、私財を投じてでも、金庫出資分の穴埋めをする覚悟があつた。友人の滝田理事長の恩義に応えるためにも永井剛一郎自身が、どうしても社長に就任する必然性があつたのである。

奇人と言われた、大学の先輩永井剛一郎に心酔していた応用化学専攻の田口泰雄は、何故北越信金の滝田理事長との信頼関係がこれほどまでに強固な絆で結ばれていたのか、その理由さえ判らなかつたが、大学時代の所属研究室でやっていた排ガス除去用の有機化合物の研究を第三研究室で継続しながら、室長の永井剛一郎の腹心の部下として、いや唯一人の理解ある片腕として、エポキシ樹脂の研究にも当時隠れて邁進したのである。

通称「滝永フープ」が、隠密裏に作成した「投資事業有限責任組合」の設立趣旨書に関する資料を、新潟研究所で入手した一人の男がいた。その男の名前は、新潟研究所第二研究室所属の北山富士夫という男であつた。

北山富士夫は、元々自社よりも他社首脳陣との接点を有する、いわば、三菱商事の息のかかった諜報的役割の研究員であつた。この「投資事業有限責任組合」の設立趣旨書に関する情報が、後の合併相手三菱荒川興産の役員、官僚天下りの長崎幸三にもたらされるや、従来にも増して両者の秘密の連携がより深まる結果となつていたのである。

折りしも、長岡瓦斯化学工業と三菱荒川興産との対等合併の機運は、着々と進行中であつた。名目的には対等合併とされていたが、兜町の大方の見方は、資本力のある四

菱商事が合併劇の背後にあり、役員構成面から事実上の乗っ取りに近いと噂された。

当時も、企業の事業再構築を図る手法として、日本でも企業乗っ取りや買収による手法が従来から用いられることがあつた。元々負債企業の一時的救済という名目が主流の時代に、長岡瓦斯化学工業と三菱荒川興産との対等合併の舞台裏には、当時としては最新の経営手法が駆使されたといふ。今日の平成十一年の商法改正以後、日本でも盛んに行なわれようになつた株式交換に似た買収手法であつた。二十八年前当時の両社の昭和四十六年合併劇に、何とその手法が既に執られていたという噂があつたからである。

三菱商事は、東京丸の内の一等地に事務所を構え、国内外約八十ヶ国に二百を超すといわれる拠点を有す我国最大の総合商社である。連結対象会社は、五百を超え、世界で四万八千人の多国籍の人材が働いている。事業グループだけでも、エネルギー、金属、機械、化学、生活産業、新機能事業等の六つの事業グループで当時形成され、企業合併買収に関しても、最新の戦略を立案するスタッフを擁していた。

経営企画本部内の戦略財務室は、当時から、M & A (Merger and Acquisition)、企業価値向上策として有効な企業買収の欧米先進国のスキルとノウハウを溜め込んでいたのである。

中でも化学品事業グループは、更に三つに大別されていたが、石油化学を中心とする汎用化学品に大きな特徴があつた。傘下の大正七年創業の三菱荒川商事は、石油精製を主業務としており、長岡瓦斯化学のメタノールの供給を受けて事業展開を図る内に、同社の芳香族系化学品の技術にも魅力

を感じて合併話が浮上したものである。

資金調達方法としては、当時としては最先端の「滝永プロ」であったが、三菱商事の企業買収、M&Aのノウハウの前には、さしもの北越信金理事長の滝田政男の頭脳も、所詮敵ではなかったのではあるまいか。

「滝永プロ」の用意周到な動きが表面化するや、長岡瓦斯化学工業の首脳陣や同僚からは、合併に反対する一種の造反劇と見做された。

合併相手の天下り役員長崎幸三の進言もあつてか、永井剛一郎等の動きを、企業倫理規定に基づき今処罰するのは得策でないとされた。理由は、他の合併不満分子を刺激するからとの意見が支配的だったからである。

その結果、両社の昭和四十六年の合併劇の背景下で、地元期待の長岡オリジナル工業(株)の誕生は、肅々と二年後の昭和四十八年創業を迎えたのである。創業社長は、社内留まった永井剛一郎となつていた。

ようやっと長岡瓦斯化学工業(株)の社内ベンチャー企業という形で合意を取り付けると、新潟の北越信用金庫から融資を仰ぎ、永井剛一郎も自ら出資をし、兎も角資本金二千万で発足したのである。出資比率は、永井剛一郎五百万円、長岡瓦斯化学工業五百万円、北越信用金庫が一千万円で落着いた。背景にこうした紆余曲折があつたものの、最終的に、一つの新興会社が産声を上げるのである。

永井剛一郎は、相棒の滝田政男、部下の田口泰雄、登山家の梅沢紀夫を集め、会社設立のささやかな祝杯を居酒屋で挙げた。自分の人生で、最も晴れがましい夜だと思つた。

永井剛一郎等の策謀は一見お咎めなしということとなつて、「滝永プロ」にとつても、

一見幸いであつたと言つべきであるが、寧ろ試練は此処から始まつていたのである。然も密かに、彼等の動きを北山富士夫の手によつて監視される運命が待つていたからである。

長岡の町の周辺には、昔同様の油田開発の企業を支えてきた伝統が脈々と生きていたのである。当時からこれはという企画に乗つて、私財を投入しようとする篤志家が居たのである。

当然貯えのない永井剛一郎であつた。妻の真琴は、結局幾分誇らしく思えた男の熱意と変身振りに負けて、東京の親戚中を駆け回り夫永井剛一郎のために、自己資金の五百万円を調達してくれたのである。

永井剛一郎の腹心の部下として、いや唯一人の片腕として、エポキシ樹脂の研究にも当時邁進して、会社設立時には別部署にいた田口泰雄が、請われて後に行動を共にするようになるのは言つてもよい。

北山富士夫と役員の長崎幸三等の画策で、同じ三菱系商社傘下の三菱甲陽商事の資本が「滝永プロ」に新たに投下され、創業社長永井剛一郎放逐の巧妙な罠が仕掛けられたのは、それから四年後のことである。

三菱甲陽商事側から息の掛かつて、北山富士夫は一つの賭けにでた。

賭けの誘引は、やはりサラリーマンにとつて大きな嵐、長岡瓦斯化学工業と三菱荒川興産と対等合併が契機となり、長岡の地方都市から合併劇を目の当たりにした為であろうか。この合併劇は、北山富士夫の眼には、千載一遇のチャンス到来と映つたはずだ。

己の显つた心の大地に種を蒔き、永井剛一郎等の「滝永プロ」旗揚げとともに心の裡に大きく芽生えさせた邪悪な野心であつた。(このまま

新潟研究所の研究員で終わりたくない！雪国長岡で燻つてはいられない。男が勝負できるのはやはり生れて土地勘のある東京か神奈川だ。そこで自分の適職を見付けるのだ。(有る意味で、北山富士夫としては、自分の研究開発の能力に、きつぱりと見切りを付けていたともいえる。

それは、キャリアプランをじっくり練つた結果というよりは、むしろ、合併劇という動乱を上手く捕えて時流に乗る直感、一口に「機を見るに敏」なる北山富士夫本来の個性であつたのかもしれない。営業職向きの衝動的な夢であり野心であつたのかもしれない。

毎年、年一回人事部に提出する、自己申告制度の考課査定票の書類に「本社開発営業職への配転希望」を記入し、上司の面談の際もその意向をはっきりと口にした。

第二研究室の上司も、北山富士夫の研究成果が芳しくないのを知つていた。

学会の論文発表は皆無、研究報告書の月報も毎月怠り、特許出願も殆どなされないこの男の将来は、ここに居る限り暗いと。日頃の飲み会でも、弁がたち座を仕切る元気な宴会部長北山富士夫の面接を終えた上司コメントは、(口八丁手八丁だから)、「研究職よりも営業職に向いて」と判断、要配転」と、末尾の人事考課査定票に記入された。

フープー鳥の賛美歌・四

真琴は、十年前の亡夫の回向のために、始めた己の心の旅を、中々終えることができないうでいた。行間に呪術めく悪霊の囁きを感じ、何度途中で、その旅を引き返そうかと思つた

か知れない。旅の相棒も居らず、唯独り行き着く先に何があつて、誰が待っているのか不安だつた。その癖、怖いもの見たさの好奇心が先行し、深夜まで我を忘れるように、この本の展開にドツプリと嵌り込んだ。

何処の誰から送付されたか依然不明の、この奇妙なイスラエルの歴史書を読み始めたのはいいが、どうやら謎のトンネルに迷い込んだよう、出口の明りが一向に見えてこないのである。臨死体験の心の旅なら、暗いトンネルの向こうにはほのかな光が見えるというのが・・・。

(頁39中段後から21行目より続く)

統一された種々の水道システムに、フープーが予測したように、丸三年は必要であつた。最初の十七ヶ月は四角い主竪穴を掘るのに費やされた。その対角線、二十九匹をフープーは苦勞して旗の線に合わせた。始めこの大きな穴は、土壘に堆積した屑の山を通過しなければならなかつた。掘っている者達のヘブライ人が、この地にエール・シャツダイ神を持たんだ青銅器時代の遺物を掘り出した。次いでカナン人がパール神のモリスを建てた初期銅器時代の遺物、そして最後にウーの家族がエール神の石を始め建てた石器時代の遺物を夫々掘り出した。掘削の途中で、フープーは時々興味ある遺物を見付け、妻に持ち帰った。だから彼等の主部屋には彼が集めた古い像や金属片の小さな棚が並んだ。フープーの意見では、他人はそうは言つてはいないが、穴の側壁に沿つて下に滅亡した多くの証拠を見る事ができる。特に彼が興味を抱いたのは、表面から八分真下に全体に広がる煤の層があつたことだ。メシャブに言つた

「私はこの時代に旧マコールの町は焼き尽く

されたに違いないと考える」

彼は自分の家族に今も伝えられている詩と伝説を思い出した。それはパール神とエール・シャツダイ神の戦いで、大火があつたことである。他人は町がそんな昔に大火があつたのなら、その灰は雨で流されていた筈だと言つ。彼等はその議論を確認するため、火を付け灰をつくり、鉢の水で完全に洗い流して調べた。その実験の結果、フープーは答えを見出した。

「勿論、僅かな灰なら流れ去る、此処からあつちへと。しかし、此処もかしこも全てが灰なら、一体何処へ行く?」

その時奴隷達は硬い岩を掘つていた。

此処でモアブ人のメシャブが真価を發揮した。

この地域の岩はやや柔らかい石灰岩で、水に浸すと堅い粘土のようになる。鉄の刃の付いた道具を岩の中に叩き込むと、大きな固まりが割り出される。後に家を造るのに使用される切り石だ。

こうして石灰岩の層を掘る一連の手順を見出したのは、メシャブだつた。穴の床を一定の方向に傾け水が石の割れ目に滲込むようにする。それから床を反対の方向に傾け水の滲込んだ部分を掘るのである。メシャブはロープを装備して切り出した石を運び出した。一組の女達が井戸に降りる螺旋の坂と交しない登るための階段を造つた。メシャブは主任以上の働きをした。全ての現場で彼はフープーの右腕になつた。フープーは遂に彼が奴隷の収容所を離れて、緊急事態に備えられるから、新屋の後の小屋に移動しないと提案した。始め妻のケリスは人殺しの奴隷を近くに住ませるのを躊躇したが、昔住んでいたあばら家のことを思い出して賛成した。

総督はこの案に反対したが、この仕事はよく熟知した者の監視が必要なのだ、フープーは懇々

と説得したので、背の高いモアブ人は彼等の家の後に住むことになった。

ある夜、この二人の建設屋は地面に口を開けている掘つた穴を調べた。フープーが言つた。

「来週、トンネルに取り掛かる。君は此処から入れ。私は井戸の方から掘り進もう、そしてこの地下の何処かで合体しよう。その瞬間こそ、メシャブ、私は君を自由民として抱き締めたい」

この奴隷は何も言わなかつた。彼はどうやってこの暗黒の中、硬い岩の中をトンネルを真っ直ぐに保てるのか疑つていたからである。(どのようにして、二人は互いに反対の位置から出發して、大地の奥深く互いに会えるであろうか?)

竪穴が完成して、フープーとメシャブはその穴の底に立ち、上を見上げた。小さな四角い空その青さは方向のヒントを示してくれない。

「ここからでは、旗の列は見えないし、井戸の方向も判らない」

メシャブの疑問にフープーは応えて言つた。

「私に秘策が無ければ、此処までやらないよ」

フープーはメシャブを井戸の外、町の外から高い木の生えている遠い丘に連れ出して聞いた。

「この木の高さは?」

「約三十キューピットかな・・・」

「そつだろつ」

メシャブの判定にフープーは同意した。この木を切り倒すために、奴隷の助っ人を連れ帰つてくるのを腰を下ろして待った。モアブ人が行くくと、木の前で遜り手を幹に当てて祈つた。

「木のパールの神よ!我々の道を探すのになどつか力をかしたまえ!」

これから使つ道具に対し、一時間以上も祈つた。木を倒し枝を払い、奴隷達が町を転がし始めた。それを後門に通した時、フープーは言つた。

「直ぐに四角い縦穴に持って行け！」

そこで穴の口から対角線に置き、その方向が六本の旗の示す線に重なるようにした。旗の列が直接に木と平行になったから、この木の線に従うトンネルは井戸に当たることになる。

「君の仕事はこの木を基準とすれば良い」

「最初の日の後はそうする？掘り進めばもう上の木は見えなくなる」

そこでフープは偉大だった。二年間研究し尽くした秘密、非凡なる知恵を見せたのである。

丈夫な白い紐の玉を持ってこさせ、その一端に重い石を括り付けた。それから、その木が形成する対角線の南の端に行き、もう一方の端を幹に括り、ゆっくりと穴の底に付くまで石を下した。更に対角線の北の端に行き、同じ動作を繰り返した。堅穴の底に二つの石が日本の垂直な紐を張るようになった。その間の線が木の線、即ち六本の旗の並びと正確に同じになるようにした。さてこうして、対角線の方向を定めるフープの秘策が実った。この仕組みで彼は、二つの張られた紐ができるだけ離れるようにした。そうすれば誤差を最小限に抑えることになる。もしメシャブが掘る時に、二本の張られた紐の線に沿って治まるようにすれば、彼は井戸を見付けられるに違いない。

このモアブ人は嬉しさの余り叫んだ。

さながら獵師が鹿を見付けた時、船長が港を見付けた時の喜びようであった。

「これならやれる！」

メシャブは、急いで穴の底に降りて、二本の張られた紐が、明白で確実な線を作っているのを確認した。彼は小踊りして言った。

「夜は紐の足元に二つのランプを置けば、地中の中心まで我が道を見通せる。幾ら暗くとも到達できる」

メシャブは、この技術者、歩くとフープ鳥のように首を振るこの男をじっと見詰めて、計り知れぬ男の知恵に尊敬の念を抱いた。

夏が終り、二年目のエタニンの日の輝く朝、大きな河だけが未だに水を湛え、人々が畑を耕し冬の麦の種を蒔くために雨を待っている時、モアブ人メシャブは堅穴と井戸を隔てる石灰岩の障害に最初の楔を打ち込んでいた。それから十二ヶ月間、彼は自分の部下に、岩を砕き下にトンネルを掘る仕事に従事させた。

最初の楔を打ち込む時、フープは「バールの神よ、この暗黒の中を導き下さい！」と祈り、妻のケリスは穴の高所で「ヤハウエの神よ、夫に成功をもたらし、夫が私をエルサレムに連れて行ってくれますように！」と祈った。

さて、フープが井戸の方に移動してみると、其処にはもっと難しい問題が待ち構えていた。源泉的に、マコールは町の水を地面の伏流水から得ていた。しかし、幾千年も経過すると、二つの変化を生じた。泉の周りの土の層が年々堆積して高くなり、毎年木の伐採も増加して、地下水脈が低くなっていた。そして最初の水道壁が、土壘に建設される時代には、泉は深く掘り下げられ、石で築かれた井戸になっていた。

作業員は旗の列を必ず見なければならなかった。フープは水道の壁の屋根を剥ぎ取った。井戸の周りを巡る壁も取り壊した。その場所が開かれて、フープは狭い堅穴を真っ直ぐに水の表面まで掘り下げた。井戸の表面まで到達した時、彼は二十万年前から人が住んでいた洞窟を発見した。先祖のウーが麦の耕作を心配した時代に、この初期の洞窟は既に埋められ忘れられていた。フープは、再びそれを閉じて水面まで下がっていった。目的の場所に到達すると、奴隷達に、立って

歩ける高さ、女が水瓶を置く置ける広さの空洞を掘り出すよう指示した。更に堅穴の開いた口で、木を旗の列と並ぶように置き、二つの重り付きの紐を井戸に垂らした。これが望むべき方向を示してくれる。この堅穴の直径は、メシャブの主堅穴の対角線に比して大変小さい。張られた紐を充分離せないから、範囲はそれ程正確ではない。

フープが井戸から仕事をする理由がそこにあった。一日に、八、九回腹這いになり範囲をチエックした。それから粘土版を参照しながら、奴隷が掘り進む傾斜角を決定した。その後は、遅かれ早かれ、上方に掘り進むフープと、下方に掘り進むメシャブが出会うのを信ずるのみとなった。

このようにして、方向と傾斜の問題が解決すると、もっと大きな問題が残っていた。フープは常々水道システムは、多くの女が頭に瓶を乗せて行き来するのに対応させようと考えていた。

この案だとトンネルの高さは約十幅六が必要となる。如何に巧妙にメシャブが堅穴から掘り下げるトンネルを掘り、フープが泉から掘り上げて、こうした狭い断面で両者が正確にぶつかるのは奇跡に近い。二人の胸には、両者が行き違いになる公算大となることがあった。

そこで、フープは、最初から大きな穴を掘らずに、小さな穴で探り進むことを提案した。岩を通じてお互いが感知できる音が聞えるまで。多少ずれても、音を頼りに修正する。メシャブはこの提案に賛成した。

さて、第三年目の初め、地上の野に春の雨が降り、醸造者は新しい酒造りの麦を求めているアピブの月に、二人の男は高さ四幅二寸の小さな穴に没入した。熟練した奴隷でも、屈んだ状態では仕事ができない。殆ど鎚が振れなくなる。一人が岩を掘り終えると、他の奴隷が肩の

中を這っていき、新しい鑿を岩の表面に当てる。二十四時間交代でこの作業を繰り返す。

毎夕、日没が町をブロンズ色に染める頃、掘削の最も感激の一瞬が訪れる。奴隷達が小さなトンネルから引上げと、モアブ人メシャブが主竪穴に下り、大槌を持ちトンネルの先端まで這っていき、一方フープーが井戸を下り、自分のトンネルの先端まで大槌を引き摺っていく。互いの位置を大槌で叩いて位置を確認するためだ。やり方はこうだ。

二つの入口の城壁の上に奴隷が白い旗を付けた棒を持って立っている。穴の開口部にいる奴隷が、大槌到着の確認後に城壁上の男に合図をする。城壁の男は旗を左右に振り、鋭く町に向って振り下ろす。開口部の奴隷が下に向って怒鳴る。「メシャブ、メシャブ、お前の番だ！」声が穴の奥に深く響く。トンネルの先端のメシャブは、ゆっくり九回硬い岩を確実に叩く。この音をフープー側の誰かが聞いてくれるのを望みながら。この作業を交互に繰り返す。「フープー、フープー、お前の番だ！」と。しかし、二人の間の大きな岩は、互いの大槌の音を空しく吸収してしまつたのである。毎日黄昏時になると、九の信号を九回送り、穴から這い出てきて会い、どういふ状況を確認しあつた。どの位地中を進んだかは紐で計れるし、その紐を水道の壁に沿って延ばすことができ、地面ではトンネルの先端が何処にあるかおおよそ分かります。夜になれば、互いの紐を並べて表面でどれだけ離れているかを推測した。

彼等は今夜略六十に近付き、石灰岩を通して音が聞える場所に到達しつつあつた。次の日没には互いに掘る音が聞えるのではと期待し始めた。しかし、聞えなくとも正しく前進しているに違いないと確信が持ててきた。彼等の仕事は強い信念の行為であり、それが最初の二年間を支えてきた。

そして毎朝新鮮な気持ちでトンネルに向つた。多分、今日こそ最初の音が聞えるに違いないと。

しかし、アビブの月が過ぎ再びジブの月がきても、暗いトンネルから出て新しい花々に喜びは感ずるのだが、二人のリーダーは岩を通って音が聞えないので元気を無くしていた。何か間違つていないか？互いに離れすぎているのか？水平面で狂いが生じているのか？大きく外れているのか？

辛抱強く彼等は作業を再点検してみた。誤りの可能性を正直に調べてみた。旗で信号を送り、紐の長さを再度計り直して、方向が正しいことを確認した。何処かに僅かな誤差が生じているに違ひなかつた。大変な注意を払って井戸からの方向を点検した。トンネルに長さがあると、始めの僅かな狂いが悲劇的な誤りとなる。正確を期すことは不可能であると結論に達した。

フープーは井戸の近くでうつ伏せになり、メシャブはその傍らで紐を持って立っていた。

この瞬間、ヤバルは本当の技術者らしかつた。「このトンネルは正しいに違ひない。間違ひはない。我々は合致するに違ひない。しかし、もしそうでなかつたら、それは私が失敗したのだ。私の目に狂いがあつたのだから私の責任だ」

しょんぼりとしてフープーは、この奴隷と別れて井戸の外に出た。兎に角疲れていた。途方に暮れた男であつた。トンネルと湿つて熱に弛んだ旗に背を向け、彼は山に登りバル神の祭られていた高所を訪ねていた。そこで独りで、この土の神、この岩の神、この地中の間違つた暗い掘穴の神の前に面を伏せた。

「バルの神よ！道をお示し下さい」
彼は遜つて訴えた。

「私は可哀想なもぐらのように土の中深く迷いました。私の目は見えません。偉大なバル

ル神よ！この暗闇をお導き下さい」

彼はこの古い神と長いこと語つていた。彼の祖先は、この神から沢山の慰めを得たのである。

夜が更けてバル神が大昔に定めたように星達が空を動いた。祈りを続ける内に、ヤバルの自信が甦つてきた。夜が明けてきた。彼には、バル神が恵みを垂れたように思えた。そして彼は山を降り始めた。丘の上から朝日が射して、その光がガラリアの谷を埋め、オリブの木々を美しく灰色に染め、高い檜の梢から鳥を飛び立たせた。城壁の中に居心地良い小さな町、朝風に赤い旗が少しはためいた。この日の輝きは、彼にとつて意義深かつた。ヤバルは跪いて叫んだ。

「ヤハウエ、ヤハウエ！私は貴方の子、貴方の道具、思召しの通りにお使い下さい。貴方の目的を遂げるためなら、私の頭を暴れる雄牛のように土に突き刺して下さい。この日をお与え給つた、偉大なるヤハウエ！」

ヤバルは神と語つた高地を離れ、井戸の洞窟に行き、もう一度トンネルに身を横たえ、とても重要な紐を調べて叫んだ。

「間違ひない！違つていないはずがない」

奴隷を一日中働かせ、彼は自ら穴の先端で仕事をした。夕方になると城壁の上の奴隷が合図をし、井戸の口の奴隷が怒鳴つた。「フープー、フープー、お前の番だ！」と。合図で、彼は大槌で岩を九回叩いた。終わるや否や向こうから音が聞えてきた。原始時代の岩の根元から、別の予定外の音だつた。二人は互いに岩を叩いた。合図を無視して、硬い暗黒を通してお互いが聞いた。二人は笑い始めた。笑い声は最初は井戸で、次いで竪穴から、それから町中に、旗が壁の上で打ち振られていた。メシャブとフープーは、紐が互いに近付いていた広場で会つた。その紐の通り

であったと分かった。それは、彼等が随分前に計画した通りだったのである。

その夜、フープーは奴隷のモアブ人と別れを告げ、豎穴の傍の家に歩いて帰った。南方の奴隷に「さよなら」を言った。家に戻って久し振りに風呂に入った。ケリスが察して素晴らしい食事を用意してくれたが、空腹感はなかった。

「やったぜ！ケリス、我々は数週間で貫通する」
「私は歓声を聞いて、縦穴に走っていったわ。総督も来たわよ。大変な誇りだわ！」
ケリスはヤバールにキスをして囁いた。

「今日はエルサレムがより近くなった日よ」
用意した食事を妻が盛んに勧めたが、彼は興奮のためか、その夜は食べられなかった。彼はこの麗しい妻をベッドに運ぶと、その夜は直ぐにマコールの幸せな男になった。

音試験で、フープーとメシャブは方向を訂正しながら、二つの試掘トンネルの貫通に最後のひと働きをしていた。岩を叩き出す鉄の道具を使いすぎたため役に立たなくなり、仕事は遅れた。二人は新しい道具が必要だと思った。その鉄の道具を入手するために、誰かがアッコの港に行き、フェニキュア人と会わなければならない。アッコが、この地域で鉄の道具を入手する唯一の場所であった。正等な値段交渉も要するので、フープー自身で行こうと考えた。そして最初は、一緒にメシャブを連れて行く積りであった。彼の今度の功績は大きく、その報酬としてである。しかし、総督が反対したので、結局一人で行くざるをえなかった。この重要な時期に、今迄以上に熟練者が傍にいないと監督出来る者が居ないというのが理由であった。フープーは本当は、重要だった時期は六ヶ月前で、(音を聞ける者なら誰でも今は仕事ができる)と思って妻に言ったが、妻が総督の意見に従

うように促したからだ。

フープーの興奮した出立の様子をみると、何処か遠隔の地に旅立つように見えた。暑い季節が来るにも拘らず、裾の長い上着をまとい、短剣を差し、驢馬に乗り、引き割りオート車を商う二人の商人が、自分の回りに隊商の列を組むのを待った。彼はあたかも数年間会えないかのように、妻に別れを告げて手を振った。城壁の上のモアブ人に指示をすると、総督にも挨拶をした。彼は驢馬を蹴り、膝に上着をたくし上げて出発して行った。

アッコはマコールから西八マイルにある。

幾千年も隊商が通ってきた平易な道に沿っているが、両地は歴史上も同一の国になったことがない。殆どの時代、マコールは内陸の人達の西の終点の地とされた。長い交渉の結果、今年はまだまへブライ人がマコールに、フェニキュア人が港のあるアッコにいる。別の年には、別の組み合わせとなるだろう。制海権は死生を制するから、各部族や国はアッコを確保せんとして戦う。それに反して、マコールを攻めるとなると十月や十一月でも嫌気がさす。そのため、数千年間、マコールからアッコに行くには大変な旅行で、未知の道と外国語の探検の旅だったのである。

マコールの二マイル西で、ひき割りオート車の商人の隊商は国境警備隊に出会った。そこには、フェニキュア人の兵隊が鉄の盾を持って警護にあたり、検査するとフープーの短剣を取上げ、代りに粘土版の与り書を渡し、しぶしぶ彼を通過させた。あと数マイルで税関吏が所持物検査をした。彼が持込める金の量を記録し、別の粘土版を渡した。それを帰りに提示すれば通過の権利を保障する、通行手形であった。このフェニキュア人は丁重であったが、異国人の検査には厳しく見えた。フープーは彼等に敬意を払った。

直ぐに地平線からアッコの城壁が見えてきた。ベラス河が海に注いでいる平野に位置している。後に西に突き出た岬に移動して歴史上有名な町となるが、この時代でも魅力的な町であった。地中海の様々な港から、この港にやってきて、ティレやアシケルトンの市場に合ったいろいろな商品を積んでいた。遠くの炉で溶かされた鉄が、へブライ人に届くのはこの港であった。フープーはアッコの店で、奴隷達に必要な道具を見付ける積りでいた。

町の入口で彼は三回目の停止を食らった。

遠隔地にいる検査官が、渡した預かり書に出発日を書き込んだ。彼は酔っ払わないように注意された。彼等はかなりの量のビールを飲んで悪酔いしないが、来訪したへブライ人は数杯で暴れ出すことを知っていたからである。フープーはそうすると約束して、アッコの町の興奮した世界に入ることを許可されたのである。

彼は先ず波打ち際に行った。この場所は、子供の時魅了された場所である。ここに暫くいると、昔のように感激した。大海原を漂い浮ぶ家が、船乗りの指示で港に入ることができるのだ。彼は帆の原理は未だ分からなかったが、船員達が陸地に近づくとどうやって速度を落すのかが不思議であった。彼は船に喜び、甲板から見慣れない大勢の顔が、彼を見下ろすのが嬉しかった。船が鉄の荷物を下ろしているのを見て楽しんだ。

岸壁から渡された板の上を、半裸で登る人達の何と変化に富んでいることよ！彼はエジプト人、アフリカ人、カナン人、フェニキュア人は分かった。しかし、未だ半ダースもの異なる人種がいる。彼が見たこともない、いかつい肩をした頑強な人々である。彼等は、キプロスや遠くの島から来たに違いない。それに彼等は彼に

判らない言葉を話していた。この時代、アッコは国際港で、マコールから来た田舎のヘブライ人にとっては、正に不思議な国であった。

フープーは港を離れ大通りに入り、店を覗いた。豊かな品々が彼には珍しい。駱駝を東方の色んな場所に派遣している宝石屋には、アラビアからのトルコ石、クレタ島からの雪花石膏、ギリシャ商人の紫水晶や紅玉髓、パントからの玉髓がある。彼はエジプトからのファイアンズ焼き(彩色陶器の一種)と瑛瑯を手に入れた。夫々異なった色の硝子糸で編んだ硝子の網は、アッコの店で見付けた物の中では最上の品物だった。表面を斜めにカットして磨いてあり、様々な角度から見ると内部の微細な編み目模様が、きらきら輝いた。

「これを妻に欲しい」

彼は、言葉が通じるか分からずに、遠慮がちに店主に言った。この宝石屋は数力国の言葉を知っていた。これで商売には十分である。彼には、この編んだ硝子はトルコ石より魅力があった。馬鹿高いのではと心配しながら交渉を始めてみると、意外に安いので驚いた。

「ここで作っている」

この宝石屋はそう言って、フープーに奴隷達が付いた硝子を吹いて、蜘蛛の巣のように紡いでいる庭を見せてくれた。

敬意を払って最後に金物商に着いた。

フェニキュア人や更に南の人達が、イスラエルの地を占領したのは、鉄を使用したからだ。ダビデ王はペリシテ人の傭兵のとき、鉄の使用を学び、この金属を十分貯めてから、大部分の土地を奪還した。この黒い金属は、アッコの町の占拠には、不思議な位様々な場面で黄金よりも役立つ。そしてそれこそが、未だにフェニキュア人が、海岸地帯での優位性を保持していた理由であった。

金物商はフープーを疑わしそくに睨み付けた。

ヘブライ人はこの辺では珍しく安易に鉄を売ることは禁止されていたからである。「兵器に使用しない限り」と記された、書名入りの販売許可書を提示したが、フェニキュア人は字が読めなかった。しかし、状況を分かってくれて、一元の客でも自由に選べる品を並べた場所を示した。両手を腰に当て肘を張って、禁止場所に立入らないようにした。そこには槍の穂先、剣の刃、矛等、フープーには考えもつかない他の武器と一緒に積んであった。このフェニキュア人は、訪問客に密かに自慢気に見せたがった。フープーは、彼等のその武器の豊富さに圧倒されバールの神に祈った。

「鉄の武器を持った彼等が再び襲撃する前に、水道システムが完成しますように！」

限られた商品群から、フープーはトンネル完成に必要な鉄の工具、ハンマーと楔を見つけてそれら沢山のの工具を山に積上げ始めた。気まぐれに霧囲気が店に流れた。予期した店主は、近所の店主を店に呼び込んでその光景を目撃させた。当時鉄は大変貴重で、鑄込んで研磨された後に、錆びの発生を防ぐために動物の脂が塗られていた。フープーが手で触れると、指に脂が付着したので手を引いた。

「問題ない！豚の脂だ」

当時、ヘブライ人は豚を食べることは禁じられていた。上手く調理しないと死亡することを悲しい経験から学んでいた。豚への嫌悪感もあつた。フェニキュア人や他の海辺で調理法を知っている者にとっては、この美味しい食料を好み、罫を仕掛けてはヘブライ人を当惑させて喜んだ。金物屋は正にそれをやりつつあった。

「それは豚の脂だ」

店主が繰り返したので、フープーは身を引いた。

貴重な工具を見て、取上げざるを得ず、山に積んだ。手が豚の脂でギトギトになったので、その脂を他の道具に擦り付けた。フェニキュア人が笑い始めて、手を拭く布を貸してくれた。

「鉄好きには、豚脂は絶対に害がない。お前が驢馬を連れてくるまで、番してやろう」

フープーは金物屋を出て町を見物した。

彼の隊商の警備人であった。宿泊場所を教えなかった。彼は急いでマコールに帰る積りは無かった。通常なら、朝マコールを出立して、午前中にアッコに着き、用事を済ませて夜までに家に帰れる距離である。でもヘブライ人にとって、フェニキュアの町を訪れる機会も少なかった。フープーは許す限り長く滞在しようと考えていた。海岸べりで宿屋を見付けて、ゆっくり珍しい魚を食べた。二人の美しい娘にビールを注がせているエジプト人の商人を見付けて、注意深く様子を観察した。口の端から茶色の液体が溢れる。残りのビールを舗道に捨てると泡を吹く、フープーはその泡に惹かれた。その光景は、水が純化されワインが改良された液体の精髓のように見えた。

アッコではヘブライ人は、ビールを飲んではいけないという警告を思い出した。彼はエジプト人から目を反らし、魚のフライに取組んだ。

それは塩気が強く喉が乾いた。悪いことには目の前にアルメニア人がやってくると、注文したビールをぐいぐい四回で飲み干した。底に残ったものをフープーの前で舗道に捨てた。

「滓を上手く濾していない」

アルメニア人は、二杯目を注文しながら言った。「そつだ、その通りだ」

フープーが同調すると、彼は大麦の皮を取上げ齧って見せて、話かけてきた。

「ビール飲みたいのか？」

「よし、注文しよう」

フェニキュア人の給仕が、冷たいビールの大ジョッキを運んできた。

「魚と一緒に美味いか？知ってるだろうが、こうした場所では、塩味を強くしてビールが欲しくなるようにしているのさ」

真夜中まで、フープーはまだここにいて、ビールを飲み、船乗り達とエジプトの歌を唄って談笑した。フェニキュア人の警備員が来たがお構いなしで歌いつづけた。彼は警備員に言った。

「故郷では皆からフープーと呼ばれている。

俺はフープー鳥だ！」

彼はテーブルを離れると、頭を上下に振りながら鳥の真似をしてふらふらと歩いた。太った尻が月明かりで揺れた。彼は酔って美しい自慢の妻のこと、一見皆から良く言われない相棒のモアブ人を信頼していること、更に妻に土産に買った硝子細工の包を見せた。彼は涙目になって叫んだ。

「いわせてくれ、俺は世界一の妻を持っている！」

マコールから来た隊商の二人の商人が、彼を探しにきた。フェニキュア人は彼等に言った。

「この小柄な男を連れて帰った方がいい」

二人で彼を抱きかかえてしっかり立たせた。

フープーはよろめく足で立上った。船が湾に錨を下ろしている海岸に沿って商人達は彼を歩かせた。フープーは焦点の定まらない目で見回し、その夜が美しいと分かった。呂律の廻らない舌で、商人達に愚痴を言い憤慨し怒鳴り始めた。彼はその場に崩れ落ち、もう何も言えなくなっていた。

「長い間トンネルを掘ってきた・俺はメシャブとここに来たかった・彼はここにいてるべきだ！メシャブが仕事の半分以上やってくれた」

フープーがアッコに居残っている間に、トンネルの仕事は進んだ。メシャブにとって、肥え

た小柄な建設屋が居ないのが幸運だった。メシャブは先ず自分の切羽に行き、井戸側の切羽先端からの音を聞き、それから井戸に行き自在にフープーのトンネルに入り、堅穴からくる音を聞いた。音が強くなるに従い正確に位置を知り、フープーのトンネルの方向を僅かに修正しながら、二つの計画通り合体するようにした。もしフープーが居たなら、彼の掘ったトンネルが目標から外れているのが判明した時はちょっと面倒だったに違いない。しかし、フープーの基準の紐を調べてみると、実に正しく方向を定めているのが分かった。その正確さに驚嘆し仲間と言った。

立つ朝、この小柄な技術者は言った。
「メシャブ、夕食をケリスととってくれ」
しかし、フープーが笑われてはいけなさと配慮して、そうしたくなかった。最初の夕食は奴隷収容所で食べた。
翌日、奴隷の少女が来てメシャブの戸を叩き手紙を差し出した。
「女主人は食べ切れないほどの料理があるので、少しでも食べて戴けませんか。」
メシャブがモアブ人の上着を着て行くと、フープーの家の客間に通され、ケリスの親切な挨拶を受けて夕食を食べた。メシャブはモアブでは、畑地と絞機を有する地位のある男であった。
「それほど、遠くない時期に私は仲間と一緒に帰りたいのです」

「この男は天才だ！彼は岩を貫いて道を嗅ぎ分けられるに違いない」
毎日に夫々のトンネルの音がはつきりし始めて、暗闇の興奮はしだいに高まっていった。
毎日の仕事が終わると、堅穴から出て、木がしっかりと旗の線に並んでいるの確認するのが彼の習慣であった。二つの紐をゆすり垂直になっているのを確認し、城壁に登って水道壁を調べた。この壁は地底に静かに横たわるトンネルが機能したら、直ぐに壊される手はずになっていた。それから顔を拭いて、ヤバル、つまりフープーの家に行く。建物の後の離れの部屋で、彼は泥を洗い落とし、モアブの災厄から救ってくれた上着をまとう。重いサンダルを履き暫く座って、トンネルが完成した暁の日を考える。そして自由の身となる日を。

捕虜生活は退屈だったが、威敵をもって過ごし神に誠意を込めて民の未来に捧げた。度々夜になると、モアブの上着を着てゆくり通りを歩いた。門を出て路を横切り奴隷収容所に行った。そこで支給される粗末な食事をとった。二つすること仲間を励ますことができた。フープーがアッコに旅

「あとどれ位、掘るお仕事があるの？」
「試掘抗のトンネルは多分・今月には貫通でしょう。どの程度合っているか調査したら、本坑のトンネルに拡張します。特にどちらかに偏っていないければ・多分偏っていないと思っっていますが・」
彼は自分等の試掘抗が、上下、左右いずれの方向にも広げられることを説明した。
「まあ！とても良く考えたこと・」
「貴女の夫は実に賢い人です。私は今なら何処に行ってもこれと同じトンネルが掘れます。でも予めこんなに多くの細々とした問題点の予見までではできなかった・」

「モアブにお帰りになったら・貴方の家族・」
と言いかけてケリスは躊躇した。
「私の妻と子供達は、貴女方へブライ人の襲撃で殺された。だから私は死ぬ積りで戦った。有る意味で、貴女方が私を生かしておくのが不思議な位だ。アムラム将軍が私を見た時のことを

覚えておられますか？」

メシャブは、ケリスが將軍の名を聞いて頬を赤らめるのに気付いた。彼女が將軍と接したやり方に侮蔑の念を抱いたことを思い出したが、黙っていた。彼は四十八歳で人生経験もある。血の気の多いヘブライ人の家族の中で、長い年月の間には感情の起伏がどの家族にもあることを知っていた。彼等が夜話す寝物語、先祖の生き方、サウル王やダビデ王が若い時にヘブライ人を如何にして結集させたか・彼等は移り気な民族である。人の手を水銀のようにすり抜けて、しつかりと掴めない。仮に、フープの綺麗な妻が何等かの関係をアムラム將軍と持ったとしても、それは彼女の問題だ。フープとケリスは今満足し、しかもお互い同士愛し合っている。

ケリスは、一度中断の後に更に続けた。

「貴方はトンネルが完成したら・・・」

「・・・」

「そうよ・貴方は自由民となりモアブに帰る。フープは・ヤバルはエルサレムに招待されるでしょうか？」

(そつだこれだ!)今こそメシャブは何が起こっているか了解できた。(ケリスは首都に行きたがっている。どうして?エルサレムは決定がなされる処だからか?重要な男や女が集まっているからか?彼女は望みを叶えようと將軍に取り入ったのだ。その男は戦いで死んだから、その道は断たれた。)この大きなモアブ人は微笑んだ。(女が未知の場所に憧れるのはたいしたことではない。自分や夫の望みを機会を利用して叶えようとしたのも何時までも非難されべきでもない)メシャブは大体この綺麗なヘブライの女が好きだった。今更に好きになって・からかってみたくなくなった。

「どつして笑つのか?」

「貴女は私自身のことを思い出させてくれる」「私か?」

「子供の時、よその国に憧れた。モアブの砂漠は退屈で、何時もエジプトや海を・エブス人の首都のエルサレムを夢みていた。遂に私はエルサレムに行った」

「貴方は行ったの?」

彼女は低いテーブルから身を乗り出して聞いた。「ハイ、雨の日首枷を着けて険しい丘を行進させられた。もし王が私の正体を見破ったら、私は殺されていただろう。私はエルサレムを見たケリス、私と同じ目にあつて、エルサレムを見るようにならないように注意した方がいい」

「私にそんなものに憧れないようにと言いたいのですか?」

「私が首枷を着けてエルサレムを見て以来、海に行きたいという私の二番目の夢が実現する時は、フェニキアの船に奴隷として繋がれている時だろうと言いつつ続けている。人は何時でも望む時にエルサレムを見ることが出来る。首枷を喜んで受け入れるかどうかなのだ」

「私はそこへ行く。私の望み通りの条件で・・・」三日目の夜、メシャブは再び夕食の招待を受けた。彼とケリスは多くの事柄を話題にした。

彼は彼女が素晴らしく知性があることに気付いた。しかし、こう言うことも分かった。もし、見知らぬ人が、人生にもつと夢を抱いてマコールにやってきたなら、この女を確実にものにすることが出来るだろう。彼女は哀れな受身の態度を示しており、マコールの町にも、また心の優しい夫にも飽いていたに違いない。

永井真琴は、この奇妙な心の旅に出てから何度となく、書物の中に自分等の姿、夫の永

井剛一朗と妻の自分の姿をイメージした。

自分等だけでなく、過去の短い人生の舞台に登場してきた、身近な人物の姿すら重ねて思い浮かべることが出来た。

長男剛志の両親に向けて発せられた親しみを込めた信号、「マコウ」、「フープ」に特別な意味があるのではないだろうか?「マコウ」は自分の名、真琴が訛った言葉なんかじゃなく、この紐解いた本の舞台、遺跡の町「Moor」を差しているのでは?そして「フープ」は、夫を差す幼児語でなく、鳥の名「HOPE」の文字通り暗示だったのではあるまいか?

何故この書物にその力があるのか?何故今の世界と遠い遠い昔の過去が、偶然とはいえ結びつくのか?しかもイスラエルの建国の時代にまで遡つて・一体この書物は、この先残された余生にどんな影響を与えるのか?どんな結末をもたらすのか?止め処も無く疑問が湧いた。

あの豪雪の長岡時代、引き籠りの息子長男剛志、あの精神科の医師が施した催眠治療の部屋で母親が体験した現象を何とはなしに思い出すのであつた。息子の身に起つた幻覚・・・それが母親の真琴にとつても、正に超常的と思えない不思議な現象だったからである。

真琴は、この奇妙な心の旅の前途に、やがて呪われた不吉な兆候が現われないよう祈つた。真琴の鬱症状が再発したようだった。

身罷れば夢幻超常の雪の果て・・・踏基

前編終わり